九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—1—

甘木市所在西原遺跡・上々浦遺跡の調査

1 9 8 2

福 岡 県 教 育 委 員 会

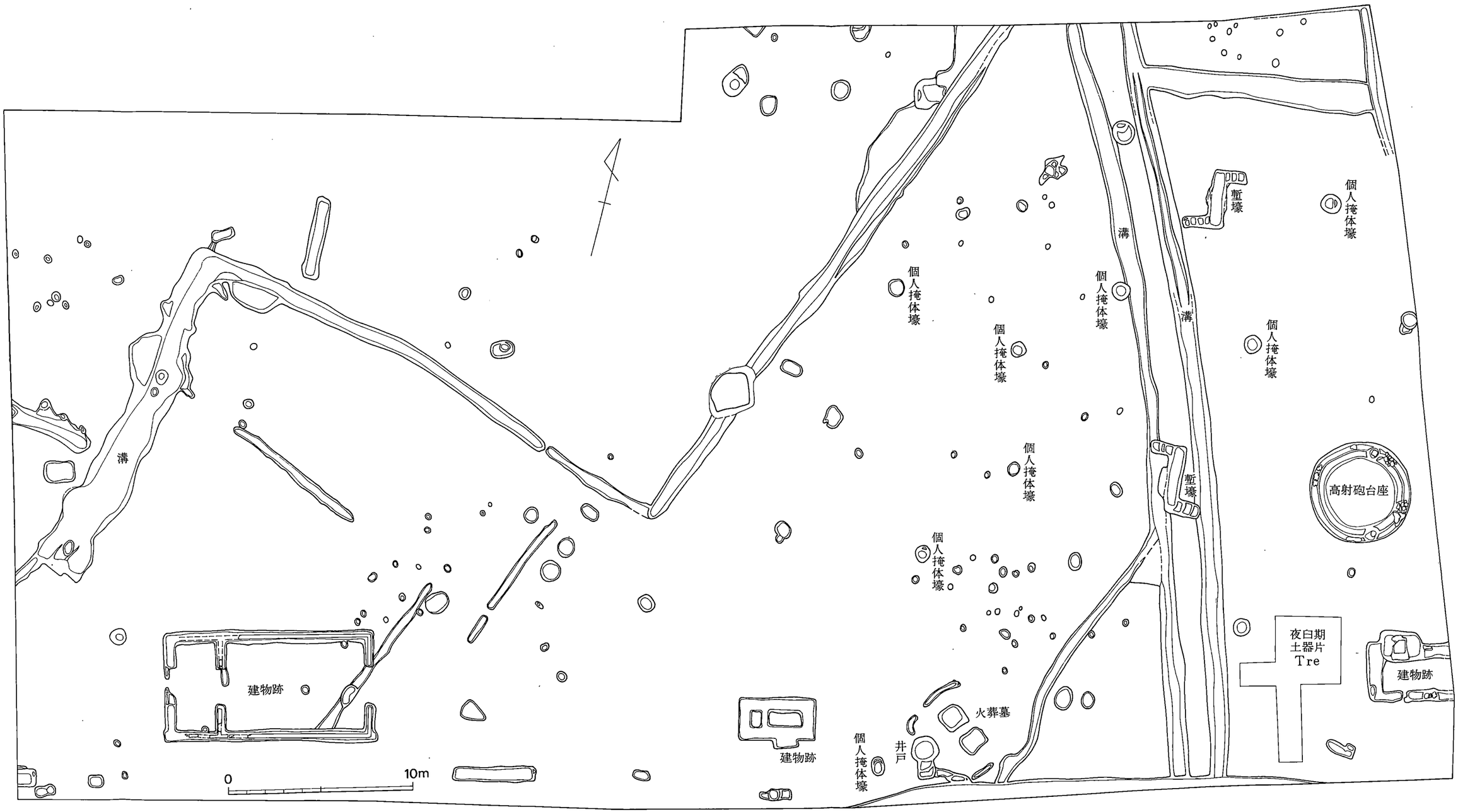
九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— 1 —

付　　図

1 9 8 2

福岡県教育委員会



付図　西原遺跡A地点遺構配置図（1/200）

付図　上々浦遺跡遺構配置図（1/200）

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—1—

甘木市所在西原遺跡・上々浦遺跡の調査

溝８出土の陶質土器

序

この報告書は，福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて，昭和54年度から実施している，九州横断高速自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今度の報告は，甘木市所在の西原遺跡及び上々浦遺跡についてのもので，「九州横断高速自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第１集として刊行することになりました。

本報告書を通して文化財愛護思想の普及，教育資料等にご活用いただければ幸甚に存じます。

発刊にあたり，地元の方々をはじめ，種々のご協力をいただいた関係各位に深甚なる謝意を表します。

昭和57年３月31日

福岡県教育委員会
教育長　友野　隆

例　言

1. 本書は，昭和54年度から昭和55年度にかけて福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて，九州横断自動車道建設に伴い破壊される遺跡の事前調査を実施した第１冊目の報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は，西原遺跡（甘木市大字屋永字西原），上々浦遺跡(甘木市大字馬田字上々浦）である。
3. 西原遺跡の実測図は，栗原和彦・柳田康雄・石山勲・新原正典・馬田弘稔・佐々木隆彦・小池史哲が，上々浦遺跡の実測図は，石山勲・新原正典・佐々木隆彦・高田一弘・日高正幸が作成し，遺構の製図は，佐々木・手柴淳子・大坪文，遺物の実測及び製図は佐々木が分担した。
4. 遺構写真は，石山・新原・馬田・佐々木が撮影し，遺物写真は，九州歴史資料館の石丸洋主任技師と平島美代子氏にお願いした。
5. 遺物整理は，九州歴史資料館の岩瀬正信氏の指導のもとで福岡県教育庁管理部文化課甘木発掘調査事務所で行なった。
6. 本文中の上々浦遺跡の遺物番号は通し番号とし，実測番号と写真番号は同一にした。
7. 本書の執筆はⅠを石山が，他は佐々木が分担した。
8. 本書の編集は佐々木が担当した。

目　次

頁

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 4

Ⅲ　各遺跡の調査 …… 7

1.　西原遺跡 …… 7

2.　上々浦遺跡 …… 11

Ⅳ　結　語 …… 82

Ⅰ　調査に至る経過

高速自動車国道九州横断自動車道（長崎～大分間）のうち，長崎県大村市から大分県日田市にかけての基本計画は，さる昭和44年（1969）１月22日に決定された。現在では福岡県北九州市から熊本県八代市までの間が開通している縦貫自動車道（以下縦貫道と略す）が，九州を南北に貫く背骨とすれば，これを東西に走る横断自動車道（以下横断道と略す）は助骨といえよう。

昭和48年(1973)10月19日には，佐賀県鳥栖市～大分県日田市間についての施工命令が建設大臣から発せられ，翌年５月には，施工主体である日本道路公団の福岡建設局甘木事務所が発足した。それによると，同事務所担当の延42.3㎞路線のうち，本県関係分は以下のとおりである。

区間長　　31.5㎞
小郡工事区　　(7.5㎞)
　小郡市，三井郡大刀洗町
甘木工事区　　(7.4㎞)
　甘木市
朝倉工事区　　(16.6㎞)
　朝倉郡朝倉町，同郡杷木町

当委員会では，横断道建設計画が未だ建設省九州地方建設局所管時の昭和44年度に，平均巾200ｍの範囲にわたって全線の分布調査を実施した。当該年度は，文化課が発足し縦貫道の発掘調査が開始された年でもある。この現地踏査には同局福岡国道工事事務所の担当官も同行し，194ケ所，計1,060,000㎡が埋蔵文化財包蔵地としてリストアップされた。

横断道が通過する筑後平野は，遺跡の宝庫として知られていながら，その実態には意外と不明点が多い。しかも，ルートはほぼ南北方向に走る低台地を横断するケースが大部分であるために，横断道建設予定地と遺跡とが重複することは不可避な状態であった。このため，当委員会としては，遺物の散布状態などを基準として，数カ所でルートを南あるいは北のいずれかに寄せるようにと要望するにとどまった。無論，指定史跡は対象外である。この要望はルート決定に際してかなり反映されており，この点，建設省九州地方建設局ならびに日本道路公団福岡建設局関係各位の御尽力に対し敬意を表したい。

ルート決定により，本線関係の地点数は56ケ所（遺跡数とは一致しない）となり，その分布面積の総計は620,000㎡にも達する（昭和51年末現在)。これらに加えて，甘木市柿原・朝倉郡朝倉町山田の両採土場，ならびに，筑後小郡・甘木・朝倉・杷木の計４ケ所のインターチェンジ関係が調査対象となる。もとより，分布面積は発掘調査面積とは一致しないが，現地調査に

8年を要した縦貫道の調査面積の累計が270,000㎡強に過ぎないことがあらためて想起されるのである。

なお，西端の小郡市から朝倉町の山田S.A.までの間約22㎞は，ほとんどが盛土区間となっている。一方，一部に「盛土部分は永久保存されることになるから調査対象外とすべし」との見解がある。現状を凍結して保存を図るために覆土するのではないので，この論法を認めるわけにはいかない。実際，盛土区間であっても，建設現場では遺構面に達する地山掘削が随所で行われているのだ。既設の道路・水路の付替などに伴う各種のコンクリート構造物を構築するため，あるいは盛土工事に先行する土砂の入替のために，遺跡が寸断された例は枚挙に遑ない。細切調査では遺跡の全体像は把握できない。しかも，細切作業がいかに非能率的であるかは多言を要しない。諸条件を勘案すれば，盛土部分といえども全面調査は不可欠とせざるを得ない。不毛の論議は無益であるが，敢えて一言した次第である。

現地での発掘調査は，着工前の昭和54年度から開始し，夏には調査の中核基地として甘木市内に4間×18間のプレハブ造りの事務所を設置した。当委員会では，建設工事と重複しないうちに可能な限り調査を進めておきたいとの考えであったが，54・55の両年度は，用地買収との関係から調査可能地点が限定され，かつ小面積にとどまった。昭和56年度は，調査も本格化して通年体制となった。同時に，調査の進展に伴なって増加する一方の出土品を収蔵するためのプレハブ造り倉庫棟（4間×14間）を事務所に併設した。なお，当委員会では，これらの横断道関係の発掘調査には，2人1組3班編成計6名の文化課技術職員を専従として充てている。

本書には，これらの調査のうち，甘木市所在西原遺跡，同上々浦遺跡の2遺跡の調査報告を収録した。各調査の期間と54～56年度の関係者は以下のとおりである。

調査期間

西原遺跡（第15－1・2地点）

自　昭和54年7月16日
至　〃　10月17日
自　〃　11月26日
至　〃　12月18日

上々浦遺跡（第13・14地点）

自　昭和55年5月19日
至　〃　12月13日

調査関係者（昭和54～56年度）

日本道路公団福岡建設局

局　長　竹原清隆（前任）　持永竜一郎
総務部長　田代勝重

管理課長	野中岩雄（前任）　布川　堯
管理課課員	村上博之　谷口浩二

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　　長	佐藤善彦（前任）　江口正一
副 所 長	矢野浩司
庶務課課長	森本太助
用地課長	溝口萩男
工務課課長	福成　隆（前任）　深町貞光
工務課課員	草原勝己
小郡工事区工事長	田口　裕
甘木工事区工事長	公文莞二（前任）　瀬戸山邦雄
朝倉工事区工事長	吉永英一
朝倉工事区職員	相島宏司（前任）

福岡県教育委員会

総　括

教 育 長	浦山太郎（前任）　友野　隆
教育次長	守屋　尚
管理部長	森　英俊
管理部文化課課長	藤井　功
管理部文化課課長補佐	蓮生謙吉

調　査

管理部文化課庶務係長	大淵幸夫（前任）　内山孝之
庶務係事務主査	平尾敏映　三島洋輝
調査第２係係長	栗原和彦
技術主査	柳田康雄（前任）
主任技師	石山　勲
同	児玉真一
同	新原正典
同	馬田弘稔（前任）
同	佐々木隆彦
同	小池史哲
同	池辺元明

（肩書は昭和56年末現在）

Ⅱ 位置と環境

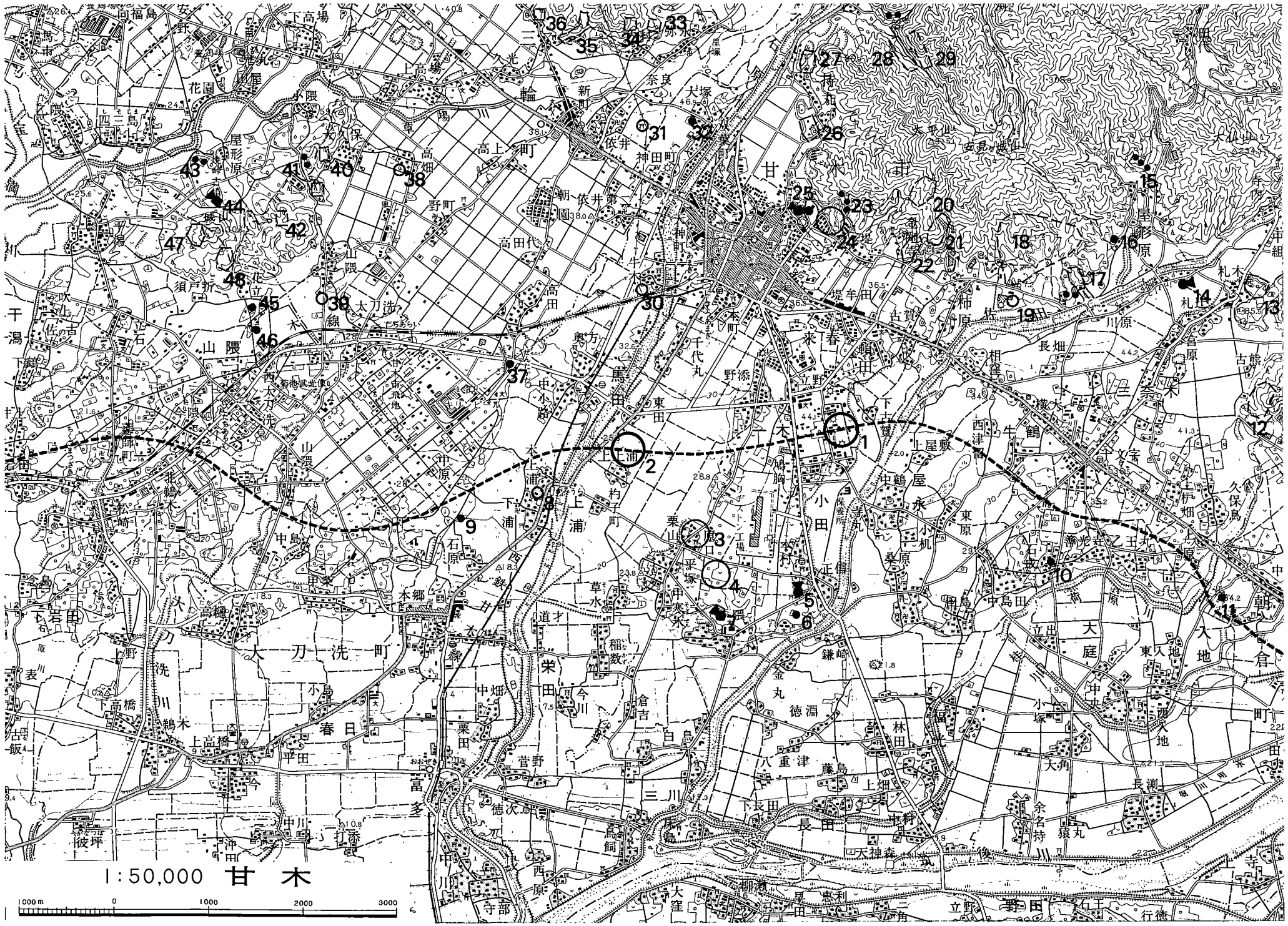
上々浦遺跡は，福岡県甘木市大字馬田字上々浦に，西原遺跡は，同市大字屋永字西原に所在する。

朝倉山塊から源を発し，その内の数々の支脈の中で大平山・安見ケ城山から派生する細長い洪積層台地が南に延びる。当該台地を境に東に小石原川，西に佐田川が南に蛇行しながら，本流である筑後川に注ぐ。台地の廻りには沖積平野が展開し，広大な水田地帯を形成している。

上々浦遺跡は沖積平野に緩く蛇行しながら南流する小石原川の左岸に形成された低い自然堤防上に位置する。さらに，西原遺跡は大平山・安見ケ城山から派生する洪積層台地の佐田川を見下する台地の西端に位置する。この洪積層台地の南側は字名を平塚と称され，「盛土のない塚」と云う意味から甕棺墓・石棺墓群が埋蔵していることは古くから著名で，現に田畑の至る所で石棺に使用したと思われる緑泥片岩の石材が野積みにされていることから，弥生時代から古墳時代にかけての一大遺跡群が集中していることが判る。上々浦遺跡周辺の代表的な遺跡を概観すると，洪積台地の西南，上々浦遺跡の東南約1㎞には大正14年に貝輪，鉄戈等を出土した栗山遺跡[註1]，さらに，その東南には弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて営まれた大集落である小田道遺跡[註2]，北には古墳時代初期の方形周溝墓が検出された大願寺遺跡[註3]，発掘調査の結果前方後円墳であることが判明し，三角縁神獣鏡を出土した古式古墳である神蔵古墳[註4]，古式須恵器を供献していた小田茶臼塚前方後円墳[註5]等が点在する。また北に視点を移すと，北東3㎞には鬼の枕前方後円墳が，後円部に削平を受けてはいるもののその面影を残している。この前方後円墳に隣接して東には，大平山山麓の舌状丘陵上で古墳時代前期の墳墓群が発掘され，数多くの陶質土器を供献していた池の上遺跡[註6]がある。さらに，その周辺の山麓には群集墳が至る所に散見でき，九州横断自動車道の工事関係で採土場の計画設定に基づいて，現在調査が継続中である柿原古墳群[註7]もその支群である。

以上列記した代表的な遺跡の個別概要を以下に記す。

栗山遺跡……甘木市大字平塚字栗山に所在。古くは明治年間に甕棺墓が発見され，その後，大正6年に中山平次郎博士による調査，さらには大正14年に当時の永露銀太郎氏宅の改築工事の際発見された甕棺墓等から当該地が甕棺埋蔵地であることは古くから周知の遺跡として著名であった。大正14年に発見された甕棺墓の所在地は現在の甘木市大字平塚字中道901番地永露ミツ子氏所有地にあたる。発見された甕棺内からは左右の前腕に各々11個の計22個のイモ貝製の貝輪を着装していた。さらに，当甕棺墓の東北で発見された甕棺墓内からは鉄戈が1口出土している。そは7号の後，昭和37及び39年に福岡県立朝倉高校が当地を調査しており，37年の調査で甕棺墓からイモ貝製の貝輪11個を左前腕に着装した人骨が出土している。さらには，昭



1. **西原遺跡**
2. **上々浦遺跡**
3. 栗山遺跡
4. 小田道遺跡
5. カンノクラ古墳
6. 小塚古墳
7. 小田茶臼塚古墳
8. 馬田遺跡
9. 宮原古墳
10. 石成古墳
11. 朝倉狐塚古墳
12. 古態古墳群
13. 鳥越古墳群
14. ヤツエ塚古墳
15. 城深古墳群
16. 田中原古墳
17. 板屋大郷古墳群
18. 柿原古墳群
19. 野田・柿原遺跡
20. 迫谷古墳群
21. 大岩東部古墳群
22. 大岩南部古墳群
23. 鬼迫古墳群
24. 池の上遺跡
25. 鬼ノ枕古墳
26. 持丸古墳群
27. 持丸東部古墳群
28. 名古古墳群
29. 宮ノ前東部古墳群
30. 牛木遺跡
31. 依井遺跡
32. 天神社古墳
33. 乃木松古墳群
34. 天神山古墳群
35. 金比羅山古墳群
36. 峠古墳群
37. 馬田りんりん石古墳
38. 高畑遺跡
39. 山隈遺跡
40. 大久保古墳群
41. 小隈古墳
42. 小隈古墳群
43. 松尾古墳
44. 焼の峠古墳
45. 大師堂古墳
46. 西下野古墳
47. 花立山古墳群
48. 日の子神社古墳群

第1図　西原遺跡，上々浦遺跡とその周辺遺跡分布図（1/50,000）

和56年に甘木市教委の事業で調査し，13個乃至14個のイモ貝製貝輪が出土している。

大願寺遺跡……甘木市大字平塚字大願寺に所在。昭和55年に甘木市教委が調査し，弥生時代の竪穴住居跡，土壙墓群と古墳時代の箱式石棺墓，方形周溝墓を検出している。この内の方形周溝墓は16.2mと18.6m程の規模を持ち，溝の断面は「U」字状を呈する。周溝からは数個体の土器が出土している。主体部は割竹形木棺を埋納した粘土槨である。主体部内は著しく盗掘を受けていたが，小型の鉄製鋤先が出土している。周溝墓には若干の盛土を有していたらしい。さらに，平塚大願寺塚から鏡の発見が伝えられており，大型の鏡であると云う。当方形周溝墓の時期は溝内から出土した土師器から古墳時代初期（庄内併行期の新しい時期）頃と思われる。

神蔵古墳……甘木市大字小隈字カンノクラに所在。全長40m強を測る帆立貝式の前方後円墳。昭和53年１月に宅地造成に伴い甘木市教委が緊急発掘調査を実施した。主体部は小口が「U」字状を呈する竪穴式石室で石室内に木棺を埋納していた。石室内は盗掘を受けていたが，副葬品の遺存状態は良好で，三角縁天王日月・獣文帯四神四獣鏡１面，鉄剣３口，鉄斧１，鉄製鋤先１等が発掘された。古墳の年代は西北グリットのくびれ部から出土した供献土器から，４世紀後半に比定している。

小田茶臼塚古墳……甘木市大字小田字茶臼塚に所在する。昭和53年に甘木市教委の事業として調査が実施された。全長64mの前方後円墳。主体部は古式の横穴式石室である。線刻を施した石材が確認されているが，意味の明確な装飾はない。石室内の遺物は昭和３年に坂本眞鈴氏によって調査された際出土したもので，武器，馬具，装身具，農工具，石製模造品，須恵器等があり，これらは「朝倉郡誌」—考古篇—に記載されている。53年度の調査では墳丘に調査の眼目が置かれ，葺石及び埴輪列が検出された。さらに，前方部では古式須恵器の供献行為が確認されている。当古墳の年代は供献された須恵器から，５世紀中頃から後半の早期とされている。

池の上遺跡……甘木市大字堤字池の上に所在。大平山から派生する舌状丘陵上に方形周溝墓，円形周溝墓，石蓋土壙墓，箱式石棺墓，横穴式石室を主体部に持つ小円墳，火葬墓群が検出された。特に円墳，火葬墓を除く，一連の墳墓群には築造に規則性が認められると云う。さらに，注意を引く特色として墳墓群から多数の陶質土器の出土をみたことで，出土状態が棺内副葬と云う非日本的風習と相俟って朝鮮に事例が多々あることから，朝鮮との間で如何なる有機的相互関係が存在したか注目されるところである。その他の出土遺物として，武器，馬具，農工具，装身具，陶質製紡錘車等があり，副葬された土師器及び共伴関係にある陶質土器，馬具ならびに金環を共出した墳墓が老司古墳と同一の様相を示唆する共通点等から，当墳墓群は４世紀後半から５世紀中頃に年代をおいている。

註１　中山平次郎「筑前国朝倉郡福田村平塚字栗山新発掘の甕棺内遺物」—考古学雑誌15—４—大正14年

「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書」—第一輯—大正14年

「埋もれていた朝倉文化」福岡県立朝倉高等学校—昭和44年

註2 「小田道遺跡」（甘木市文化財調査報告第8集）—甘木市教育委員会—昭和56年

註3 「甘木市史」（原始・古代篇）—甘木市教育委員会—昭和57年

註4 「神蔵古墳」（甘木市文化財調査報告第3集）—甘木市教育委員会—昭和53年

註5 「小田茶臼塚古墳」（甘木市文化財調査報告第4集）—甘木市教育委員会—昭和54年

註6 「池の上墳墓群」（甘木市文化財調査報告第5集）—甘木市教育委員会—昭和54年
最近甘木市教委が隣接する丘陵を発掘し，渦巻把手付のジョッキ形土器等を出土し，池の上遺跡と同一の集団墓であることが判明している。

註7 福岡県教育委員会が調査継続中である。

Ⅲ　各遺跡の調査

1. 西原遺跡

本文目次

頁

1　調査の概要 …… 7

2　遺構と遺物 …… 8

(1)　火葬墓 …… 8

(2)　火葬墓出土遺物 …… 8

3　小　結 …… 8

図版目次

団版1　(1)　西原遺跡A地点東側全景（西から）

(2)　西原遺跡A地点西側全景（東から）

図版2　(1)　西原遺跡B地点全景（東から）

(2)　火葬墓（北東から）

図版3　(1)　1号・2号火葬墓（北東から）

(2)　礫除去後の火葬墓（北東から）

図版4　(1)　礫除去後の1号火葬墓（北東から）

(2)　礫除去後の2号火葬墓（北東から）

挿図目次

第1図　西原遺跡，上々浦遺跡とその周辺遺跡分布図（1/50,000）……折り込み

第2図　西原遺跡地形図（1/2,000）……折り込み

第3図　A地点包含層出土土器実測図（1/3）…… 7

第4図　火葬墓実測図（1/30）……折り込み

第5図　1号火葬墓実測図（1/20）…… 9

第6図　2号火葬墓実測図（1/20）……10

第7図　2号火葬墓出土土器実測図（1/3）……10

付　図

付　図　西原遺跡A地点遺構配置図（1/200）

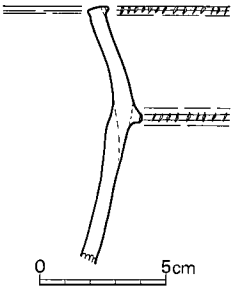
第2図　西原遺跡地形図（1/2,000）

1. 調 査 概 要

当該地周辺は弥生時代を中心とした散布地として知られていた。過去にも石鏃や土器片が多数採集されたと聞いている。このことから休閑地であった当該地を九州横断自動車道関係の埋蔵文化財発掘調査の当初の作業として計画した。

先ずA地点から発掘調査を実施し，昭和54年７月16日に重機を投入し表土剝ぎ作業を開始した。一部を剝いだ時点で，当地は後世に整地されていることが判明し，30㎝～40㎝の盛土がなされ，本来の表土下10㎝程で地山面に到達した。発掘区の約½程遺構検出が終了した時点で，構状遺構５条（戦時中の塹壕に切られている），方形周構遺構（後に火葬墓と判明），円形周構遺構（後に戦時中の高射機関砲の台座と判明），「⊢」形の掘込み（後に戦時中の塹壕と判明），径 80㎝～90㎝ の円形の掘込み（後に戦時中の個人掩体壕[註1]＝通称タコツボと判明），戦時中の倉庫等の建物の基礎，当時の溝等を検出した。さらに，反転して遺構検出を実施したが同様の戦時中の掘込みを検出したのみであった。

以上の結果から，当該地は大正７年10月に太刀洗飛行場建設が開始され，第２次世界大戦時の太刀洗飛行場の防衛を目的に建設された高射砲部隊の跡地であることが判る。昭和56年８月に刊行された桑原達三郎著「太刀洗飛行場物語」[註2]によると，昭和13年７月上旬に現在の甘木市旧甘木中学校の敷地を中心に高射砲第四聯隊が開設された主旨の事が掲載されている。それによると，「太刀洗飛行場の防衛を主任務とする高射砲第四聯隊が，旧甘木中学校の場所に開かれた。その時の陣容は，高射砲二箇大隊（四箇中隊）・砲十六門・高射機関砲一箇中隊・照空二箇大隊（四箇中隊）・照空灯二四基・機材一箇中隊」等である。



第３図 A地点包含層出土土器実測図（1/3）

さらに，B地点は昭和54年11月26日から調査を実施したが，A地点同様高射機関砲陣地内にあり，削平を受けたことで主だった遺構の存在は認められない。

A地点の主な遺構は火葬墓のみで，出土遺物は僅かな人骨片と２片の土師器坏がある。その内の１片（糸切り底の坏）は発掘時の原形を保っておらず，図示は不可能である。その他，発掘区の南東隅に僅かに残存した包含層から夜臼期の甕形土器片が若干出土しており，数少ない遺物の１つである。この甕は小破片で，口縁部は内傾し口唇部と上半の屈折部に刻み目を有す貼付け三角凸帯を付せる。内面は研磨しており，口縁部は横ナデ，胴部外面は擦過している。焼成は堅固で淡赤褐色を呈す。以下火葬墓についてのみ若干の説明を加える。

註１　陸上自衛隊第四師団司令部福岡駐屯地より教示

註２　桑原達三郎著「太刀洗飛行場物語」一葦書房―昭和56年８月

2. 遺構と遺物

(1) **火葬墓**（図版２—(2)・３・４，第４・５・６図）

西原遺跡Ａ地点の南東隅で検出した唯一の遺構である。幅約30㎝～40㎝，深さ18㎝前後の浅い溝がほぼ方形状に断続的に廻り，北東辺には溝は掘られていない。南側の溝は戦時中に掘削されたと思われる井戸により一部が攪乱されている。溝に囲まれた中央部には２基の主体部が整然と掘られており，墓壙形態は１号が長方形，２号が方形を呈する。

１号火葬墓の墓壙の規模は長軸1.4ｍ，短軸1.1ｍ，壁高約30㎝を測る。墓壙の南西小口壁と北西側壁とには緑泥片岩の板石を埋置していた。墓壙内には河川の石塊が無秩序に散在していた。石塊の直下と床面の狭間には全面にわたって炭化物層があり，中から骨粉及び骨片が僅かに出土している。

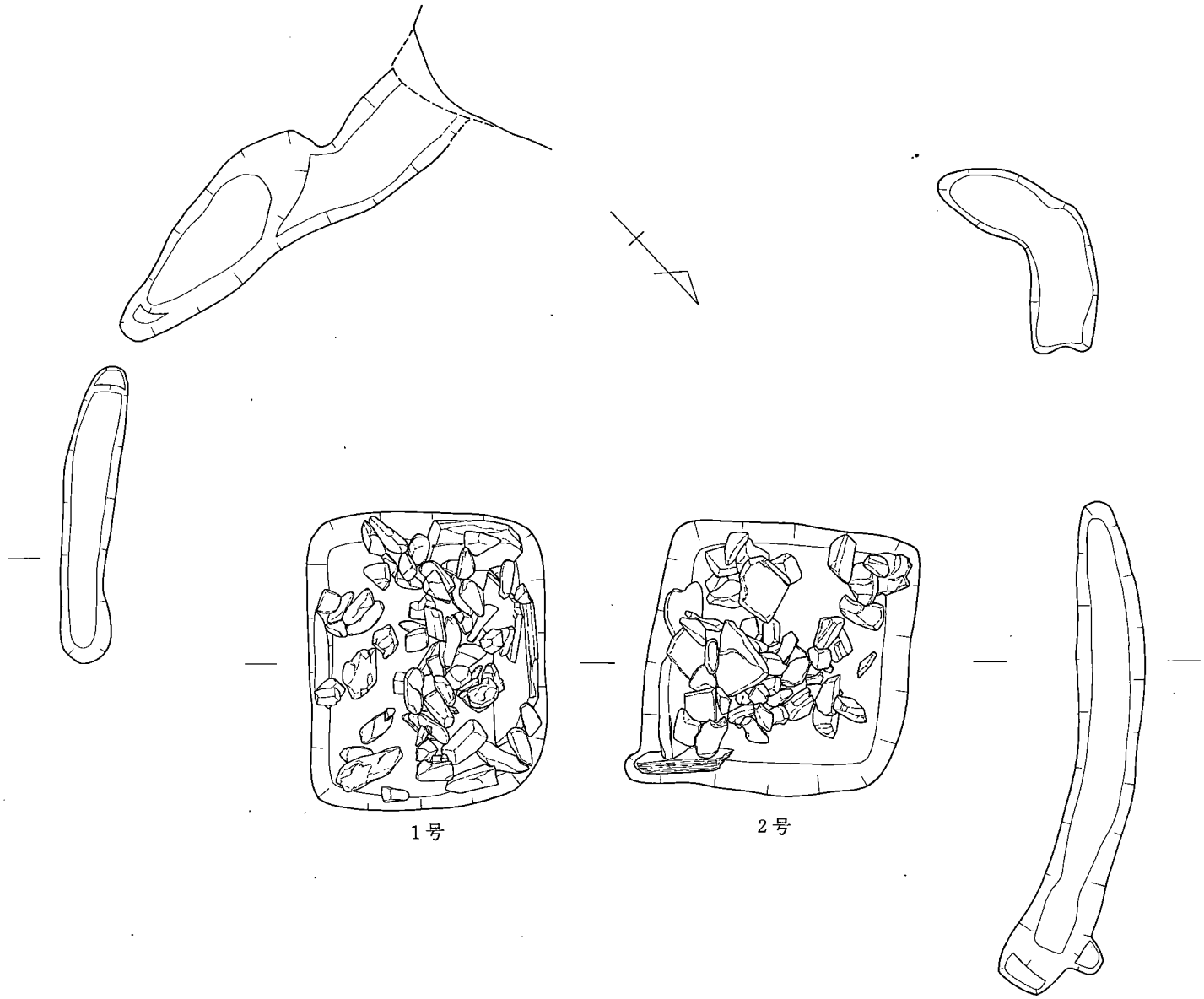
２号火葬墓の墓壙の規模は一辺が1.2ｍ，壁高は１号と同様30㎝前後を測る。墓壙の東壁と北壁及び西壁の一部には緑泥片岩の板石を立て，北壁の板石は墓壙外に壙を掘り込んでいる。西壁の一部に側壁板石が認められたこと，墓壙内の石塊上に緑泥片岩の板石が数片散乱していたことから，戦時中に攪乱を受けた痕跡がある。これらの理由から，四方を板石で囲んでいた可能性が強い。しかも板石を埋置するための掘込みは設けず直接壁沿いに設置したと推測される。墓壙内には１号同様河川の石塊で充塡されており，下層の石は一部焼痕が認められる。さらに，床面直上には炭化物層が堆積しており，骨粉と土師器の小片が２片出土している。その内の１つには坏の底部があり糸切り底をなす。墓壙の主軸方位は Ｎ43°Ｅ を示す。時期は明らかにし難いが，出土した土師器片から中世期頃の所産であろう。

(2) **出土遺物**（第７図）

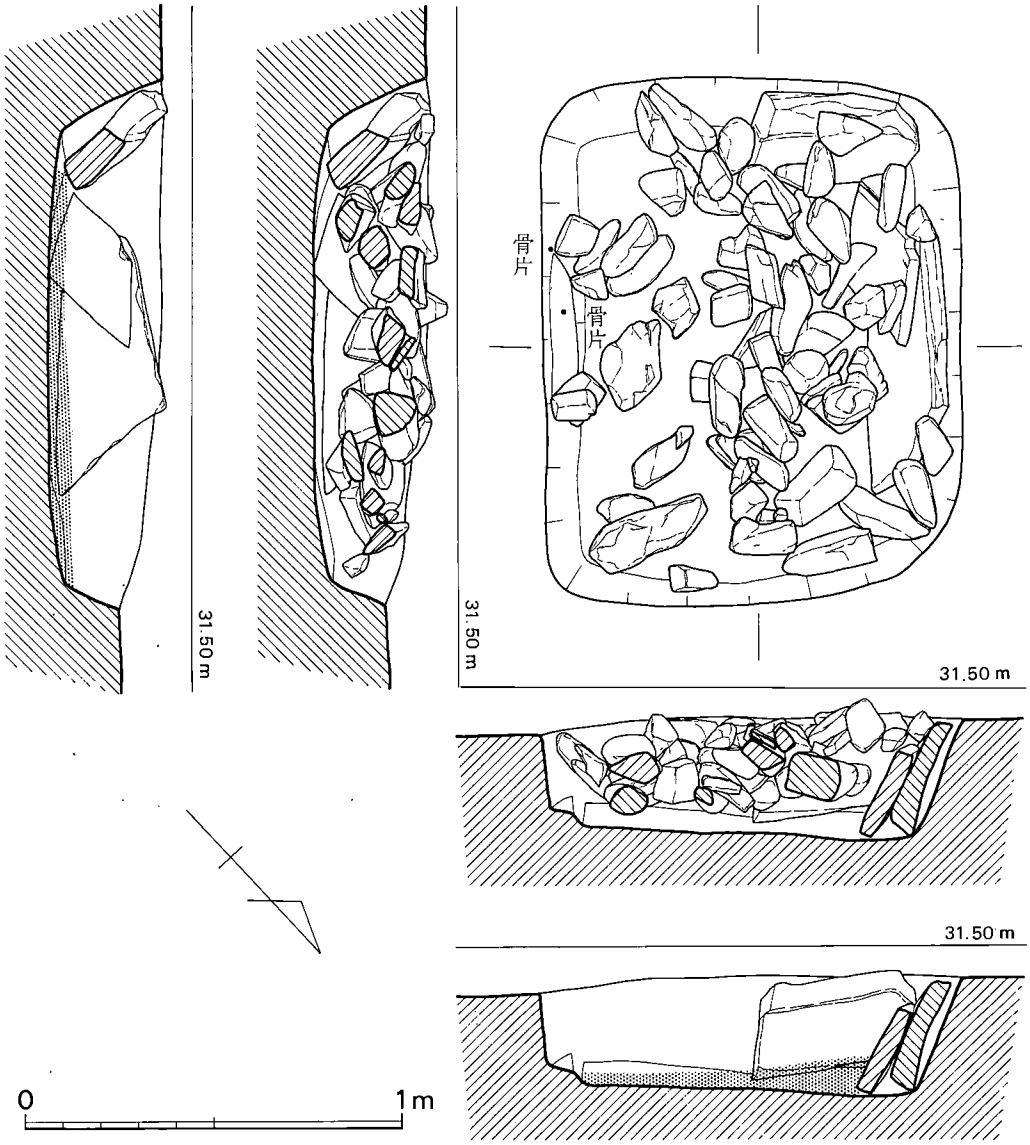
２片出土していたが，その内の１片は破砕し原形を保っていない。図示した土器は土師器坏と思われ，形状から口径の小さいものであろう。横ナデで調整し，胎土は緻密で焼成は堅固である。灰褐色の色調を持ち，煤が付着する。

3. 小　　結

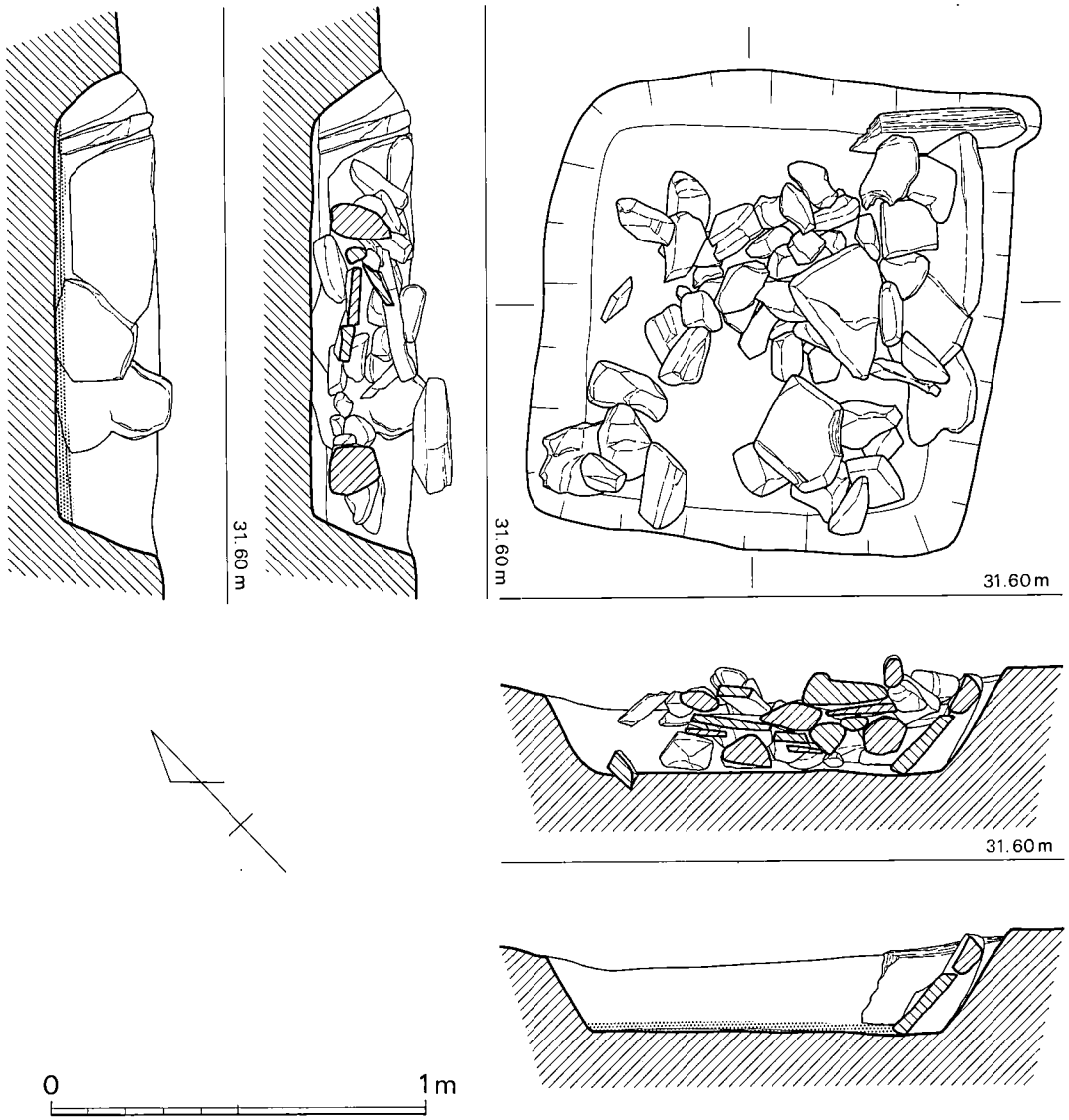
西原遺跡Ａ・Ｂ地点は，昭和13年７月に旧甘木中学校周辺に高射砲第４聯隊が設置されることによる整地のため遺跡は殆んど消滅していることが明らかになった。僅かにＡ地点で夜臼期の包含層が残り，中世期頃の火葬墓が１基残存していた。周辺地形から考慮すれば，遺跡の遺存する可能性の高い場所であることから著しい削平を受けたと思われる。さらに，検出した火葬墓も未だ同類型を見い出せない形状のものである。



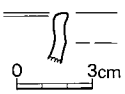
第4図　火葬墓実測図（1/30）



第5図　1号火葬墓実測図（1/20）



第6図　2号火葬墓実測図（1/20）

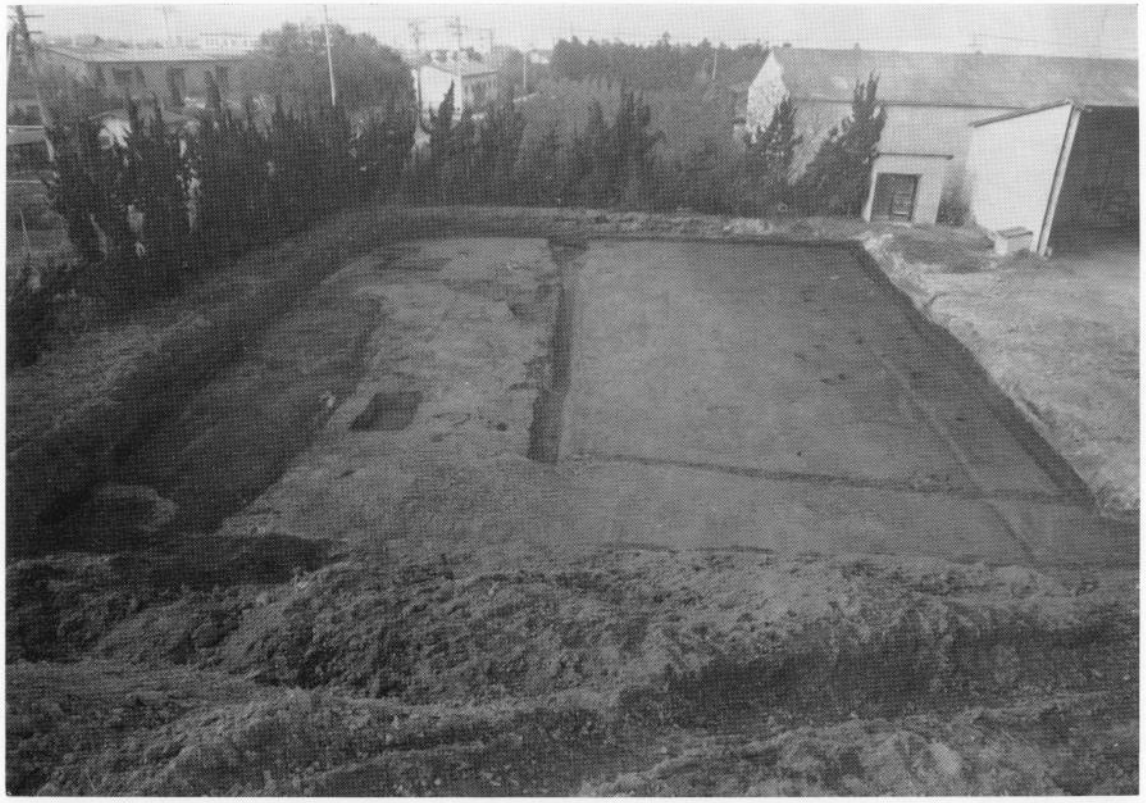


第7図　2号火葬墓出土土器実測図（1/3）

図　版

(1)　西原遺跡A地点東側全景（西から）

(2)　西原遺跡A地点西側全景（東から）

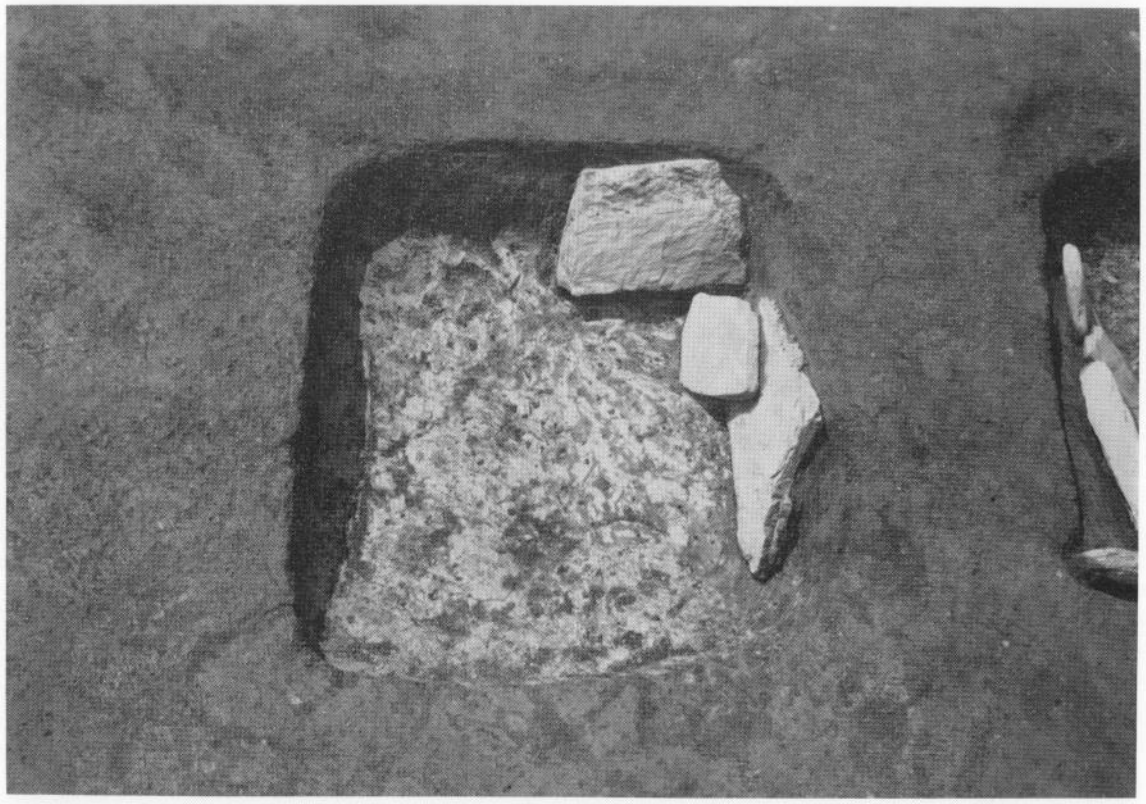


(1)　西原遺跡Ｂ地点全景（東から）

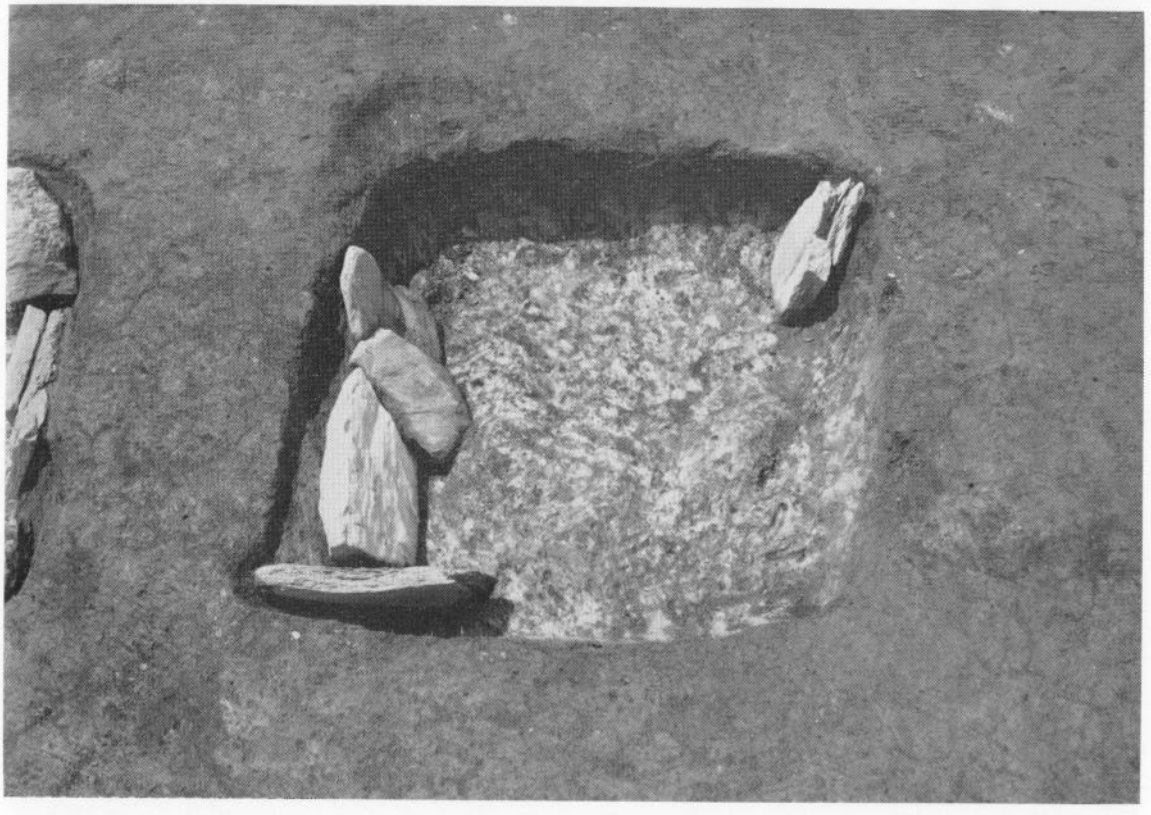
(2)　火葬墓（北東から）

(1)　1号・2号火葬墓（北東から）

(2)　礫除去後の火葬墓（北東から）



(1)　礫除去後の１号火葬墓



(2)　礫除去後の２号火葬墓

Ⅲ　各遺跡の調査

2. 上々浦遺跡

本 文 目 次

頁

1　調査の概要 ……11

2　遺構と遺物 ……12

(1)　竪穴住居跡 ……12

(2)　土　壙 ……42

(3)　掘立柱建物 ……43

(4)　クド跡 ……45

(5)　円形周溝遺構 ……46

(6)　溝状遺構 ……48

3　小　結 ……81

図 版 目 次

図版 1　(1)　上々浦遺跡遠景（南から）

(2)　上々浦遺跡予備調査（西から）

図版 2　(1)　西側発掘区全景（東から）

(2)　西側発掘区全景（北から）

図版 3　(1)　東側発掘区全景（南から）

(2)　東側発掘区全景（北から）

図版 4　(1)　1号竪穴住居跡（南から）

(2)　2号竪穴住居跡（東から）

図版 5　(1)　3号・4号・5号・6号竪穴住居跡（南西から）

(2)　4号竪穴住居跡（北から）

図版 6　(1)　5号・6号竪穴住居跡（北から）

(2)　7号竪穴住居跡（北から）

図版 7　(1)　8号竪穴住居跡（南から）

(2)　9号竪穴住居跡（東から）

図版 8　(1)　10号竪穴住居跡（北から）

(2)　11号竪穴住居跡（北から）

図版 9　(1)　12号・13号竪穴住居跡（北から）

(2)　14号竪穴住居跡（南から）

図版10　(1)　15号竪穴住居跡（北から）
(2)　16号竪穴住居跡（南から）
図版11　(1)　1号土壙（西から）
(2)　円形周溝遺構（東から）
図版12　(1)　1号掘立柱建物（北から）
(2)　2号掘立柱建物（東から）
図版13　(1)　溝8（北から）
(2)　溝8（南から）
図版14　(1)　溝8北側遺物出土状態
(2)　溝8南側遺物出土状態
図版15　(1)　陶質土器と周辺遺物出土状態
(2)　陶質土器出土状態
図版16　(1)　溝8完掘状態（北から）
(2)　溝9（東から）
図版17　1号・4号・6号竪穴住居跡出土遺物
図版18　6号・8号竪穴住居跡出土遺物
図版19　8号・9号竪穴住居跡出土遺物
図版20　10号・11号竪穴住居跡出土遺物
図版21　13号・14号・15号竪穴住居跡出土遺物
図版22　15号・16号竪穴住居跡，溝8最下層出土遺物
図版23　溝8最下層，溝8上層出土遺物
図版24　溝8上層出土遺物
図版25　溝8上層出土遺物
図版26　溝8上層出土遺物
図版27　溝8上層出土遺物
図版28　溝8上層出土遺物
図版29　溝8上層出土遺物
図版30　溝8上層出土遺物
図版31　溝8上層出土遺物
図版32　1号・3号・4号・6号・11号・13号・16号竪穴住居跡，溝8上層出土遺物
図版33　溝9出土遺物
図版34　溝9・溝10・旧河川2出土遺物

挿図目次

頁

第8図　土製模造鏡実測図（1/2）……11
第9図　上々浦遺跡地形図（1/2,000）……折り込み
第10図　1号竪穴住居跡実測図（1/60）……12
第11図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……13
第12図　2号竪穴住居跡実測図（1/60）……14
第13図　3号竪穴住居跡実測図（1/60）……15
第14図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……16
第15図　4号竪穴住居跡実測図（1/60）……17
第16図　4号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……18
第17図　5号竪穴住居跡実測図（1/60）……20
第18図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……20
第19図　6号竪穴住居跡実測図（1/60）……21
第20図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……22
第21図　7号竪穴住居跡実測図（1/60）……23
第22図　8号竪穴住居跡実測図（1/60）……24
第23図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……25
第24図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……26
第25図　9号竪穴住居跡実測図（1/60）……27
第26図　9号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……29
第27図　10号竪穴住居跡実測図（1/60）……30
第28図　10号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……30
第29図　11号竪穴住居跡実測図（1/60）……31
第30図　11号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……32
第31図　11号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……33
第32図　12号・13号竪穴住居跡実測図（1/60）……34
第33図　13号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……34
第34図　14号竪穴住居跡実測図（1/60）……35
第35図　14号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……36
第36図　15号竪穴住居跡実測図（1/60）……37
第37図　15号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……38
第38図　16号竪穴住居跡実測図（1/60）……40

第39図　15号・16号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……41
第40図　1号土壙実測図（1/40）……42
第41図　1号土壙出土土器実測図（1/3）……43
第42図　1号掘立柱建物実測図（1/60）……44
第43図　2号掘立柱建物実測図（1/60）……45
第44図　3号掘立柱建物実測図（1/60）……45
第45図　クド跡実測図（1/40）……46
第46図　円形周溝遺構実測図（1/60）……47
第47図　円形周溝遺構出土土器実測図（1/3）……47
第48図　溝8土層断面実測図（1/40）……49
第49図　溝8最下層出土土器実測図（1/3）……50
第50図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……52
第51図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……53
第52図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……54
第53図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……56
第54図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……57
第55図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……58
第56図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……59
第57図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……60
第58図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……62
第59図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……63
第60図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……64
第61図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……65
第62図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……66
第63図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……67
第64図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……69
第65図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……70
第66図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……71
第67図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……72
第68図　溝8上層出土土器実測図（1/3）……72
第69図　13号竪穴住居跡，溝8上層出土土製品実測図（1/2）……73
第70図　1号・3号・4号・6号・9号・11号・16号竪穴住居跡，
溝8上層出土鉄器実測図（1/2）……73

第71図　溝９出土土器実測図（1/3）……75
第72図　溝９出土土器実測図（1/3）……76
第73図　溝９出土土器実測図（1/3）……77
第74図　溝10出土土器実測図（1/3）……77
第75図　旧河川２土層断面実測図（1/60）……78
第76図　旧河川２出土土器実測図（1/3）……79
第77図　旧河川２出土土器実測図（1/3）……80
第78図　旧河川２出土土器実測図（1/3）……81

表　目　次

表　1　１号掘立柱建物計測表……44
表　2　２号掘立柱建物計測表……44
表　3　３号掘立柱建物計測表……44

付　　図

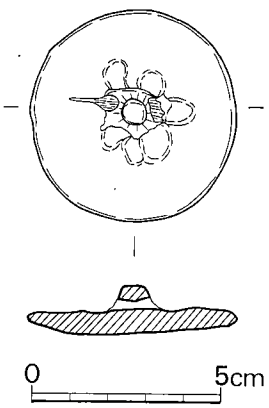
付　図　上々浦遺跡遺構配置図（1/200）

1. 調査の概要

当該地点に遺跡が存在することは，過去に上々浦の集落の外にある神社裏で住居跡の遺存が知られてからであり，現存する地形も僅かながら微高地を残していることから，可能性の問題として認識されていた。ほぼ時期を同じくして周辺の圃場整備事業が施工されており，ある程度周囲の遺跡の様相は窺えた。しかし，本線内の事前の試掘調査については，道路計画内の用地買収が完了しておらず，作物の収穫の点でも未決であったため，とりあえず甘木農林事務所と掛合った結果，圃場整備事業地内の本線側道沿いの試掘許可を得た。試掘には福岡県教育庁管理部文化課の栗原係長・新原・馬田主任技師が立会い，昭和54年12月８日～12月25日迄の間実施した。その結果，一部古墳時代の溝状遺構（後に本調査で溝８と判明）を検出し多量の古式土師器と土製模造鏡などを出土したことから，少なからず遺構の存在する可能性が濃くなった。しかし，遺跡の分布範囲を把握するまでには至らず，まずこの作業を先行させ，平行して旧地形を解明することにも主眼を置いた。

先は休耕地から予備調査を実施したが，Ａ地点は表土下約25㎝程で礫層が堆積しており周辺が氾濫原であることが明らかとなったため，当地点の調査に終止符を打った。引き続きＢ地点に移動したが結果は同様であった。この時点で本線内の北側で工事用道路を先行施工させたいとの主旨の申し入れが道路公団甘木工事事務所からあり，急遽Ｃ並びにＤ地点の本線北側に幅員10ｍの試掘溝を設定して予備調査に主体を移した。その結果，Ｄ地点には遺跡は存在せず，Ｃ地点は幅員が約80ｍにわたり南北に走る小石原川で形成された自然堤防があり，堤防上には溝状遺構，住居跡が遺存することが判明した。しかし，工事用道路分の遺跡の占地する面積の調査終了期日と工事用道路の工事着手期日との間で折合いがつかず，道路公団と現地での談合の結果，南側に仮設道路を付設し調査終了後に再度北側に移設する運びとなった。この様な現地での経緯を経た後にＣ地点の本格的な調査を実施するに至った。

自然堤防は東西約80ｍ幅でほぼ南北に延び，この堤防上に生活跡遺構は立地する。遺構の内訳は住居跡16軒，土壙２基，掘立柱建物３棟，クド跡１基，円形周溝遺構１基，溝状遺構10条，旧河川２条である。住居跡群は２時期にわたって若干の間欠性を示す。第１期は弥生時代後期，第２期は古墳時代前期に営まれる。しかも住居跡群は２時期とも発掘区の中央部を境に２支群に別れている。この内，弥生時代の住居跡は３号・４号・５号・６号・11号・12号・14号・16号で，古墳時代のそれは１号・２号（出土土器は小破片で不明確であるが，住居跡の配置と形態から古墳時代の可能性が強い）・７～10号・13号・15



第８図 土製模造鏡実測図 (1/2)

第9図　上々浦遺跡地形図（1/2,000）

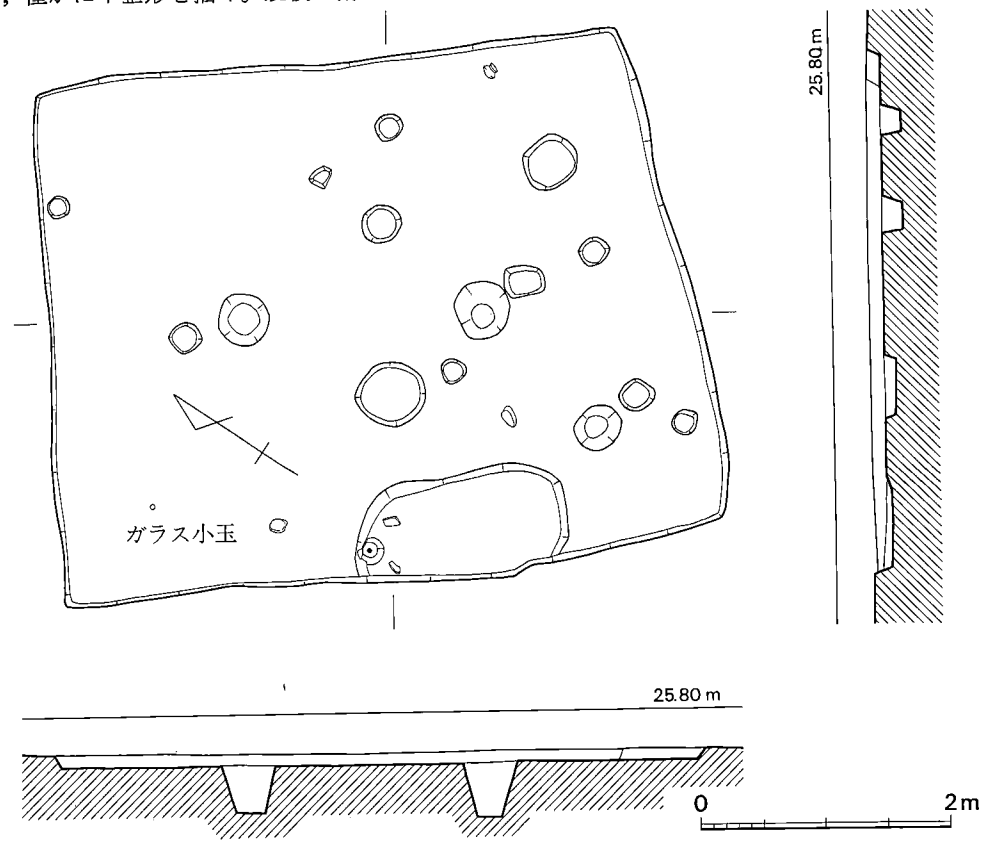
号である。集落の東限は旧河川等の自然地形の制約から解明できるが，西側の溝８の外側にも住居跡が営まれることから，溝８は集落の境界区分の機能を果すものではないようだ。掘立柱建物に関しては周囲に古墳時代前期以降の遺構が発見されていないこと，弥生時代後期の住居跡よりも新しいことから古墳時代の集落に付属する建物と考えた方が妥当とも思える。発掘区内で検出した溝７を除く全ての遺構は前記の２時期に凝縮された集落の一断面であろう。

2.　遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（図版４-(１),第10図）

発掘区の北西で検出した住居跡である。淡黒褐色土から掘込んでおり，時期不明の溝を切っている。平面形態はほぼ方形を呈しているが，南側壁は西壁側に近くなるにつれて広がっており，僅かに不整形を描く。規模は南北壁4.10m・4.00m，東西壁4.65m・5.30m，壁高10cmを



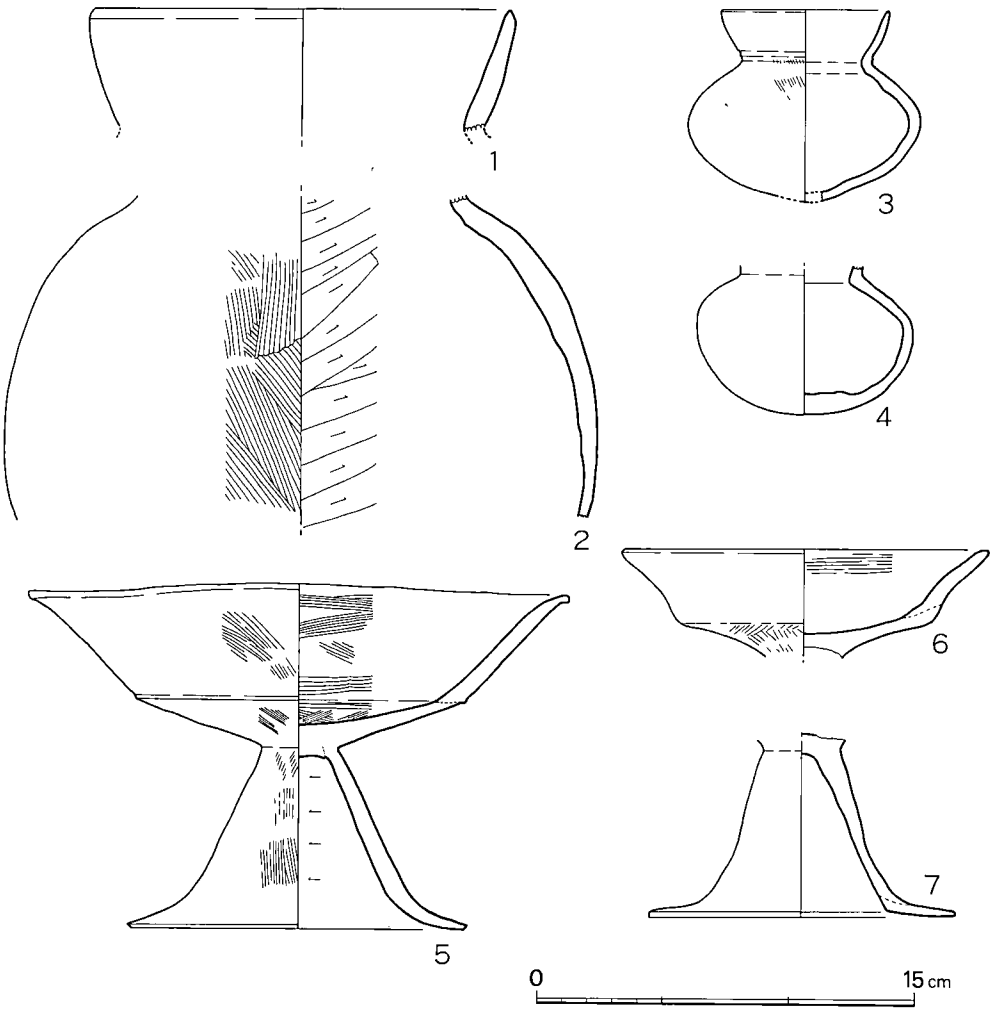
第10図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）

測り，遺存状態は良くない。住居の床面積は約20.5㎡である。床面には14個のピットが掘られているが，主柱は長軸中央線上の２本であり，深さは42㎝・38㎝である。他のピットは浅く，８㎝～29㎝を測る。主柱穴の柱間は1.90ｍである。西壁沿いには楕円形の所謂屋内土壙が掘られており，その規模は長軸長1.70ｍ，短軸長80㎝，深さ５㎝と浅い。周溝及び炉跡等は認められず，主軸方位はＮ34°Ｗを示す。出土遺物は壷・小型丸底・高坏・鉄器・ガラス小玉等がある。住居の時期は古墳時代前期である。なお，北西隅の住居外に径45㎝の円形状の焼痕がみられるが，壁から35㎝と近いことから住居跡とは無関係の遺構と推測される。

出土遺物

土器（図版17，第11図）

(1)及び(2)は壷形土器で，(1)は口縁部が僅かに内弯し，端部は尖り気味である。(2)は(1)と同様



第11図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

の口縁部を有すと思われるが，同一個体ではない。肩部は大きく張り球形に近ち胴部をなす。(1)・(2)とも器壁は厚く，口縁内外面とも横ナデ，肩部は横ナデで胴部はやや荒い縦ハケ仕上げである。内面は右廻りの篦削りである。(2)の胎土は砂粒多く不良。焼成は堅固である。

(3)・(4)は小型丸底土器である。(3)は口縁部が内弯し，胴部は大きく張り出し玉葱状を呈する。堅固でつくりの良好な土器である。底部は欠損しているが，やや尖り気味に終る。調整はナデによるもので肩部にハケが若干残る。(4)は直に外反する口縁部を有すと思われ，扁平な球状を呈する。底部は丸底である。胴部下半は不定方向の篦削りで仕上げている。

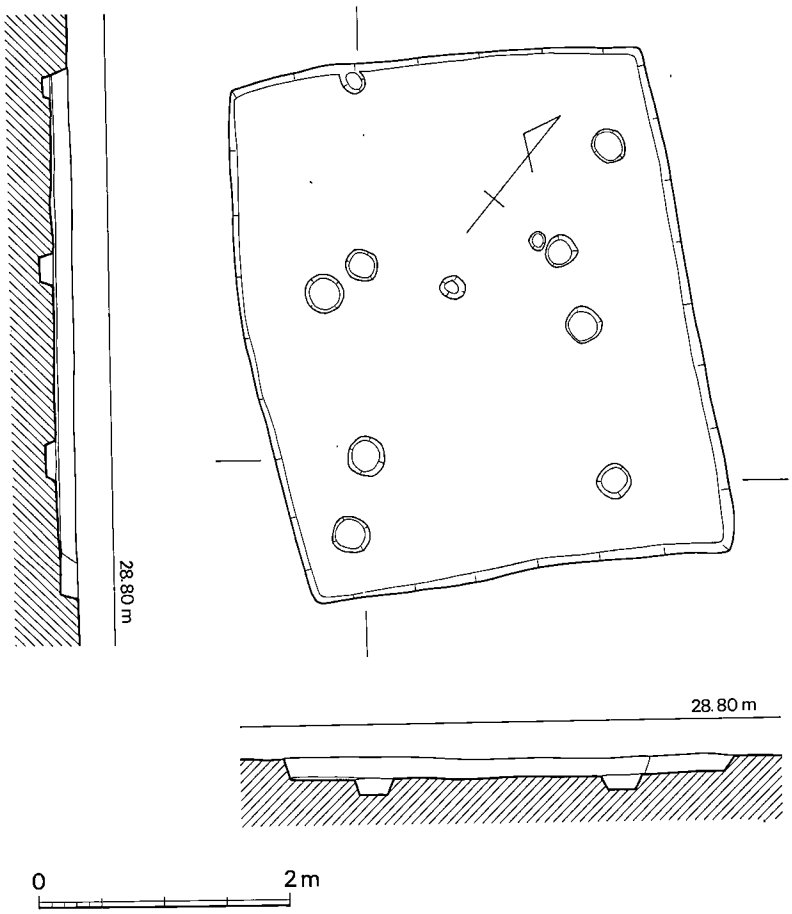
(5)～(7)は高坏で，(5)の坏部は明瞭な屈曲を持ち，鋭く外反した口縁部は端部で再度外反する。脚部は坏部の接合部で細く，裾部で大きく開く。裾部内面は屈曲せず，スムーズな曲線を描く。坏及び脚部外面は丁寧なナデ仕上げが主体であるが，坏部にはやや荒いハケが多く残る。脚部内面は横篦削り。胎土は緻密で堅固なつくりである。(6)は小型で全体に厚手づくりで坏部の屈曲は鈍い。(7)は柱状部で若干広がり，裾部で鋭く屈曲する。全面が風化しているものの密な胎土で焼成良好。

鉄器（図版32，第70図）

（255）は両端が欠損しており，断面三日月状を呈する。両側の幅は異り一方が幅広くなる。現存では幅2㎝と2.6㎝，厚さ3㎜を測る。形状から製品よりも鉄素材の可能性が高い。

ガラス製小玉

住居跡内の覆土



第12図 2号竪穴住居跡実測図（1/60）

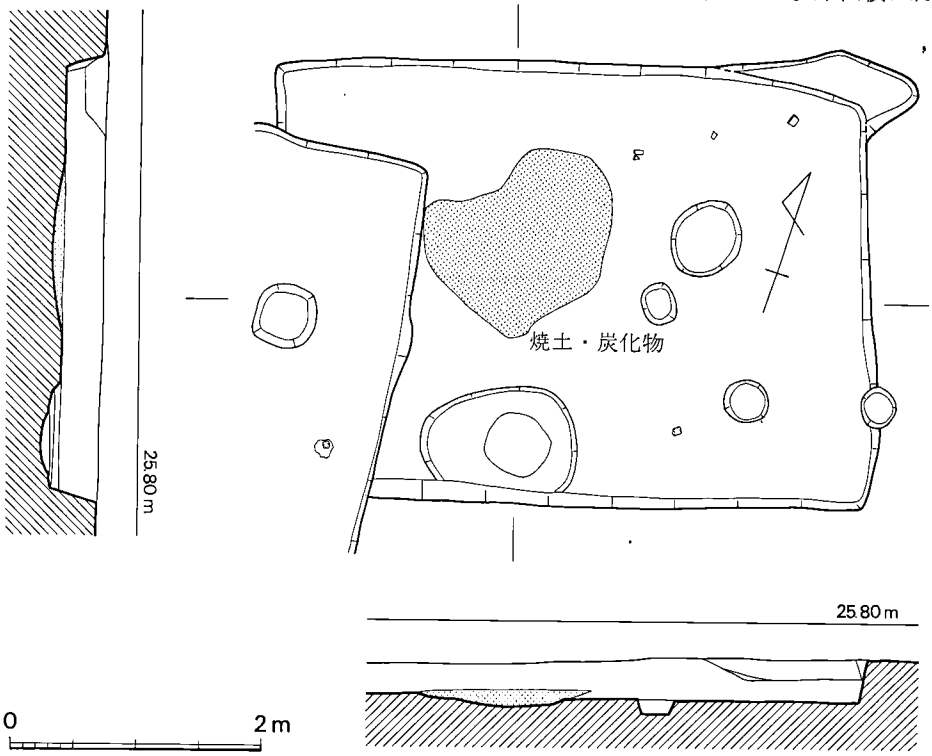
中で検出したガラス製小玉で長径4.3㎜，短径4.0㎜，厚さ3.0㎜，孔径1.0㎜を測る。色はスカイブルーを呈する。

2号竪穴住居跡（図版4-(2)，第12図）

1号住居跡の南側で検出した方形プランを有す住居跡である。規模は1号住居跡よりは小規模で，南北壁は3.40m・3.30m，東西壁は4.05m・4.15m，壁高は15㎝を測る。住居の床面積は約13.7㎡である。住居跡内には11個のピットが掘られているが，全て浅く8㎝～12㎝を測るにすぎない。主柱は不規則ではあるが，4本で南壁沿いに片寄っている。柱間は東西間が1.60m・2.00m，南北間が1.50m・1.80mと不揃いである。その他付属施設は認められない。主軸方位は住居壁辺と柱間方向は一致しておらず，柱間方位を採用すればN40°Wを示す。出土遺物は僅かに小片の土器がみられたにすぎない。住居跡の時期は明らかでないが，小破片の土器から古墳時代前期と思われる。

3号竪穴住居跡（図版5-(1)，第13図）

2号住居跡の南側に位置する住居跡で，4号住居跡に西側壁を切られている。平面形態はほぼ長方形を呈し，規模は南北壁では北壁のみ計測可能で4.70m，東壁で3.25mを測り，西壁は切り合い関係から明らかではないが，形状を考慮すれば3.50mと推察される。床面積は約15.9



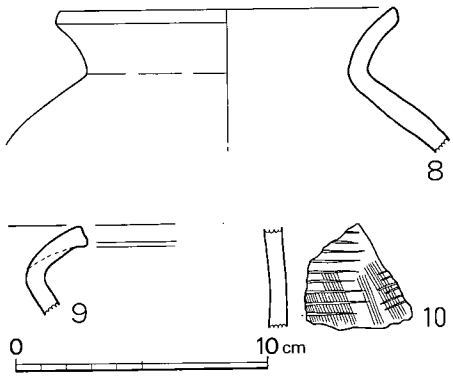
第13図　3号竪穴住居実測図（1/60）

㎡である。柱穴は3個検出できたが，主柱穴と判断できる遺構は不明瞭である。しかし，住居の形状から2本柱であろう。この内の1本の深さは19㎝を測る。さらに南壁の傍には楕円形の浅い二段掘りの屋内土壙が掘られており，長軸1.25ｍ，短軸80㎝，深さ15㎝である。土壙内からの出土遺物は皆無である。床面のほぼ中央部には不整形状に炭化物の散在箇所があり，深さ10㎝の浅いピットが掘られているが，壁面には焼痕がないことから短期の火の使用が考えられる。住居跡の主軸方位はＮ72°Ｅを示す。出土遺物は甕形土器が数点みられる。時期は弥生時代後期後半以降である。

出土遺物

土器（第14図）

(8)～(10)はすべて甕である。(8)・(9)の短い口縁部は「く」字状に大きく外反し，肩の張った胴部につづく。(9)の口唇部はわずかに凹線が認められ，肥厚する。(8)は砂粒子多く胎土はやや不良。若干の金雲母を含む。両者とも器壁は厚く，調整はナデである。(10)は細い横方向の叩キが残っており，最終調整は細いハケで仕上げている。



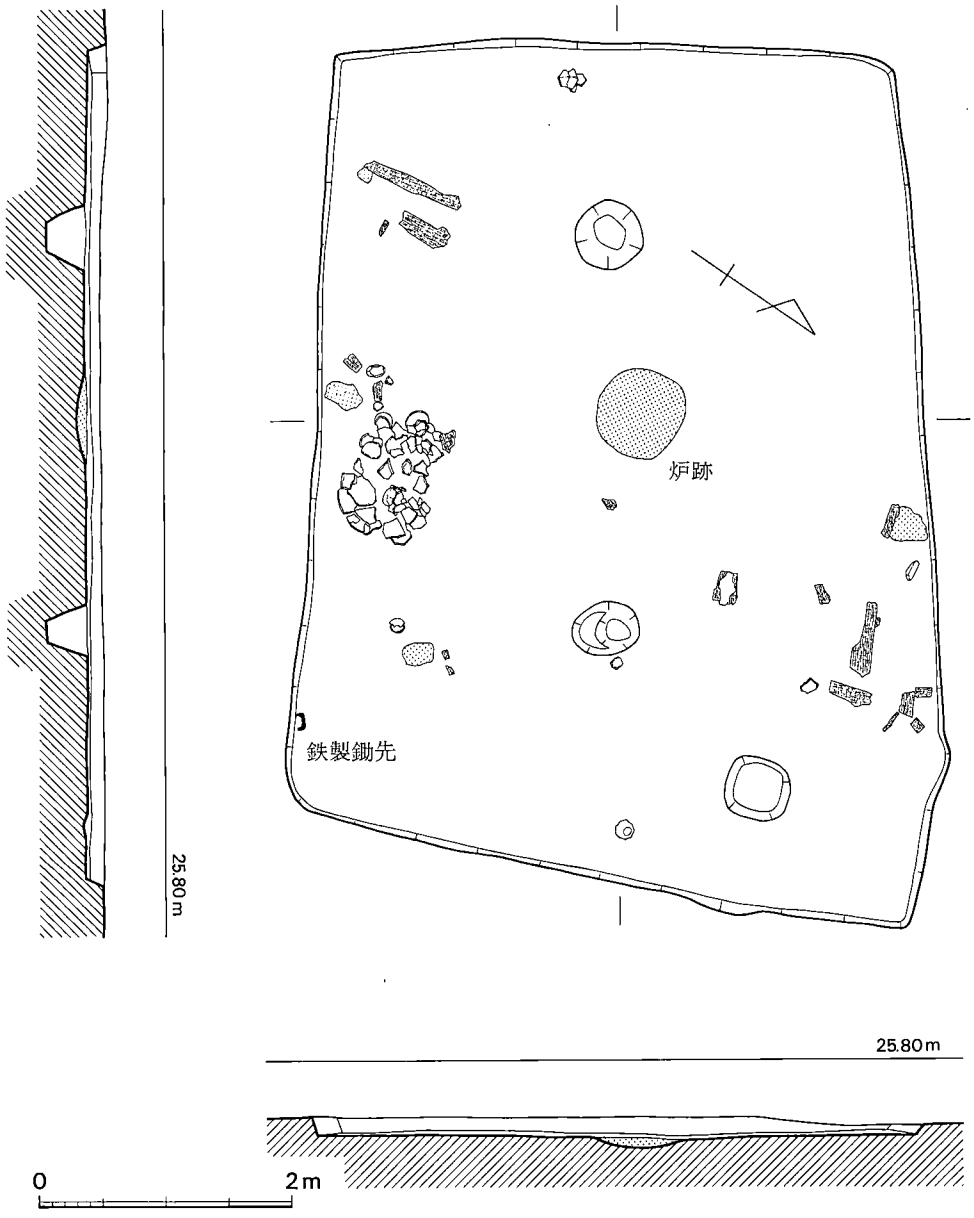
第14図　3号竪穴住居跡出土土器実測図
(1/3)

鉄器（図版32，第70図）

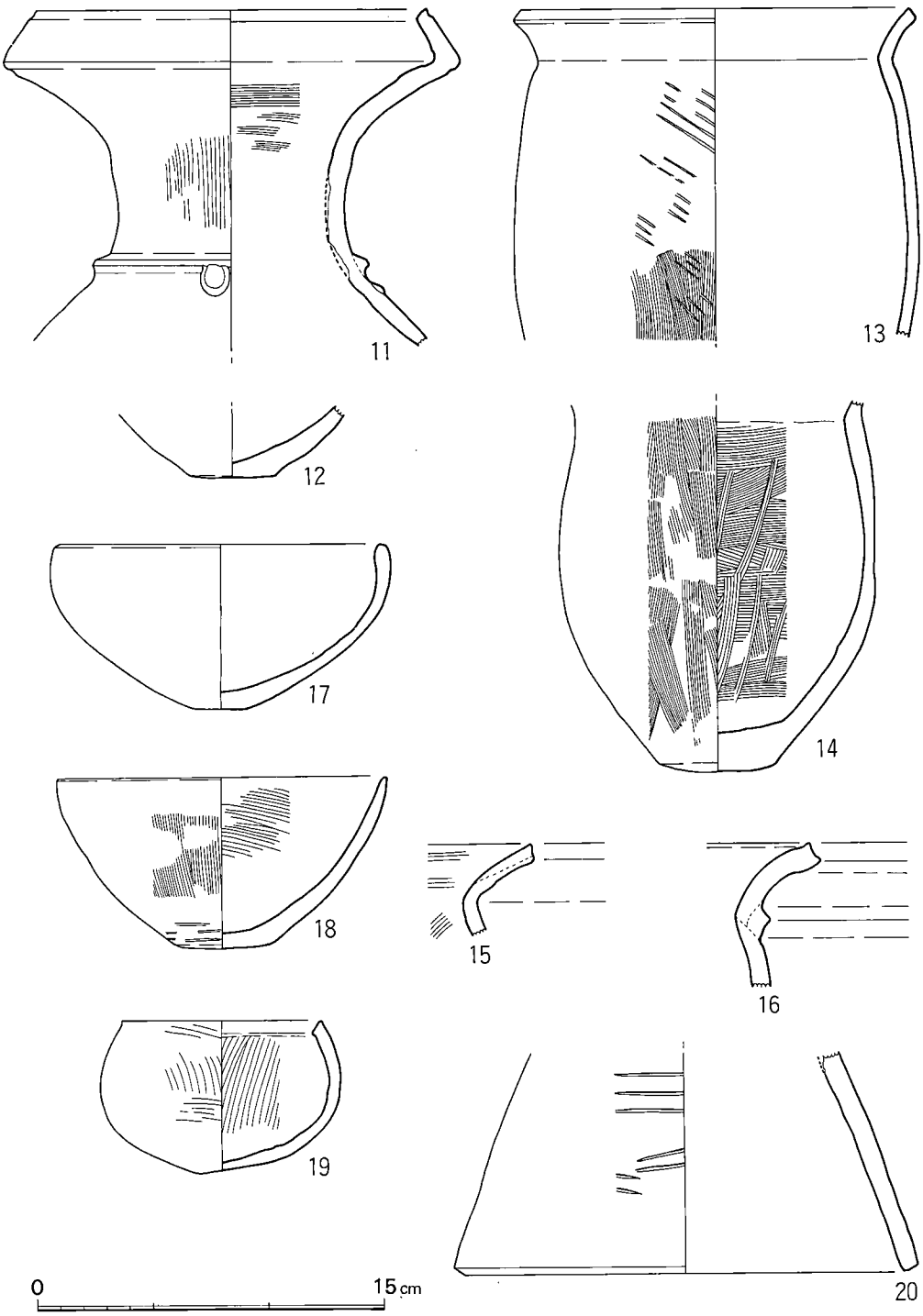
(256) は両端が欠損しており，全長は明らかでない。幅は1.6㎝を測る。一部木質が付着し，横に木目が走ることから手鎌の可能性があるが幅が狭いことから断言できない。

4号竪穴住居跡（図版5-(1)・(2)，第15図）

3号住居跡の西壁を切った状態で検出した平面形態が長方形を呈する住居跡である。東壁は北壁方向に大きく広がっており，不整長方形を呈する。規模はやや大きく北壁が6.85ｍ，南壁は6.00ｍ，東・西壁は5.05ｍ・4.45ｍ，壁高は約15㎝を測り遺存状態は良くない。住居跡の床面積は29.1㎡である。床面上で検出した柱穴は少なく3個のみで，その内の2本が主柱をなす。深さは住居跡の規模に対して比較的浅く，30㎝を測る。このことは床面下約25㎝で礫層に達するため，掘削不可能であったと推測されている。柱間は3.15ｍである。屋内土壙，周溝等の施設はなく，主柱穴間に径約70㎝の浅い炉跡があるが，焼痕は顕著でない。主軸方位はＮ55°Ｅを示す。なお，当住居跡は火災に遭遇したと思われ，南北壁沿いに床面より10㎝前後上層で炭化材が散在していた。出土遺物は壺・甕・鉢・坏・器台・鉄器等がある。さらに，南東隅で鉄製鋤先が床面から19.5㎝程上層で出土し，必ずしも当該住居跡に伴うとも限らないが，住居跡で伴出した土器群から考慮すれば共伴可能な遺物である。住居の時期は弥生時代後期後半に近い時期に比定される。



第15図 4号竪穴住居跡実測図（1/60）



第16図　4号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物

土器（図版17，第16図）

(11)・(12)は壷形土器である。(11)は大きく外反する擬口縁に内傾する口縁部を有す。口唇部には凹線が認められる。頸部は細く締り，貼付け三角凸帯が一周する。凸帯の一箇所には円形浮文状の装飾が付されている。調整は口縁部内外面とも横ナデが主体で，一部細いハケが残る。頸部には荒い縦ハケを施す。頸部の内面下は風化及び器内の剝落が著しく不明。(12)は鉢の可能性もある。

(13)～(16)は甕形土器である。(13)は短い「く」字状に外反する口縁部に張りの小さい胴部を有す。口縁部と内面はナデ，胴部上半は細い叩キののちナデ，下半は細いハケを施している。(14)は口縁部を欠損しているが，僅かに「く」字状に外反すると思われ，胴部の張りは少ない。レンズ状の底部は厚手づくりである。内外面とも細いハケ仕上げである。(15)は「く」字状に外反する口縁部に，口唇部は若干肥厚する。(16)は古い形式の甕である。頸部に三角凸帯を付し，口唇部は僅かに跳ね上げ肥厚する。

(17)・(18)は鉢で，口縁部が内弯するものとほぼ直に外反するものとがある。(17)の底部は小さく，(18)はレンズ状底部を有す。調整はナデとハケがみられる。(18)は底部付近に叩キが残る。

(19)は坏で張りのある胴部に内傾する口縁部を持ち，口唇部は内側に肥厚する。内外面とも荒いハケ調整である。

(20)は器台の破片で荒い叩キが残る。

鉄器（図版32，第70図）

刀子（257）・手鎌（258）・鋤先（259）等がある。刀子は茎のみが残存し，関部は錆ぶくれが著しい。茎の長さは3㎝，幅11㎝，厚さ2㎜である。

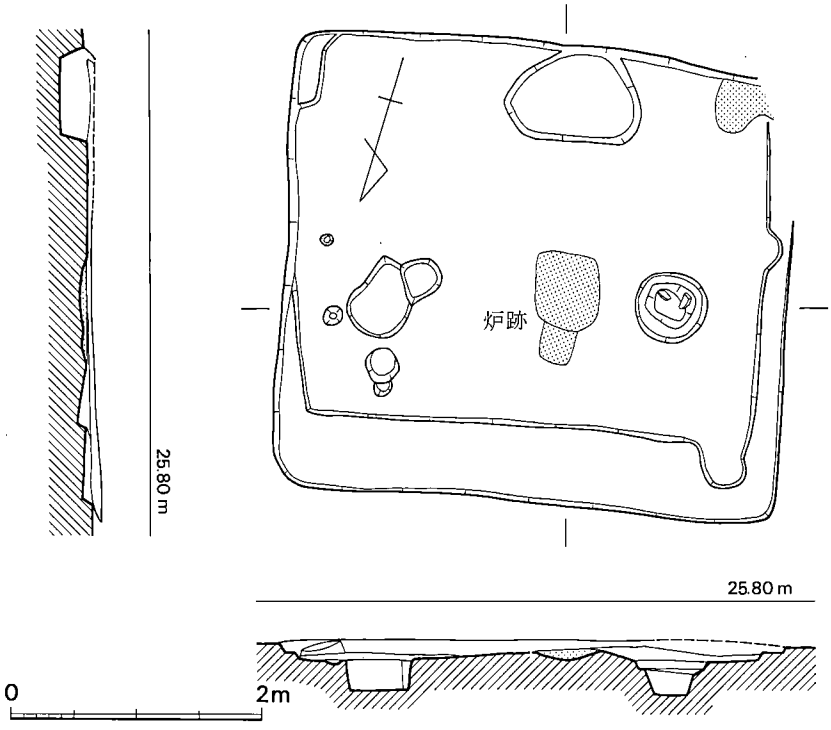
手鎌は約1/3のみ残存する。袋部には僅かに木質が残る。

鋤先は刃部と鋒の一部を欠失する。袋部には木質は現存しない。さらに，表裏には数箇所に樫の付着が認められ，火災に遭遇した際に付着したものと思われる。形状は刃部が僅かに幅広くなり，長さ11.3㎝，鋒部で11㎝，幅6.1㎝，鋒部の厚さ4㎜である。

5号竪穴住居跡（図版5-(1)・6-(1)，第17図）

4号住居跡の東側に隣接する住居跡で，南西隅を6号住居跡で一部切られている。平面形態はほぼ方形を呈しているが，北壁及び西壁沿いには平行して高さ6.5㎝前後の段差があり，発掘途中所謂ベット状遺構と推測していたが，西壁沿いの幅員が狭いことから住居跡の拡張とも捉えられるため，この面で一応に調査したが，明瞭な貼床を確認するに至らなかった。しかし，このレベルで中央の炭化物を包含する落ち込みを検出したことから住居跡の拡張行為とみるべきであろう。住居跡の拡張後の規模は南北壁3.80m・4.00m，東西壁は両辺とも3.50m，壁高12㎝を測り，遺存状態は不良である。拡張後の床面積は約13.7㎡である。主柱は2本である

が，東側の柱穴は柱の建て直しが行なわれ，西側は２段掘りで裏込めに使用したと思われる礫が出土した。深さは22㎝～25㎝を測る。柱間は2.20m・2.00mである。南壁沿いには長軸1.10m，短軸75㎝，深さ20㎝の楕円形の屋内土壙が掘られている。主柱穴間には浅い炉跡が設置されているが，焼痕は顕著でない。住居跡の主軸方位はＮ73°Ｅを示す。出土遺物は壷・鉢等がある。出土土器から住居の時期は弥生時代終末頃である。



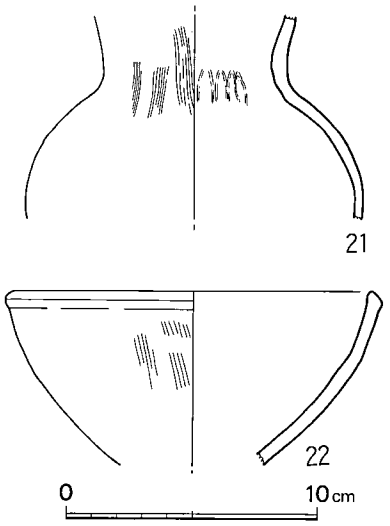
第17図　５号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物

土器（第18図）

(21)は小型の壷で，口縁部と胴下半部を欠く。口縁部は直に外反すると思われ，球形の胴部に続く。全体に風化しており調整が不明瞭であるが，頸部に細いハケが残る。頸部内面には部分的に二次加熱を受けている。

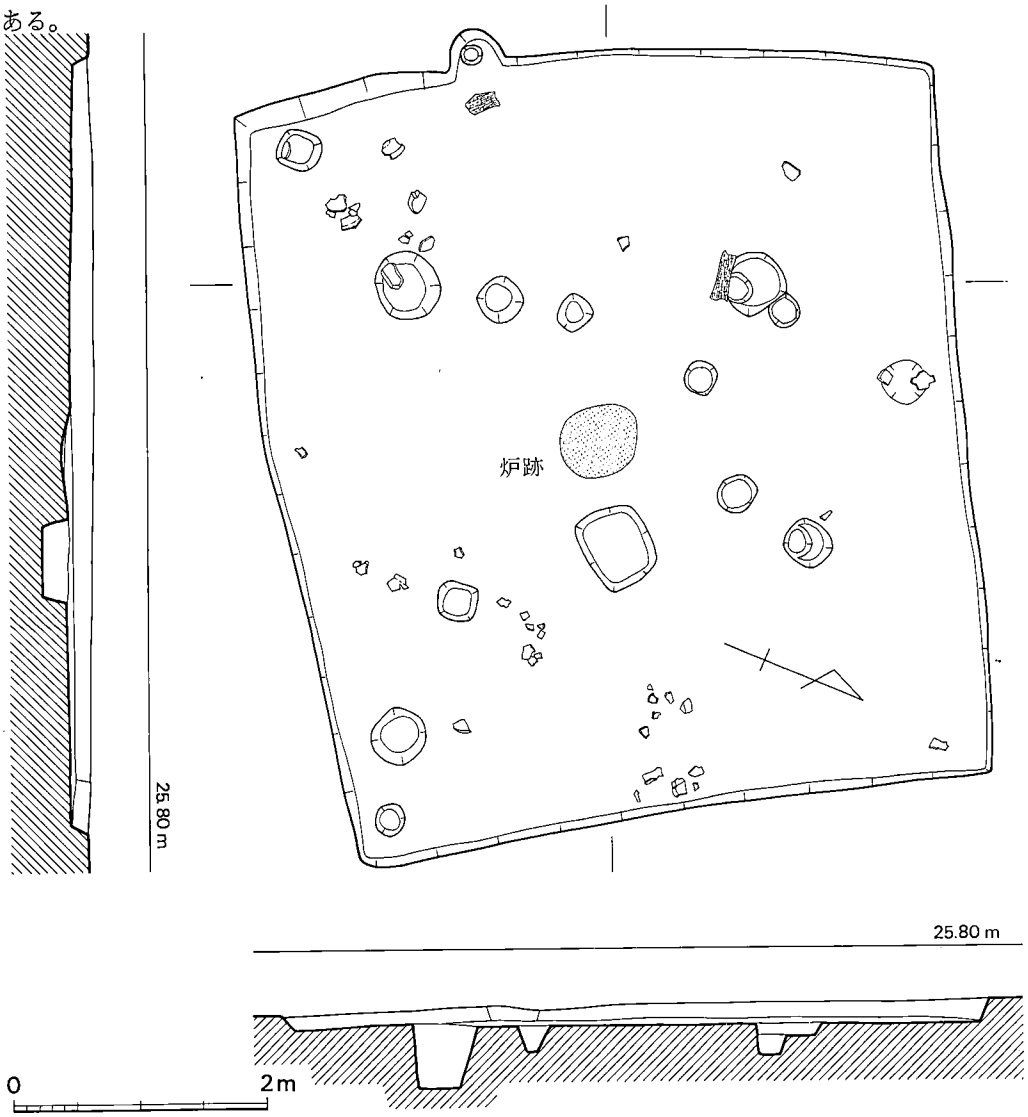
(22)は鉢で，口唇部は肥厚し端部は尖り気味で終る。底部は欠失しているが，レンズ状の底部をなすと思われる。



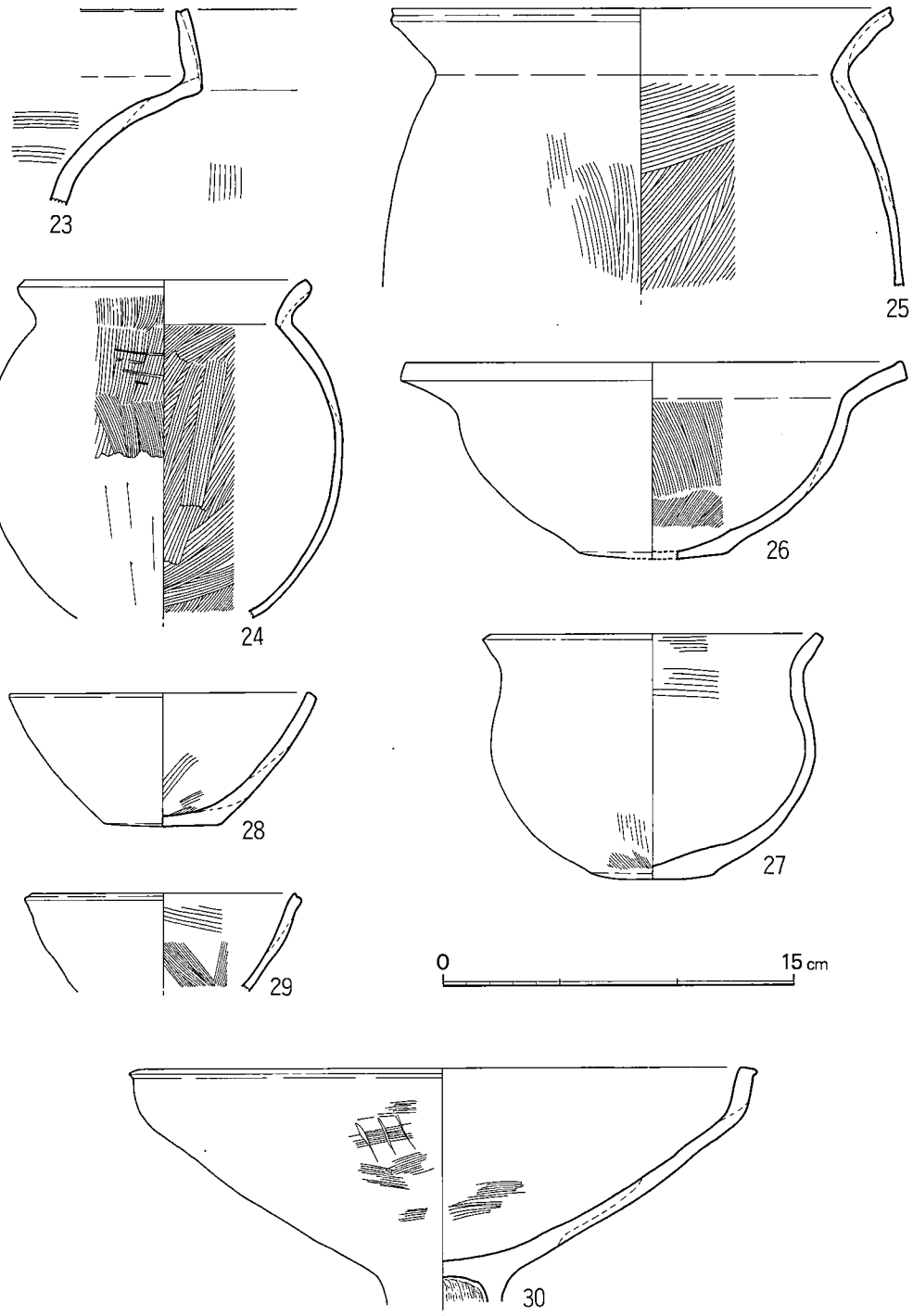
第18図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

6号竪穴住居跡（図版5-(1)・6-(1)，第19図）

4号住居跡の南側に隣接して，5号住居跡の壁の一部と時期不明の溝状遺構7を切った規模の大きい住居跡である。南西隅では2号掘立柱建物に切られている。住居の一部には炭化材が床面から約5㎝上層にあり，焼失住居の可能性が考えられるが明らかでない。平面形態はほぼ方形を呈するが，東壁がやや広がり気味になる。規模は南北壁5.60m・6.10m，東西壁5.20m・5.60m，壁高15㎝を測る。床面積は約31.6㎡である。柱穴は床面上で12個検出したが，主柱は4本で弥生時代後期後半～末にかけての住居跡としては稀である。深さは6㎝～50㎝と幅がある。



第19図 6号竪穴住居跡実測図（1/60）



第20図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

柱間は南北で2.65m・2.75m，東西で2.05m・2.50mを測り不規則である。床面のほぼ中央には2箇所炉跡が掘られており，細粒の炭化物が混入していたが，焼痕は顕著でない。主軸方位はN23°Wを示す。出土遺物は壷・甕・鉢・高坏の他，鉄器片がある。

出土遺物

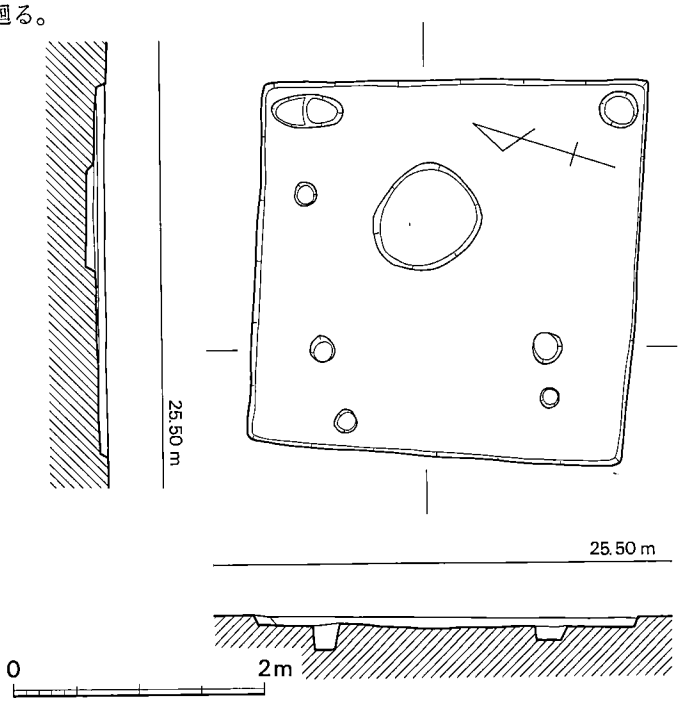
土器（図版17・18，第20図）

(23)は複合口縁の壷で，口唇部に沈線がみられる。

(24)・(25)・(27)は甕である。(24)は短い「く」字状に外反する口縁部に球形に近い胴部を持ち，内面に荒いハケ，外面上半部には細い叩キののち荒いハケを施し，下半部を下から上方向に篦削りをしている。(25)は張りの少ない胴部から「く」字状に外反する口縁部の端部は沈線が施され，口縁内外面は横ナデ，胴部は荒いハケ調整の仕上げである。(27)の口縁部は緩く外反し，やや張りのある胴部につづく。底部はレンズ状を呈する。調整はハケののちナデで，部分的に荒いハケが残る。

(26)・(28)・(29)は鉢形土器である。(26)は「く」字状に外反する口縁部を有し，端部は僅かに肥厚する。胴部の張りは少なく，底部は若干レンズ状を呈す。外面は丁寧なナデにより光沢がある。叩キの痕跡あり。内面は細いハケ仕上げである。(28)・(29)は前記の鉢とは異る系譜の鉢で，後の坏に引き継ぐものである。両者とも直に外反する口縁部を有し，(28)は平底を呈する。(29)の口唇部は肥厚し，鋭い沈線が廻る。

(30)は高坏形土器で，脚部を欠く。坏部は大きく開き，口縁下で緩く屈曲する。口縁部は僅かに外反し，端部はやや外傾し外側に肥厚する。胎土は砂粒子多く，金雲母を混入する。焼成は非常に良好。ナデ調整が主体を占め，一部ハケが残る。坏部と脚部の接合面には篦で掻きとった痕跡がある。この高坏は，在地の器形の系譜を引くものではなく，瀬戸内系の形態を呈する。



第21図　7号竪穴住居跡実測図（1/60）

鉄器（図版32，第70図）

刀子片（260）がある。両端とも欠損する。幅は1.4cm，

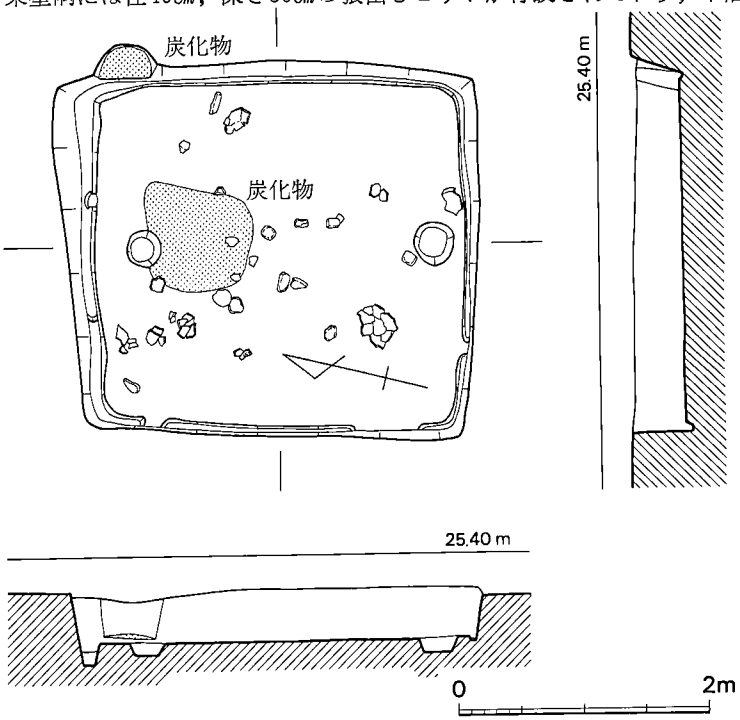
峰の厚さ3㎜を測る。

7号竪穴住居跡（図版6-(2)，第21図）

溝8の西側傍で検出した規模の小さな方形住居跡である。規模は南北壁3.10m・2.85m，東西壁3.05m・3.00m，深さ7cmで遺存状態は不良である。床面積は約9.0㎡を測る。柱穴は7個検出したが，主柱となり得るピットは3本のみで，本来は4本柱と考えられる。深さは10cm～18cmと浅い。柱間は西壁沿いのみ計測可能で1.75mである。床面のほぼ中央には円形の浅いピットが掘られており，径85cm，深さ7cmを測る。主軸方位はN18°Wを示す。出土遺物は僅かに布留併行期の甕の小破片があるが，図示不可能である。

8号竪穴住居跡（図版(7-(1)，第22図）

溝8の東側に隣接する方形プランを有する住居跡である。住居跡が廃棄された後に洪水で埋れたと思われ，砂の堆積が著しい。規模はやや小型で，南北壁2.80m・2.90m，東西壁3.35m・3.00m，壁高約40cmを測り，残りの良好な住居跡である。床面積は9.1㎡である。主柱は2本で約10cmと浅い。柱間は2.30mである。壁沿いには4cm～15.5cm，深さ3cm～15cm程の周溝が廻り，東壁と南壁の一部で途切れている。明瞭な炉跡は認められず，北壁沿いの柱穴の傍で80cm四方にわたって細かい炭化物が床面上に貼付いており，床面を掘り込んだ痕跡はなく，焼痕もみられない。さらに，東壁隅には径40cm，深さ30cmの張出しピットが付設されており，下層に炭化物が充塡しており，焼痕が顕著でないことから短期の火の使用が考えられる。住居跡の主軸方位はN14°Wを示す。床面上には土器片が散在し，壺・甕・坏・高坏の器種がある。時期は古墳時代前期である。



第22図　8号竪穴住居跡実測図（1/60）

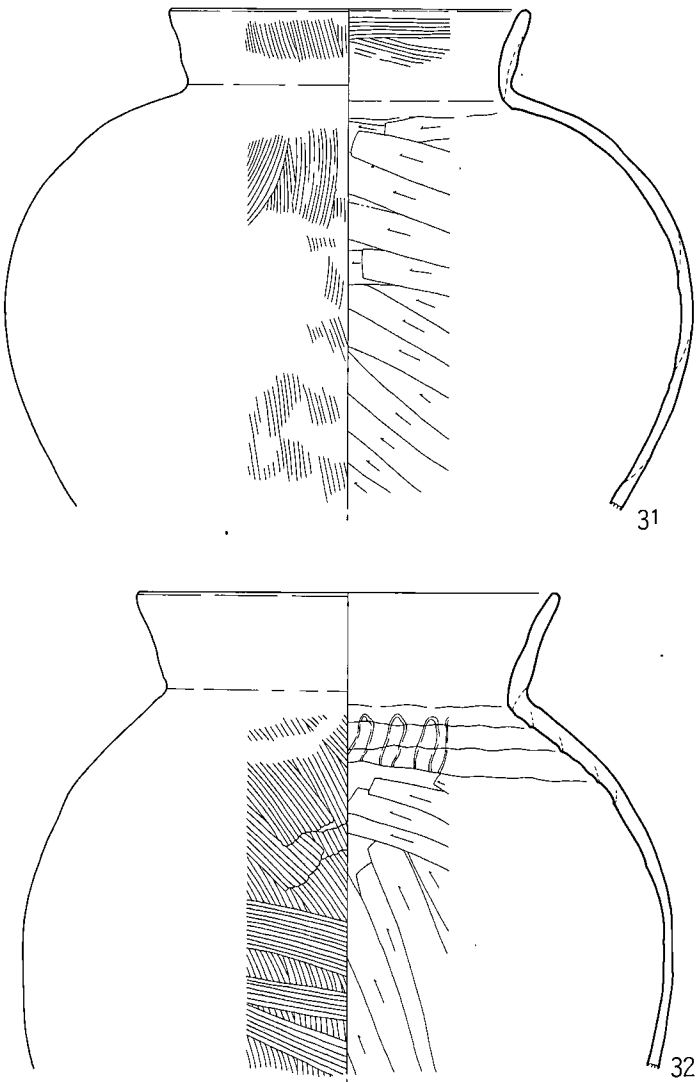
出土遺物

土器（図版18・19，第23・24図）

壺は(31)がある。直に外反する短い口縁部は厚目につくられ，鋭く張った肩部，やや平扁

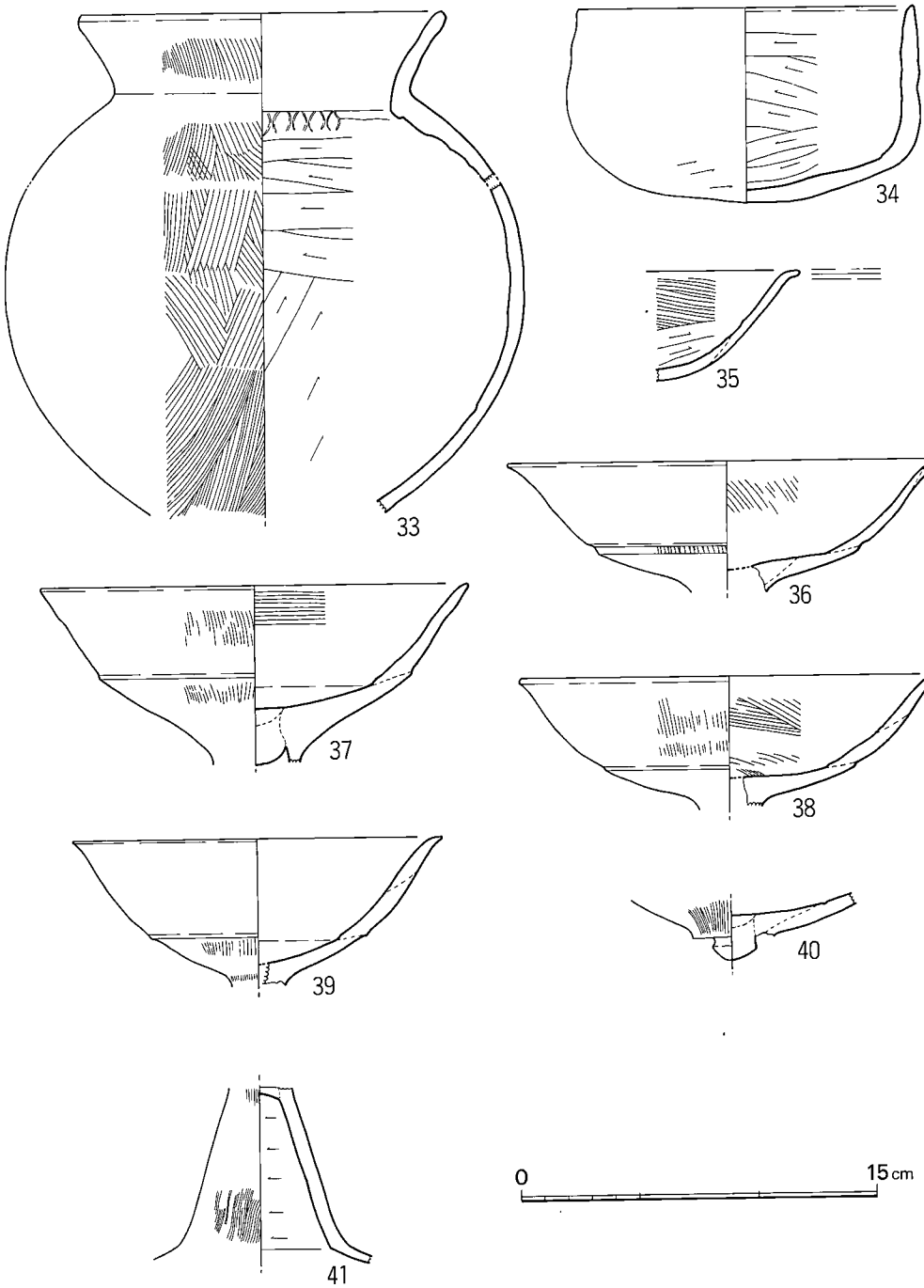
に近い球形の胴部を有す。器壁外面には著しく煤の付着がみられ，ハケの後ナデに仕上げてあるが，ハケが多く残る。口縁部の内面は横ハケと横ナデ。頸部の稜線より若干間を置いて丁寧な左廻りの篦削り技法を用いて器壁を簿く仕上げている。

甕には(32)・(32)がある。両者とも「く」字状に外反する口縁部を有すが，ほぼ直に外反する(32)の肩部はナデ肩を呈し，やや張の弱い胴部につづく。口縁部内外面とも水びき状の痕跡を残し，頸部の稜線下は指頭による圧痕のみで粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に観察できる。胴部内面は右から左方向に丁寧な篦削りで仕上げ，特に下半は薄く仕上げている。(33)は球形の胴部を持ち，外器面は荒いハケ，口縁内面は横ナデ仕上げである。内面は頸部内面下に指頭圧痕がみら



第23図 8号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

れ，以下は上半が左廻りのやや荒い篦削り，下半は下から上方向の篦削りで調整している。全体的に器壁は厚く，つくりが若干粗雑である。

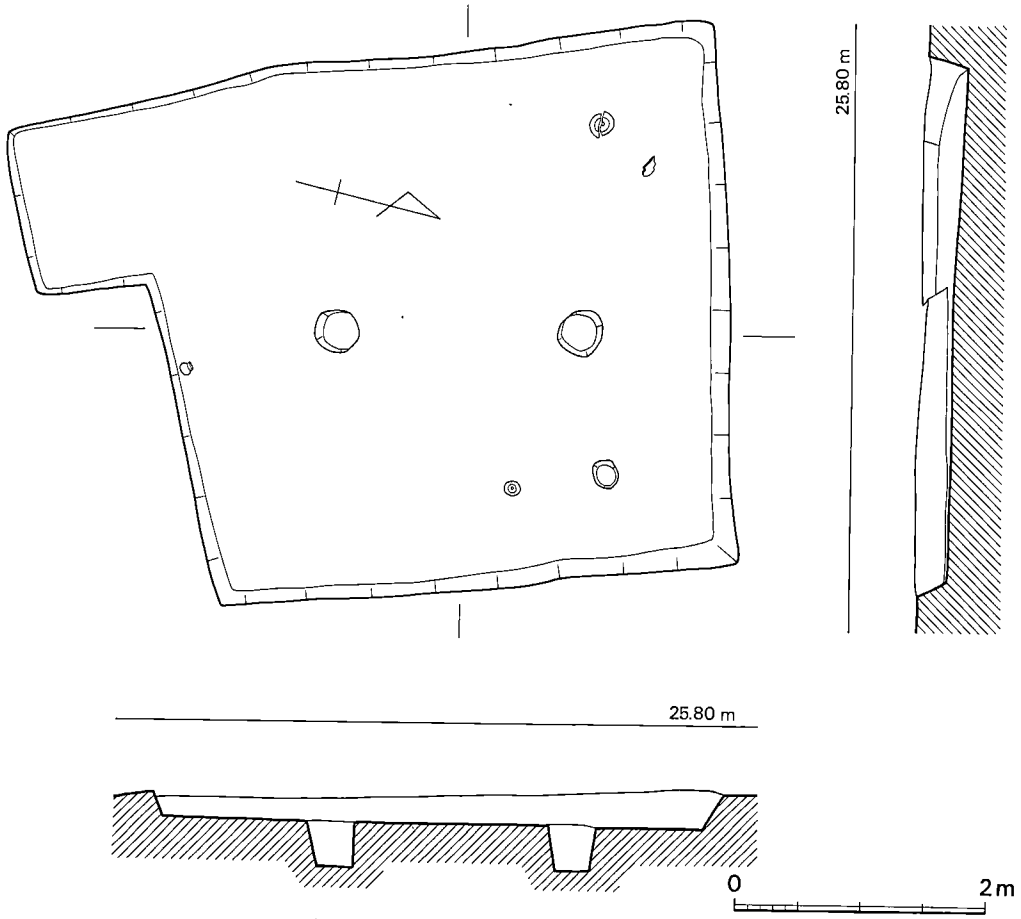


第24図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

坏には(34)・(35)がある。(34)は坏と云うよりは椀の形態を呈する。底部から鋭く直上する胴部は尖り気味の口縁部につづく。器壁外面には煤の付着が認められ，底部は強い二次焼成を受ける。直接煮炊きに使用したものであろう。外面横ナデ，底部は篦削り，内面は左廻りの篦削り調整である。(35)は坏の破片で，口縁部は外反する。内面は荒いハケと右方向の篦削り，外面はナデで仕上げる。胎土，焼成とも非常に良い。

(36)～(41)は高坏である。完形品はなく，坏か脚を欠く。坏部の形態には2種類あり，坏部の屈曲から口縁部にかけてほぼ直に外反する(37)・(39)とやや張りを持ち外反する(36)・(38)がみられる。接合部には脚部を直接差し込む場合と坏と脚を接合した後，空中を他の粘土で充塡する方法とがある。調整はハケとナデが主体で，一部水びき状のナデが認められる。(41)の柱状部はスマートで裾部で強く開く。裾部内面には明瞭な屈曲がみられる。胎土，焼成は(37)を除くと非常に良質である。

9号竪穴住居跡（図版7-(2)，第25図）



第25図　9号竪穴住居跡実測図（1/60）

14・15号住居跡の北側に隣接して掘られた住居跡で，平面形態がほぼ方形を呈する。南東隅には造り出し部を付設しており，住居の出入口を想定させる。規模は南北壁で4.05m・4.35m，東西壁は造り出し部を含めると4.15m・7.50m，深さ30cm前後を測り遺存状態が良い。造り出し部は幅1.40m，深さは床面よりも浅く12cmを測る。床面積は25.2m²である。主柱は2本で深さ35cmである。柱間は1.90mを測る。その他の施設はみられない。主軸方位はN14°Wを示す。出土遺物は短頸壷・甕・小型丸底・坏・器台・高坏等で，高坏の出土が目立つ。住居の時期は古墳時代前期である。

出土遺物

土器（図版19，第26図）

(42)は短頸壷である。口縁部は僅かに内傾する。肩部から胴部上半にかけては緩やかなカーブを描き，最大径は胴部下半にある。底部はやや平扁である。外面は非常に荒いハケ，口縁部内面は横ナデ，胴部は細いハケとナデ仕上げである。

(43)の甕は鈍く外反する口縁部に張りの弱い肩部を有す。頸部の屈曲はなく口縁部から胴部にかけてスムーズな曲線を描く。最終調整は口縁部外面が横ナデ，胴部は荒いハケ，内面は細い横ハケと横ナデ及びやや荒い左方向の篦削りで仕上げる。つくりは粗雑である。

(44)は小型丸底土器で土師器の甑である。口縁部を欠くが，現存で観察する限りでは，かなり外反すると思われる。外面には細いハケ，内面はナデ調整。

(45)は浅鉢で底部を欠く。口縁部は短かく外反し，全体に厚手づくりである。胎土，焼成とも非常に良好。

(46)は小型の器台で臼形を呈する。

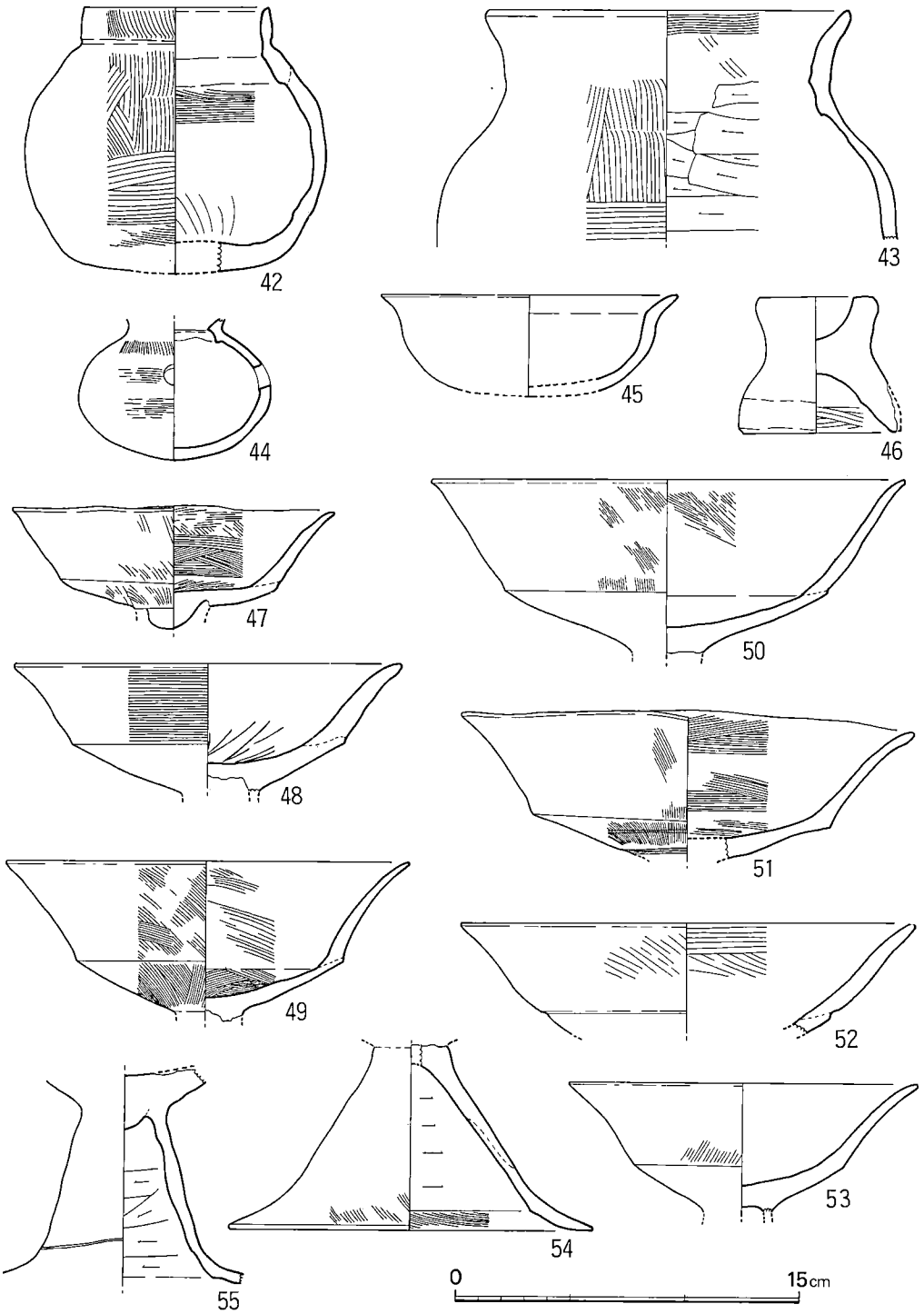
(47)～(55)は高坏で完形はない。坏部が浅い(47)，坏部の屈曲が鋭くやや反り気味に外反する(48)・(49)・(51)・(53)がある。この内(48)は器壁が厚い。さらに，坏部は屈曲し，僅かに張りを持って口縁部が外反する(50)の他，坏部は屈曲せず，沈線で表現しそのまま直に外反する口縁を有す(52)がある。調整はナデとハケによるが，(48)の内面は篦削りの痕跡があり，(52)は非常に荒いハケが最終調整となる。つくりは(52)を除くと非常に良好。脚部は2タイプあり，柱状部は広がり気味で裾部で大きく開く(55)と裾部まで直に近い広がりをみせる(54)とがある。

鉄器（図版32，第70図）

（261）は刀子で茎を欠失する。刀渡6.7cm，峰の厚さ3mm，関部の幅1.4cmを測る。刃部の半ばまで錆ぶくれが著しい。

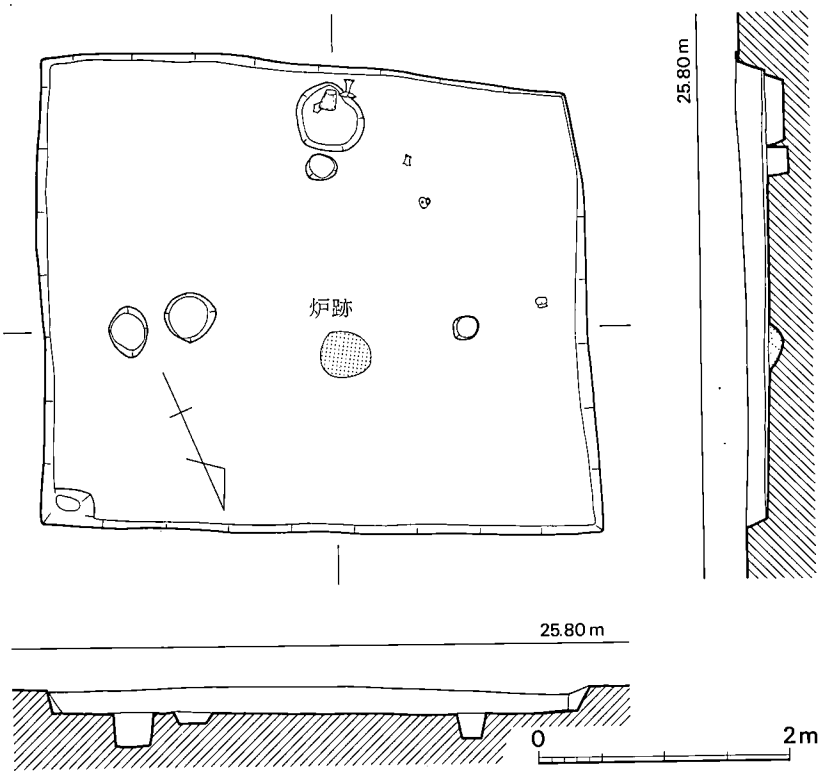
10号竪穴住居跡（図版8-(1)，第27図）

16号住居跡の北西隅と時期不明の溝7を切った住居跡である。平面プランはほぼ方形を呈し，南北壁4.45m・4.20m，東西壁3.75m・3.50m，壁高20cmの規模をもつ。床面積は15.3m²の広さである。底面上では3個の柱穴を検出したが，主柱は2本で，深さは20cm～25cmを測る。主



第26図　9号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

柱の柱間は2.70mである。南壁沿いには径約55cm，深さ15cm前後の屋内土壙を有す。床面の中央部には径40cmの焼痕の顕著な炉跡が掘られている。住居跡の主軸方位はN67°Wを示す。出土遺物は屋内土壙内から高坏，床面上で小型丸底・手捏土器・高坏等がある。住居の時期は古墳時代前期である。

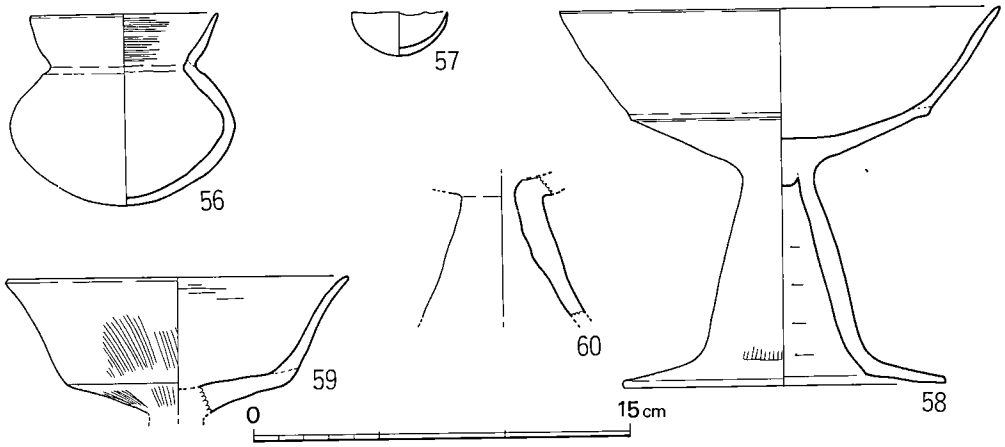


第27図 10号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物

土器（図版20，第28図）

56は小型丸底土器で，口縁部は僅かに内弯し口唇部は尖る。胴部は鋭く張り，玉葱状を呈す



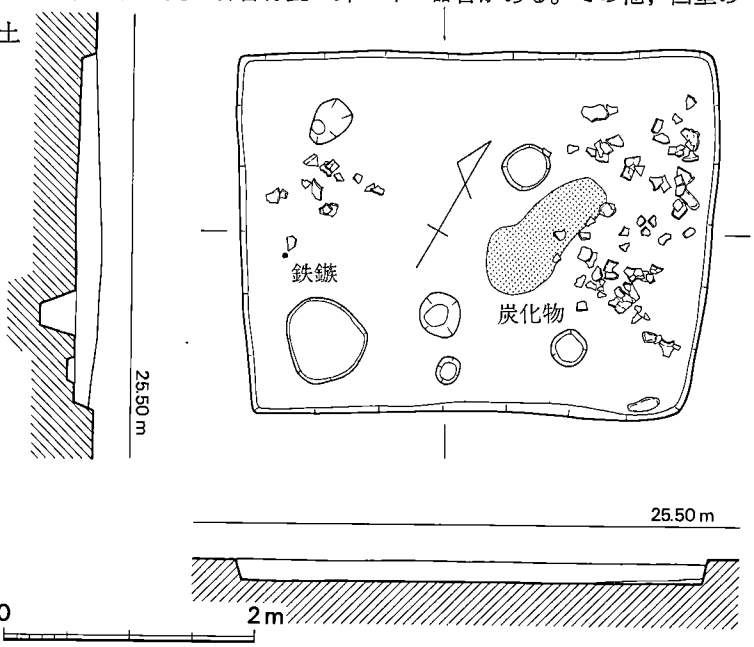
第28図 10号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

る。底部は若干尖り気味である。調整はナデが主体で，口縁内面は布か皮状の道具による横ナデ仕上げである。つくりの良好な土器である。

高坏は(58)～(60)がある。(58)は完形品で坏部は深く明瞭な屈曲を持つ。口縁部は直に外反する。坏と脚の接合部は細く締り，柱状部はやや膨れ気味に広がり，裾部で強く開く。裾部内面は明瞭な屈曲を持つ。調整はナデ主体で，脚裾部にハケの痕跡が残る。胎土は緻密で精製され，焼成は堅固で非常に良い。(59)の坏部の屈曲は鋭く，口縁部は反り気味に外反する。ハケが僅かに残るが，横ナデが主な調整手法である。

11号竪穴住居跡（図版8-(2)，第29図）

8号住居跡の南東で検出した住居跡である。住居跡内の覆土は砂層の堆積が顕著で，廃棄後に洪水に遭遇したものと推測される。平面形態は長方形を呈し，規模は南北壁3.45m・3.80m，東西壁2.90m・2.85mで小規模である。壁高は15cmで浅い。床面積は10.2㎡を測る。柱穴は床面上で5個検出したが，主柱となり得る規則的な柱穴は見あたらない。しかしながら，住居の形状から2本の可能性が高い。住居跡の南西隅には径65cm，深さ8.5cmの浅い円形ピットが掘られているが，屋内土壙としては通常設施される位置からずれており，機能を果すものではない。床面の西側には楕円形状に炭化物が散在していたが，床面上に薄く堆積しており，若干の火の使用は考慮されるが明瞭な炉跡として認められない。主軸方位は主柱が明確でないため測定が不可能であるがほぼN60°Eを示す。床面上にはかなりの数の土器片が散乱していたが，東壁沿いで顕著である。器種は壺・甕・脚台付甕・鉢・坏・器台がある。その他，西壁の傍で鉄鏃が床面上から出土している。住居跡の時期は弥生時代後期中頃から後半にかけてであろう。



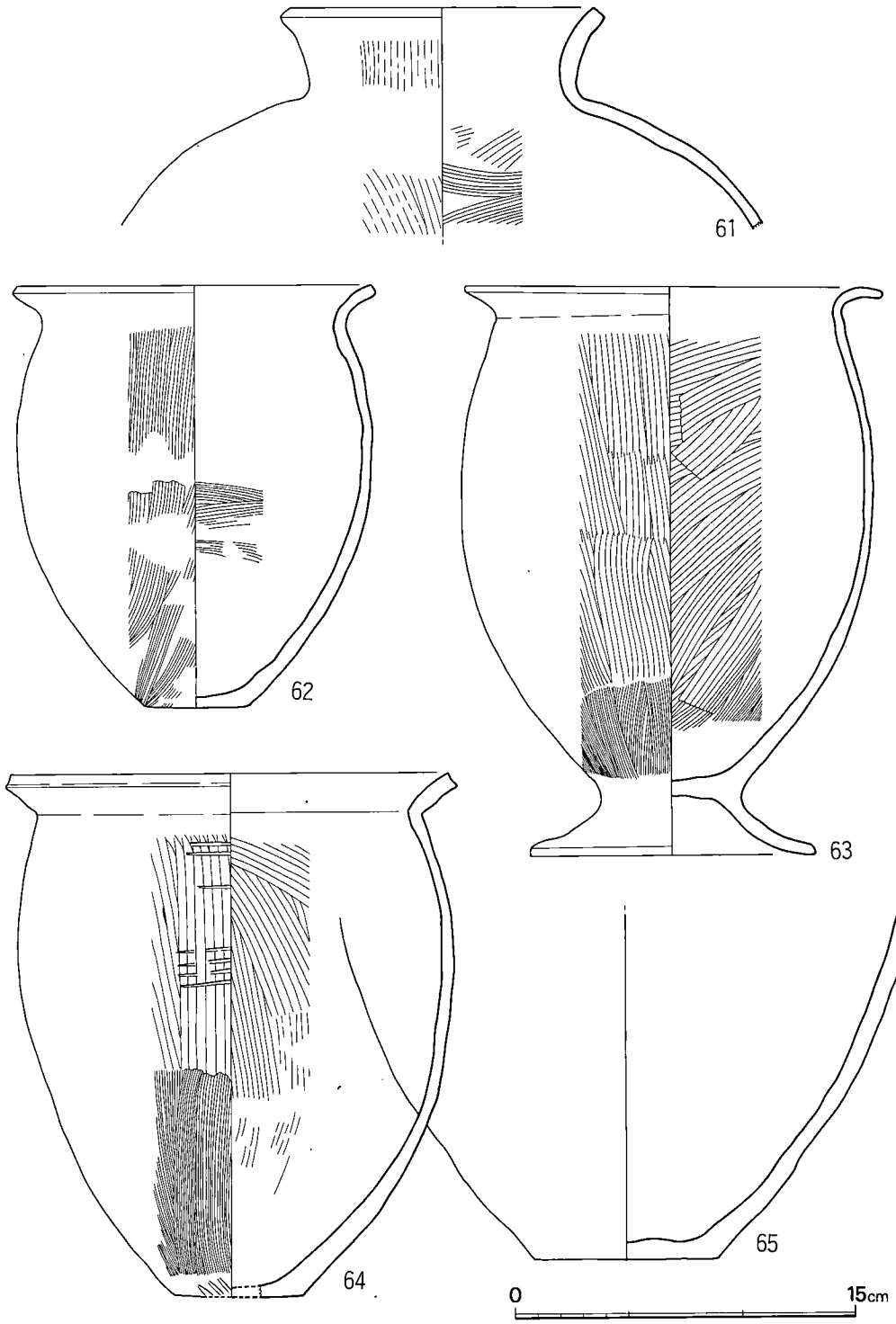
第29図　11号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物

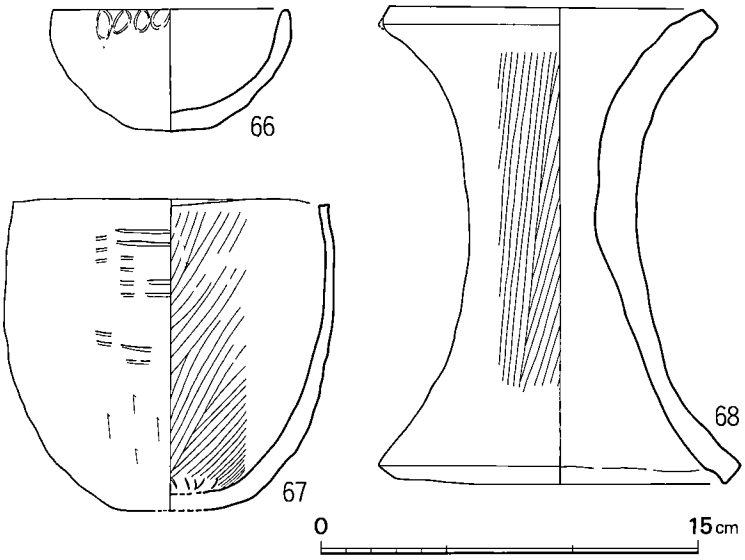
土器て（図版20，第30図）

壺には(61)がある。大きく張りのある肩部を持ち，上方に外反する口縁部は口唇部でさらに外反する。胴部に対して口縁部は短い。内外面には非常に荒いハケがみられる。

(62)～(65)は甕で，(63)は脚



第30図 11号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第31図　11号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

部付甕である。(62)は頸部の屈曲をもたず外反する口縁部を持ち，頸部は僅かに内傾する。胴部の張りは少なく，底部は平底を呈する。口縁部は横ナデ，器体外面はやや荒いハケ，内面はハケをナデ消している。胎土は砂粒多く不良であるが，焼成は非常に良い。(63)は中九州地方の影響を受けたもので，内傾する頸部に非常に大きく外反する口縁部を有す。胴部の張りは小さく，接合部から大きく開く扁平な脚台が付く。口縁部内外面は横ナデ，胴部は荒いハケ，外面底部近くは細いハケを下から上に施している。脚部は横ナデ仕上げである。胴部には煤が付着し，全面に二次加熱を受けている。(64)は「く」字状に鋭く外反した口縁部で横ナデによる若干の凹凸があり，端部は横ナデにより小さな凹線がある。肩部は少し内傾し，底部は平底を呈する。器体には２種のハケを使用している。外面には荒い叩キが残る。(65)の胴下半部は僅かに丸味を持ち，平底の底部につづく。外面には煤の付着と二次焼成が認められる。これらの甕は最大径が口縁部にある。

(66)は坏で口縁部に指頭圧痕がみられる。

(67)は鉢で口縁部がやや内傾し，口唇部が肥厚する。器部外面には荒い叩キ，下半は下から上方向への篦削りで調整している。内面は非常に荒いハケ。

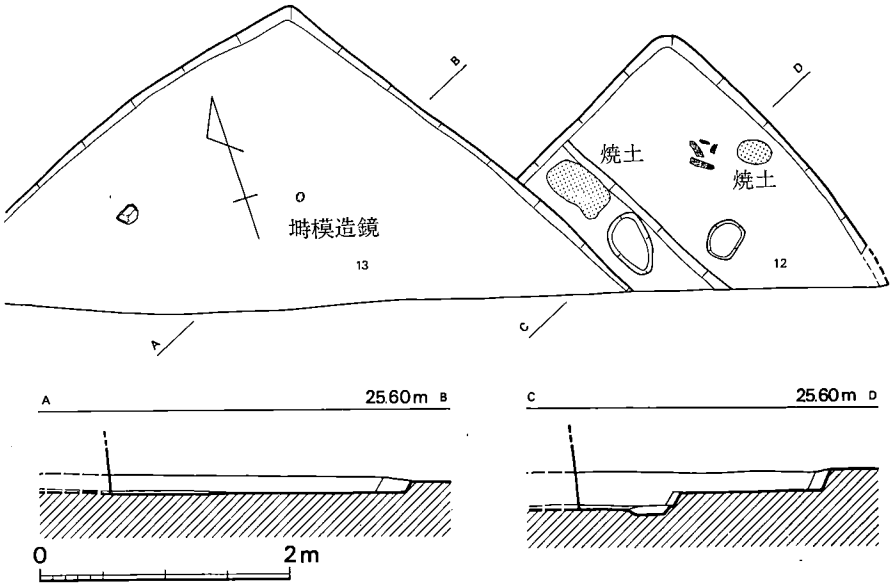
(68)の器台は口縁部と脚部の径に差違が少なく，上半の器壁は厚い。最小径がほぼ中央部にあり，古い様相を呈する。裾部内面には横ナデによる凹線がみられる。内面はナデ，外面は非常に荒いハケと裾部の横ナデで仕上げる。口縁部と裾部には二次焼成を受けている。

鉄器（図版32，第70図）

（262）は鉄鏃で切先を欠失する。身と茎とがスムーズな曲線を描く有茎式である。身の最大幅は1.7㎝，茎幅５㎜，全長5.9㎝を測る。断面は凸レンズ状を呈する。

12号竪穴住居跡（図版９-(1)，第32図）

本線幅である発掘対象区の南端で検出した住居跡で⅓のみ調査可能である。13号住居跡と切り合いがあり，13号住居跡よりも旧い。平面プランは長方形を呈すると思われる。壁高は26㎝



第32図 12号・13号竪穴住居跡実測図（1/60）

を測り，遺存状態は良好である。東壁側には幅1.10*m*，高さ10*cm*の削り出しのベット状遺構を付設している。ベット状遺構上と床面上で炭化材と焼土を検出したが，焼失住居跡の確証はない。主柱，主軸方位等は明らかでない。出土遺物は皆無に近く，僅かに弥生時代後期末頃の甕の小破片があるにすぎない。

13号竪穴住居跡（図版9-(1)，第32図）

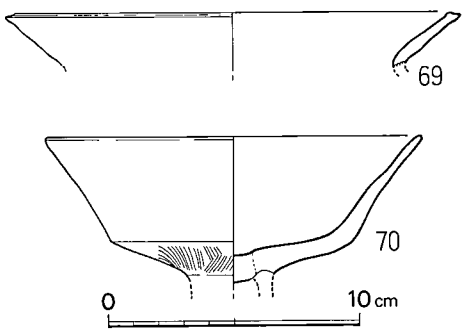
12号住居跡と重複し，方形プランを持つと思われる。⅓のみ調査可能なため詳細なことは不明である。壁高のみ計測可能で13*cm*を測る。遺物は甕・手捏土器片・高坏の他，土製模造鏡が床面直上で出土している。住居跡の時期は古墳時代前期である。

出土遺物

土器（図版21．第33図）

(69)は甕の口縁部の破片を復元したもので，口縁部は殆んど弯曲せず，口唇部を摘み上げていて肥厚する。調整は横ナデである。

(70)は高坏で坏部は屈曲し，口縁部は反り気味に外反する。底部中央には粘土を空中に充塡し押圧しており，やや凹み気味である。坏部屈曲下にはハケが残り，他には横ナデである。両者とも精製された胎土を有し，焼成が堅固



第33図 13号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

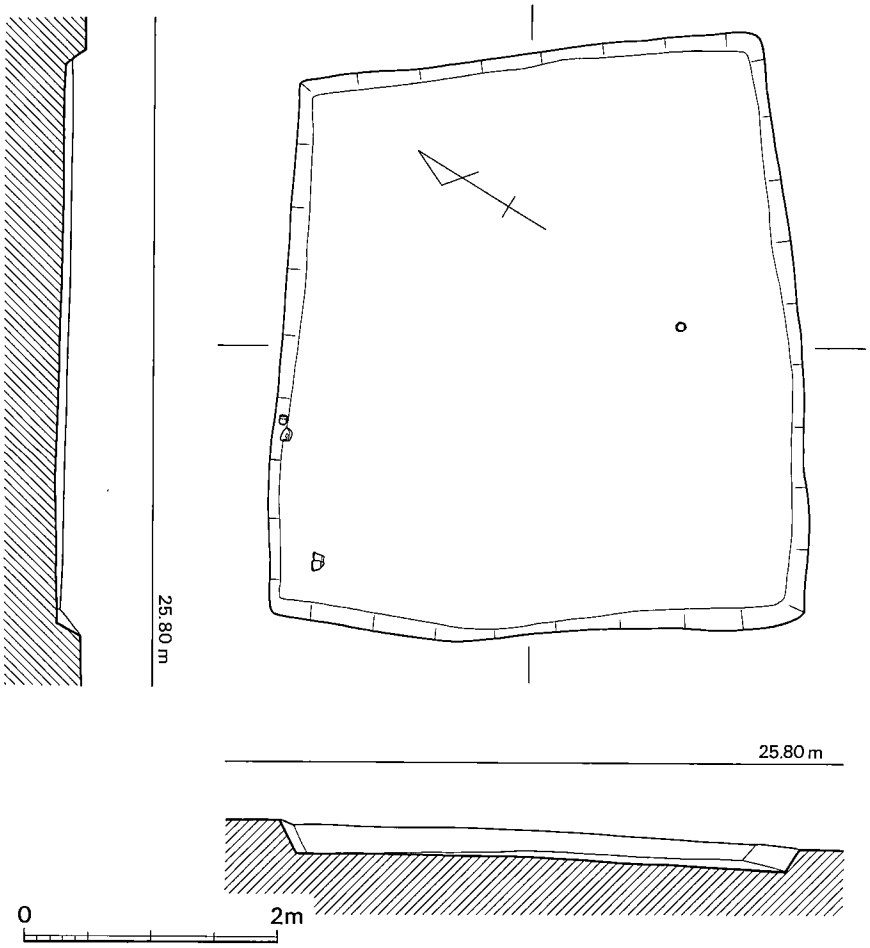
である。

土製模造鏡（図版32，第69図）

（248）は縁の一部を欠失しているが，ほぼ完形品である。背面には断面台形状の鈕を摘み上げており，径2㎜の孔を穿っている。鈕の廻りは若干凹状を呈する。鏡面は僅かに反り，中央部は凹状となる。径は5.4㎝を測る。背面には指頭ナデと非常に細いハケが少しではあるがみられる。焼成は非常に良く，淡茶褐色を呈する。

14号竪穴住居跡（図版9-(2)，第34図）

15号住居跡の西側に隣接して検出したほぼ方形を呈する住居跡である。規模は南北壁4.75m・4.35m，東西壁3.70m・4.30m，壁高25㎝前後を測る。床面積は約16㎡である。柱穴，周溝，炉跡等は明らかでない。柱穴が不明なため主軸方位も測定し難いが，ほぼN58°Eを示す。出土遺物は甕・小型丸底・鉢・高坏等がある。時期は弥生時代終末頃に比定される。



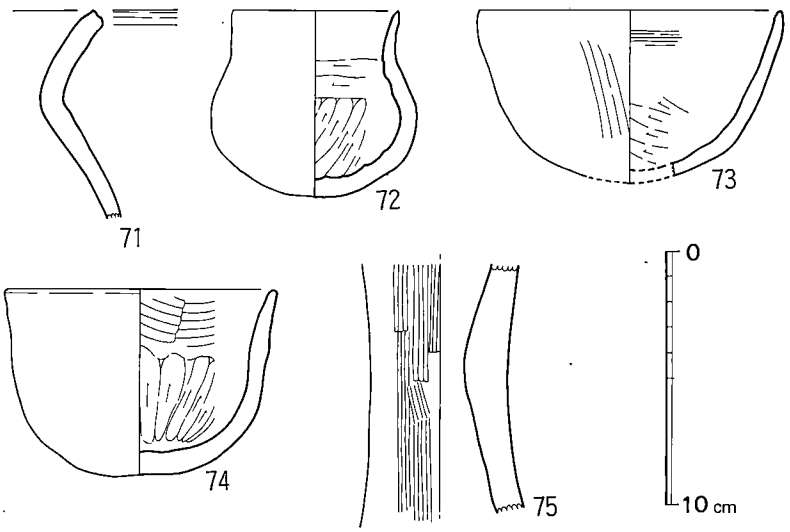
第34図 14号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物

土器（図版21，第35図）

(71)は甕の破片で「く」字状に外反した口縁部に張りの鈍い肩部を持つ。口唇部には凹線を施している。

(72)の口縁部は殆ど外反せず直に延び，口唇部は尖る。肩部はナデ肩で，胴部は扁球を呈し底部は丸底である。器体外面はナデ，底部は小口板状のカキとりを施す。頸部内面には粘土紐の巻き上げ痕を残し，底部から胴部にかけて指頭ナデ仕上げである。器壁全体に光沢がある。



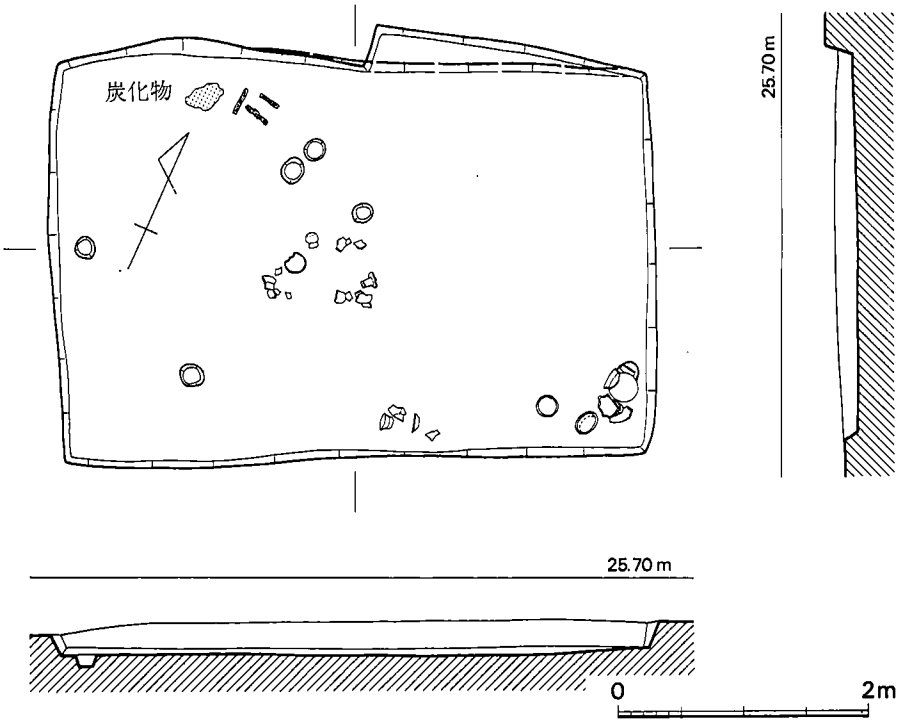
第35図　14号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

(73)・(74)は鉢である。(73)は底部を欠くが，胴部から口縁部にかけて直に開き口唇部が内傾気味になる。外面には非常に荒いハケが残る。(74)は口縁部が若干外反し，胴部に丸味を持つ。外面はナデ，内面は非常に荒いハケと下から上方向にかけての指頭ナデで調整を施す。

(75)は高坏の脚部と思われ，大型品である。器壁は厚く，外面に荒い縦ハケ，内面は篦で縦方向に磨キをかける。

15号竪穴住居跡（図版10-(1)，第36図）

旧河川敷の西側，14号と9号住居跡に隣接する住居跡である。平面形態は長方形を呈し，北壁は僅かに崩壊している。規模は南北壁4.70m・4.75m，東西壁3.00m・3.20m，壁高20cm強を測る。住居跡の床面積は約14.3㎡である。床面上で5個の柱穴を検出したが，主柱となり得る柱穴は見当らない。検出した柱穴の深さは7cm～10cmと浅い。その他の施設は認められず，主軸方位も不明瞭であるがほぼN65°Eを示す。遺物は南東隅でかなり良好な土器が残存しており，元位置を保っていると思われる。床面上で炭化材及び焼土を検出したことから，焼失住居跡の可能性を残す。出土した土器は殆んどが床面上で，器種は壷・甕・小型丸底土器（坩も含む）・浅鉢・坏・高坏等があり器種も豊富である。出土土期から住居跡の時期は古墳時代前期である。



第36図 15号竪穴住居跡実測図（1/60）

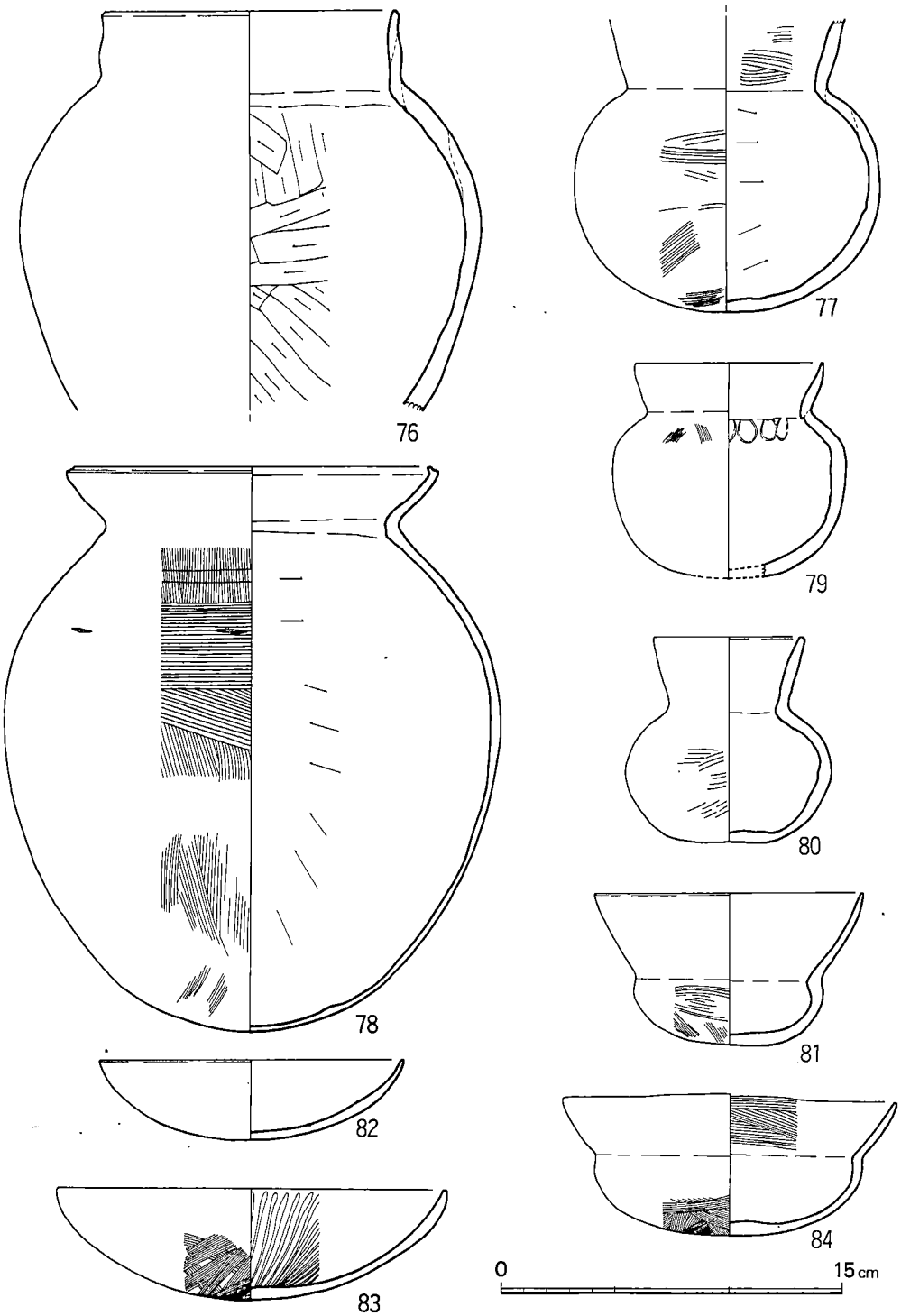
出土遺物

土器（図版21・22，第37・39図）

(76)は短頸壺で胴下半を欠失する。頸部は上方に外反し，波打ちながら僅かに外反する口縁部を持つ。肩部はナデ肩で胴部はやや張り気味で器壁は厚い。口縁部内外面は水びき状の横ナデ。以下外面は丁寧なナデで，内面は少し下った箇所から左廻りの篦削りを施している。胴下半部には若干の二次焼成を受ける。胎土は精製され良質であるが，つくりはやや粗雑の感がある。(77)は「く」字状に外反する口縁部で直に延びる。胴部には張りを持ち，球形を呈する。外面は風化し不明瞭であるが，荒いハケが残る。内面は荒いハケと右方向の篦削り仕上げで，焼成は非常に良く，丁寧なつくりの土器である。

甕には(78)がある。若干内弯気味に外反する口縁部は端部で摘み上げ肥厚する。肩部はやや張り気味で最大径は胴部上半にある。底部は張りを持ち細味でないことから，新しい要素も窺える。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は縦ハケと横ハケを併用しており，肩部には縦ハケの上から2条の沈線を有し，篦による刺突文状の装飾を施す。内面は頸部より僅かに下半から篦削り仕上げである。

(79)～(81)は小型丸底土器で，(79)のように短く内弯する口縁部に肩部の張ったもの，頸部から口



第37図　15号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

縁部が直に外反し，肩の張りの鋭い球形の胴部に平底気味の底部を持つ(80)，長い内弯気味の口縁部に扁球状の胴部を有す(81)等がある。調整は内面がナデ主体で，(79)の外面は細いハケののちナデ。(80)の胴部には荒いハケが残る。(81)は胴部にハケが認められ，全体的に風化し，器面がざらつく。さらに，(79)の外面には煤が付着し，(81)は二次加熱が顕著である。

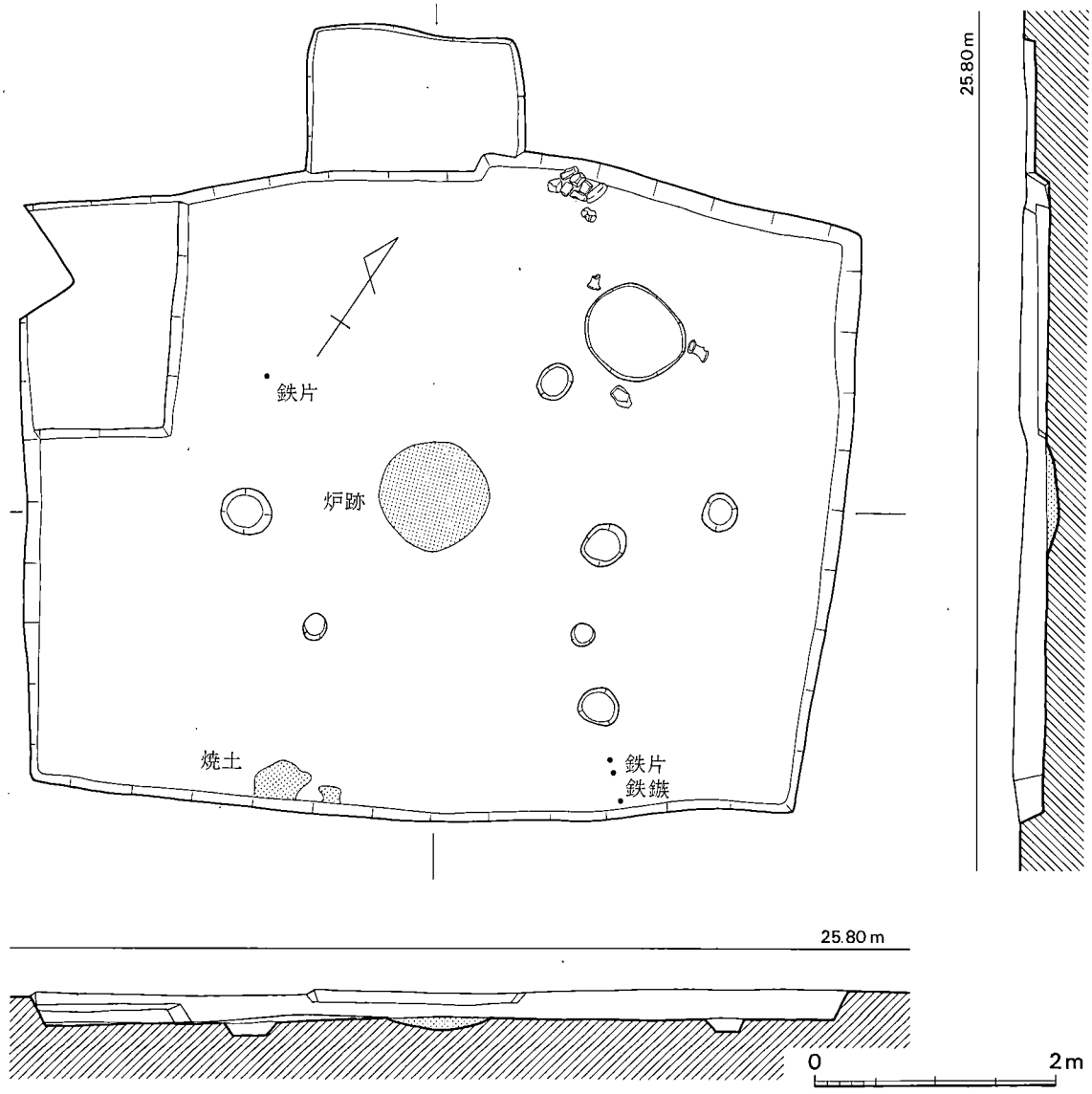
坏には大小の2種類がある。(82)は風化して調整が不明であるが，磨キかナデであろう。器高は低い。(83)は外面に横ナデと不定方向の細いハケで，内面には暗文状の篦磨キで仕上げている。

(84)～(86)は浅鉢である。(84)の口縁部は内弯気味で長く，上方に外反する。胴部はやや張り，底部は厚く作られている。器壁外面は横ナデと不定方向のハケ，内面は細いハケとナデ仕上げである。鉢にしては若干粗雑である。内面に一部煤が付着する。(85)は非常につくりの良い鉢で，短かく「く」字状に外反する口縁部は僅かに波打つ。肩から胴部は強く張り，2条の沈線を刻み込んでいる。頸部の屈曲は著しい。外面の口縁部は横ナデ，肩部は細いハケ，胴部は磨キで仕上げる。内面は細いハケとナデ調整である。胎土・焼成とも非常に良好。(86)は器壁が厚く，胎土もやや不良である。

高坏には(87)～(91)がある。坏部の屈曲は鈍く，口縁部が屈曲部から直に外反する(87)・(88)と強く屈折し口縁部が反り気味に外反する(89)，同様の屈曲部からほぼ直に上方に外反する(90)とがある。(87)には内面に浅い沈線を一周させており，坏部の接合部には「×」状の刻みを施す。口縁部内外面とも若干の二次加熱を受け，内面の風化が顕著に見られる。(88)は細いハケを残す。脚部と坏部の接合部には細い沈線を廻す。(89)は荒いハケののち横ナデ，(90)は横ナデ主体で，内面が風化している。さらに，口縁部は二次加熱を受ける。高坏は総体的に作りが良好で，胎土・焼成とも非常に良い。(91)の脚部は中央部で僅かに膨らみ，裾部は短かくしかも強く開く。裾部外面では篦削りの痕跡が残り，内面は右廻りの篦削り仕上げである。

16号竪穴住居跡（図版10-(2)，第38図）

10号住居跡に切られ，溝7を切った状態で検出した大型の住居跡である。平面プランは長方形で，北壁が僅かに胴張りを呈する。規模は南北壁6.35m・7.00m，東西壁4.85m・4.80m，壁高25cm前後を測る。床面積は33.8m²で，当遺跡の弥生時代の住居跡では最大である。床面上では7個の柱穴を確認したが，主柱は2本である。柱穴は2本とも浅く，約10cmを測る。柱間は4.00mである。北西壁の隅には幅1.20m，長さ1.85m，高さ10cmの削り出しのベット状遺構が設置されている。さらに，北壁中央部には幅1.80m，奥行1.15m，壁高10cmの造り出し部を付設しており，出入口の可能性がある。床面中央部には径90cm深さ10cmの炉跡が設けられており，炭化物及び焼土の埋土が認められた。焼痕は著しくない。住居跡の主軸方位は N55°E を示す。さらに，南壁の傍には部分的に焼土が床面に密着した状態で検出した。出土した遺物は甕・器台の他，鏃・鉄片(二次加工前の鉄素材？)等がある。また，北壁沿いには床面から約10cm上層に8個の河原礫を集石した状態で検出したが，用途は不明である。住居跡の時期は器台



第38図　16号竪穴住居跡実測図（1/60）

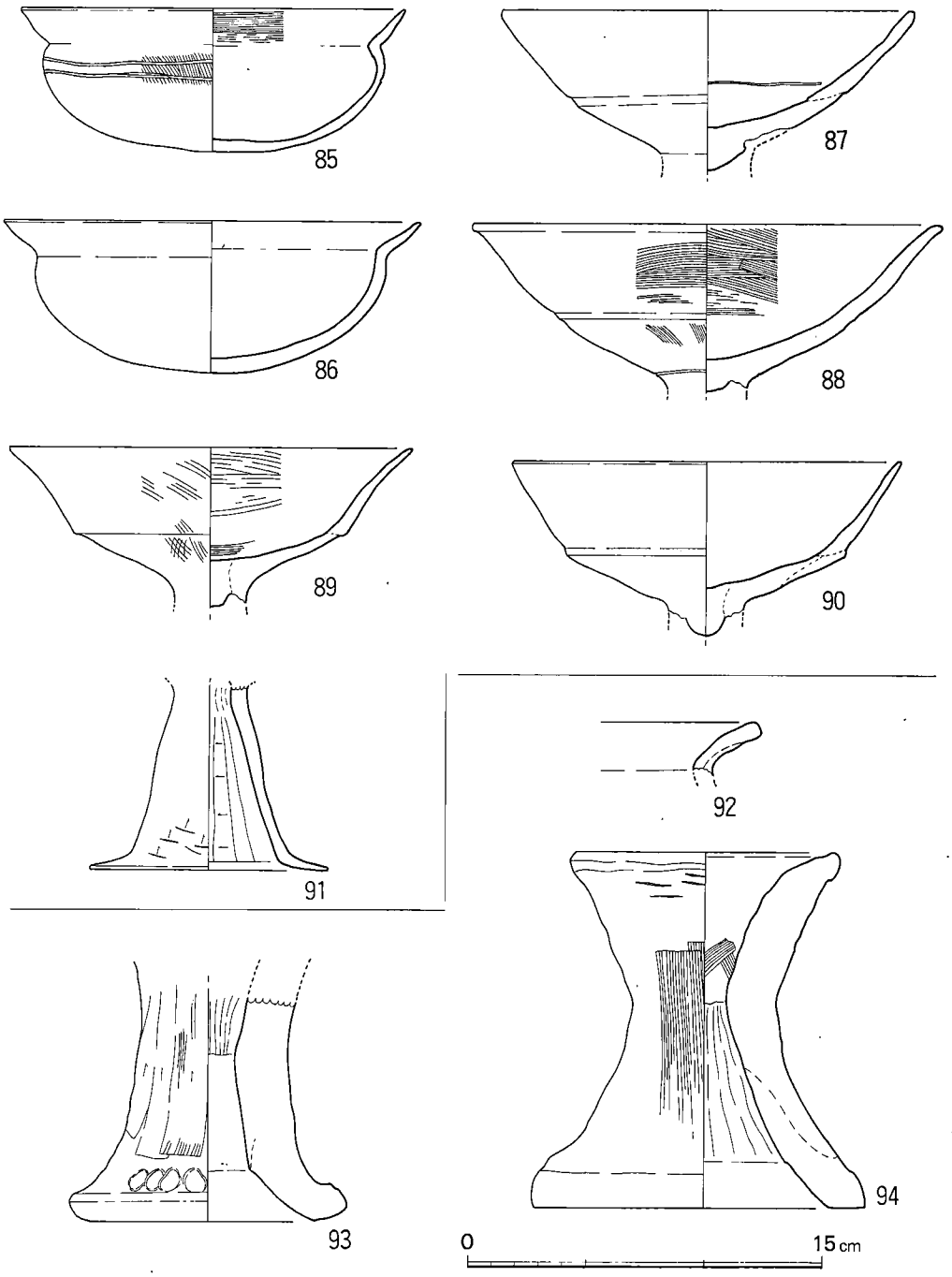
から弥生時代後期中頃前後であろう。

出土遺物

土器（図版22，第39図）

(92)は「く」字状に鋭く外反する甕で，外面に若干の凹凸がある。

(93)・(94)は器台で，(93)は脚部が短く開き肥厚し，内面２箇所に屈折を有す。最小径はほぼ中央部にある。裾部には指頭圧痕，胴部は板の小口状の工具により下から上方向にカキ上げている。(94)は最小径が中央部よりやや上半にあり，この屈曲部から大きく開く。口縁部は屈折して



第39図 15号（85～91），16号（92～94）竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

外反し，先細りに終る。脚の裾部は稜を有さず，接地部は平坦をなす。器壁外面は口縁下部に叩キが残り，中央部には細いハケ，下部はナデ仕上げである。内面は横ナデ，小口板によるカキ取り，屈折部以下は絞り痕が残る。さらに，器体全面に二次焼成を受けているが，裾部が特に著しい。(93)・(94)とも器壁が厚くつくられ，胎土は砂粒多く不良であるが，焼成は非常に堅固である。

鉄器（図版32，第70図）

（263）は鏃である。茎部の大半と切先部を欠失する。現存長3.9cm，茎幅 1.4cm で，断面が僅かに内弯する。木質等の銹着は認められない。

（264）・（265）は不明鉄器である。刃部はみられず，断面は低い蒲鉾形と三日月形を呈する。（265）は藁の付着がみられ，両者とも二次加工前の鉄素材と考えた方が妥当であろう。

(2) 土　壙

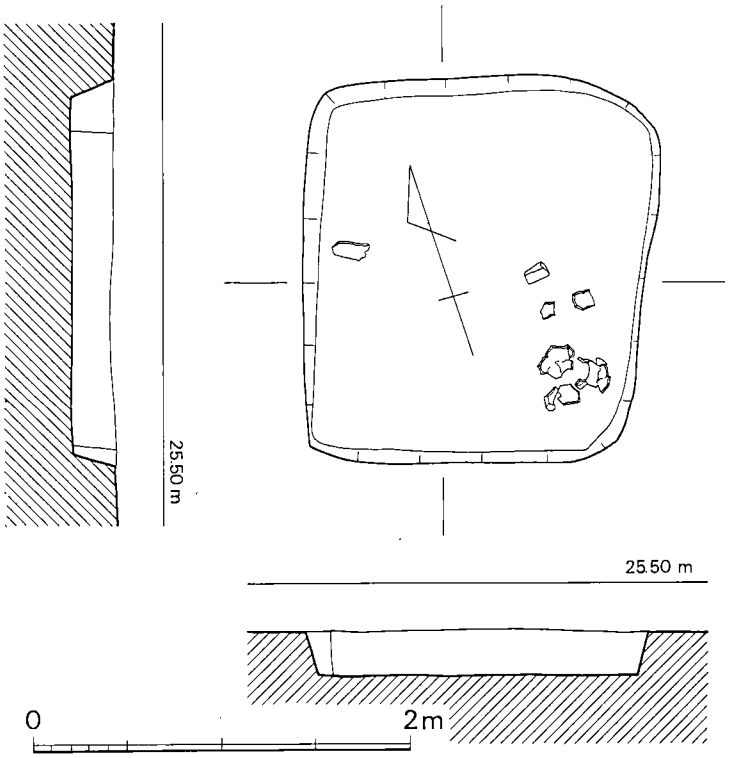
1号土壙（図版11-(1)，第40図）

溝6の東側で検出した方形プランを有す土壙である。規模は長軸辺2.05m，短軸辺1.70m，深さ25cm弱である。床面上にはピットはなく，古墳時代前期の壷と甕が床面に密着した状態で出土した。遺構の機能は不明。

出土遺物

土器（第41図）

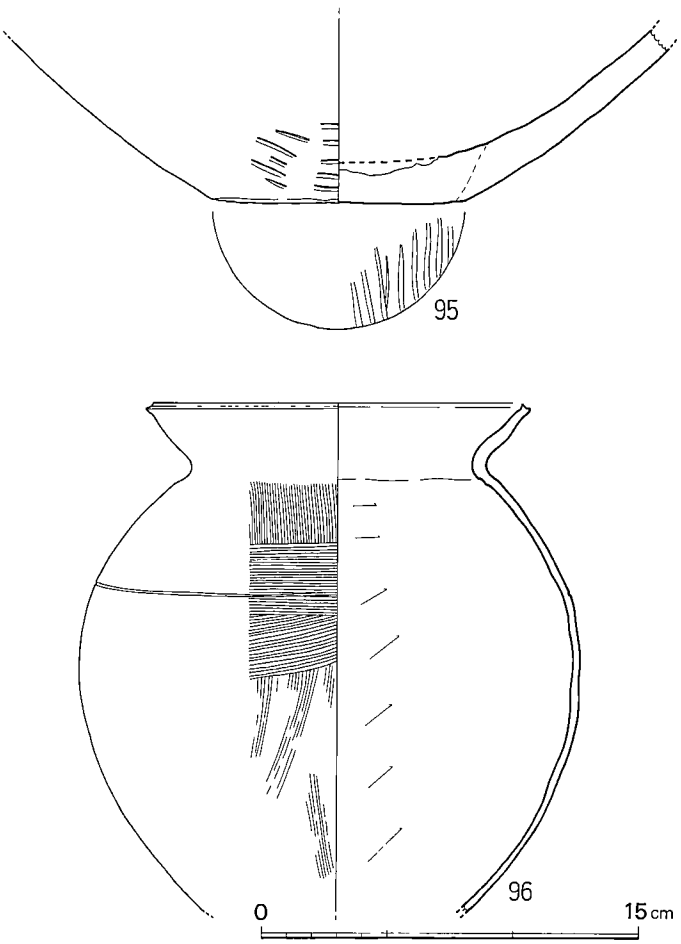
(95)は大型の壷形土器の底部である。底部は平底で，調整は外面が非常に荒い叩キののち板状の小口で下から上方向にカキ取り仕上げである。内面はナデで一部器面が剝落している。底部には外面と同様の叩キの上からナデている。大型土器としては砂粒が少なく胎土は良好。焼成も



第40図　1号土壙実測図（1/40）

非常に良い。

㊻は口縁部が僅かに波打ちながら外反し，口唇部は摘み上げ肥厚させている。肩部はナデ肩で，胴部の張りは少ないが，最大径が胴部中央にある。さらに，肩部には1条の沈線が廻り，装飾を施している。調整は口縁部内外面とも横ナデ，肩から胴部にかけては縦ハケと横ハケを使用し，下半は風化してハケが不明瞭である。内面は右廻りの篦削りである。器体上半には煤の付着が顕著であり，下半に二次加熱を強く受ける。器壁は薄く，焼成は堅固である。



第41図　1号土壙出土土器実測図（1/3）

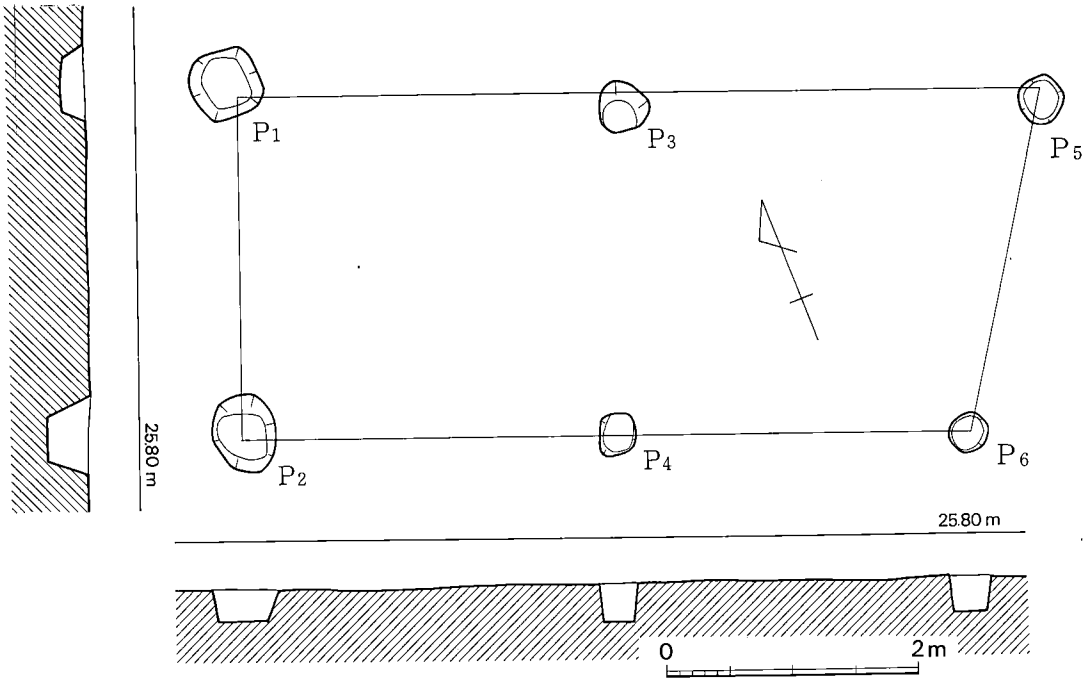
2号土壙（付図）

7号住居跡の南側にあり，楕円形を呈する土壙である。長軸1.60m，短軸90cm，深さ32cmを測る。出土遺物は甕形土器の細片で器面に荒い叩キがあり，弥生時代後期後半前後と思われる。

(3)　掘立柱建物

1号掘立柱建物（図版12-(1)，第42図）

1間×2間の建物である。P3—P5の桁行柱間は他の柱間よりも長い。主軸方位はN69°Wを示す。柱穴の深さはP1—18.5cm，P2—26cm，P3—36cm，P4—30cm，P5—25cm，P6—26cmを測る。



第42図　1号掘立柱建物実測図（1/60）

2号掘立柱建物（図版12-(2)，第43図）

2間×2間の総柱建物である。弥生時代後期の6号住居跡を切っている。各々の柱間は同等の間隔を持ち，しっかりした建物である。その内，P7に相当する柱穴は検出不可能であった。P8は後世の攪乱により破壊されていたが，攪乱内に他の柱穴と同一の覆土が残っていることから，P5—P6と同間隔に柱穴が掘られていたと思われる。P9は2段掘りである。主軸方位はN58°Eを示す。柱穴の深さはP1—45cm，P2—45cm，P3—23cm，P4—37cm，P5—37cm，P6—31cm，P9—37cmを測る。

3号掘立柱建物（第44図）

8号住居跡の東側に隣接する位置にある1間×1間の建物である。主軸方位はN27°Wを示す。柱穴の深さはP1—40cm，P2—13cm，P

第1表　1号掘立柱建物計測表　（単位cm）

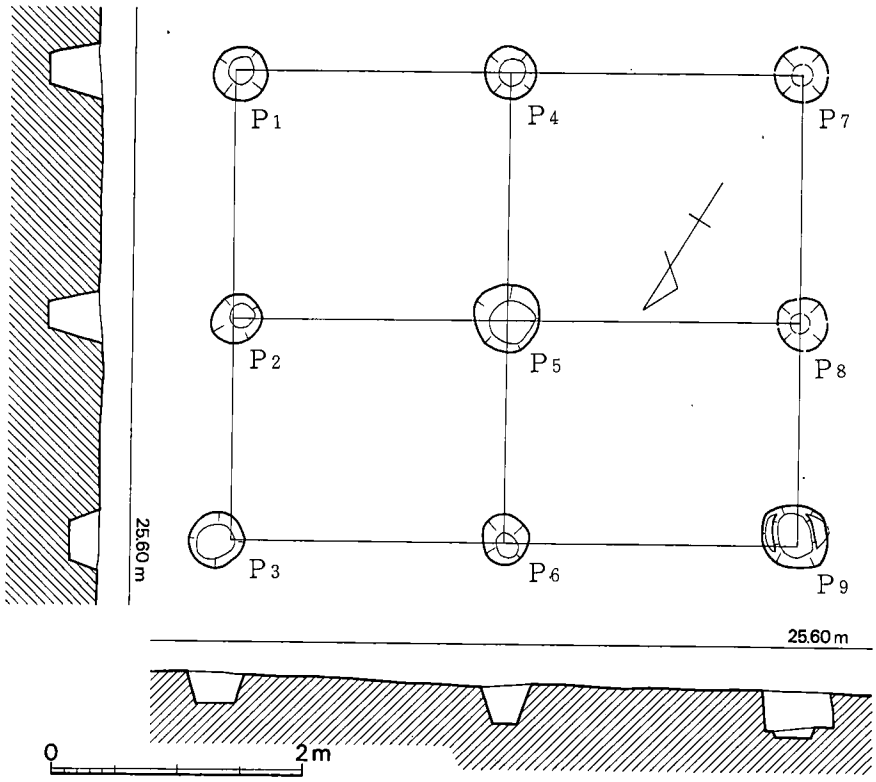
梁間間		桁行柱間		桁行間
P1—P2 280	P3—P4 250	P1—P3 320	P3—P5 330	P1—P5 645
	P5—P6 265	P2—P4 300	P4—P6 280	P2—P6 580

第2表　2号掘立柱建物計測表　（単位cm）

梁間柱間		梁間間	桁行柱間		桁行間
P1—P2 195	P2—P3 175	P1—P3 370	P1—P4 215	P4—P7 ——	P1—P7 ——
P4—P5 195	P5—P6 175	P4—P6 370	P2—P5 215	P5—P8 ——	P2—P8 ——
P7—P8 ——	P8—P9 ——	P7—P9 ——	P3—P6 230	P6—P9 230	P3—P9 460

第3表　3号掘立柱建物計測表　（単位cm）

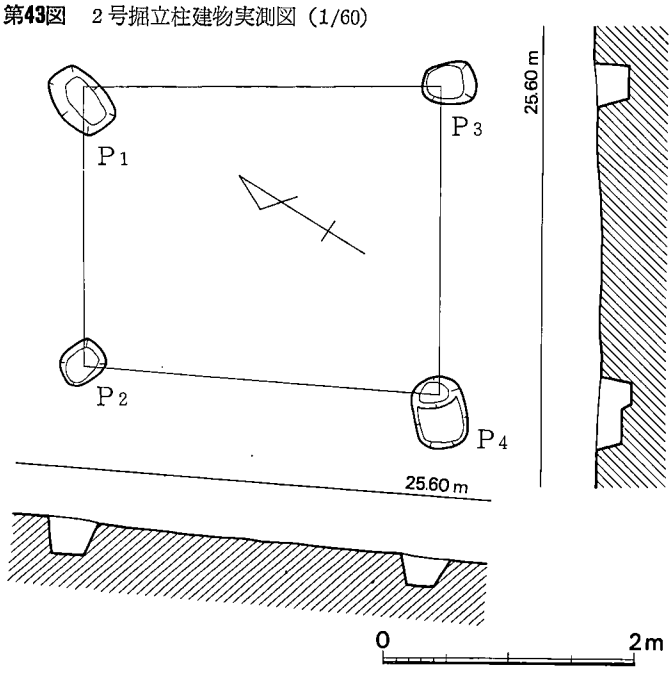
梁間間	桁行間
P1—P2 215	P1—P3 290
P3—P4 250	P2—P4 280



第43図　2号掘立柱建物実測図（1/60）

3—28cm，P 4—23cmを測る。

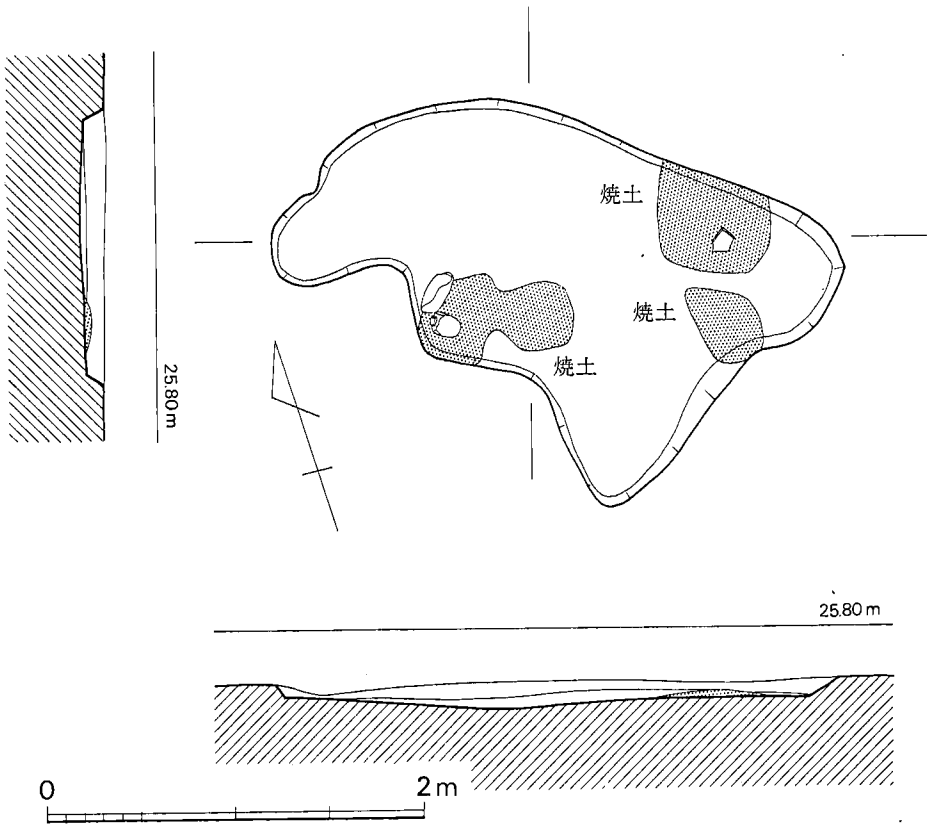
以上が掘立柱建物の概要であるが，建物の時期は柱穴内からの出土遺物が皆無であることから，その上限時期も明らかでない。判ることは2号建物が弥生時代後期の住居跡を切っていることから，同時期以降であると云うことのみである。



第44図　3号掘立柱建物実測図（1/60）

(4)　クド跡（第45図）

2号住居跡の北西側で検出した不整形プランを有す竪穴

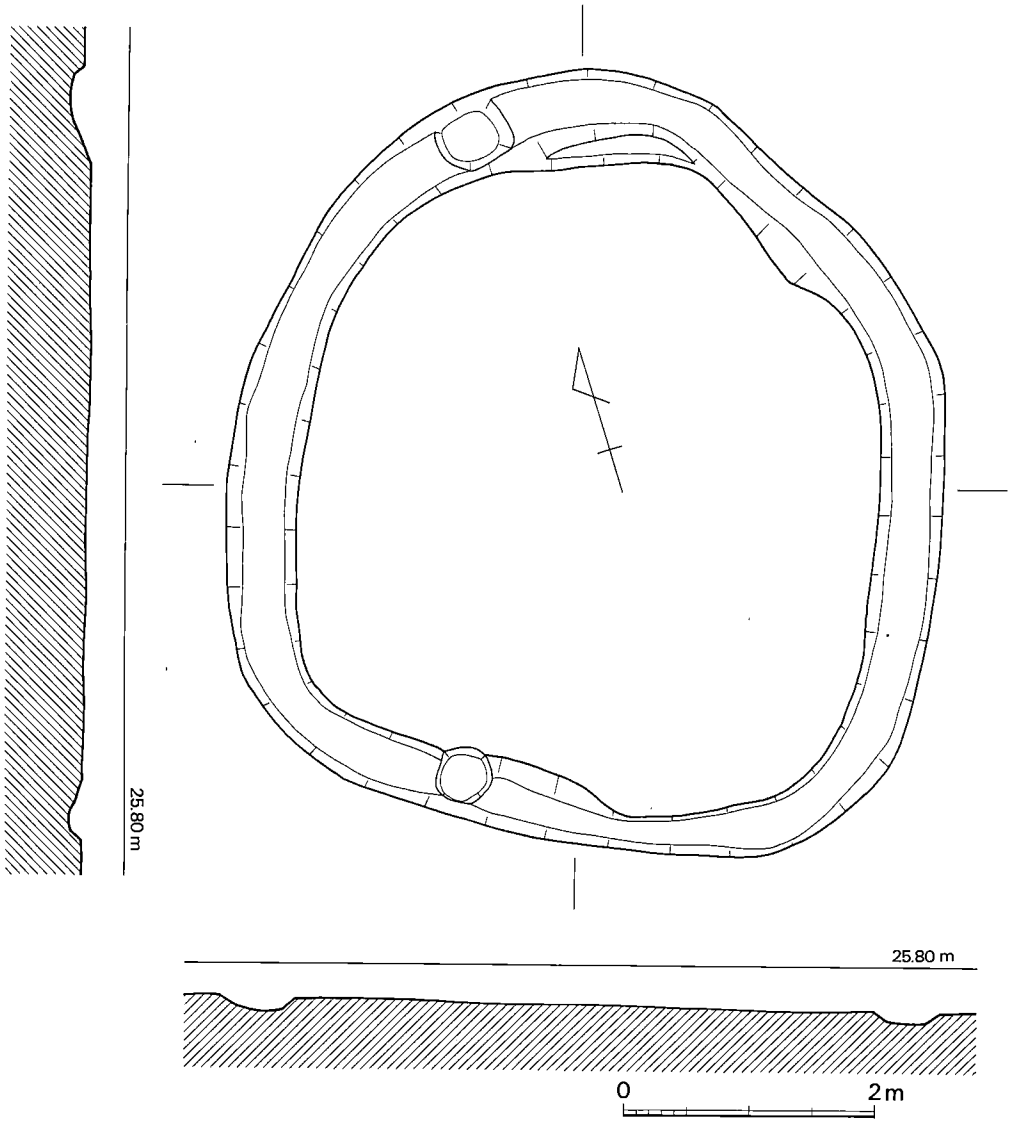


第45図　クド跡実測図（1/40）

遺構である。遺構内には3箇所に焼土の堆積が認められ，床面及び壁面の焼痕が著しいことからクド跡と断定した。竪穴の規模は長軸2.50m，短軸約1.40m，深さ15cmを測り，遺存状態は良くない。出土遺物は焼土内から焼痕の残る河原礫と甕形土器の小破片が数片認められたが，図示不可能である。甕形土器の調整は外面が細いハケ，内面は風化して不明瞭であるが，ハケが一部に残っており，周辺の遺構を考慮すれば弥生時代後期の住居跡群の共同炊事場と考えられる。

(5)　円形周溝遺構（図版11-(2)，第46図）

1号・2号住居跡の東側に隣接して位置する円形周溝状の遺構である。平面形態は不整円形を呈する。規模は長軸6.10m，短軸5.70m，幅50cm～55cm，深さ10cm～17cmを測る。溝内には2箇所に径40cm，55cm，深さ7.5cm，17.5cmのピットが掘られている。出土遺物は古墳時代前期（布留古式併行期）の甕の小破片が出土したにすぎない。

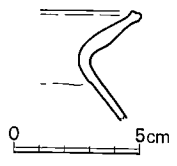


第46図 円形周溝遺構実測図（1/60）

出土遺物

土器（第47図）

(97)は甕の口縁部の小破片で，外反する口縁部は横ナデによる凹凸を有し，口唇部は磨耗しているがやや摘み上げて肥厚するものである。肩部はナデ肩であり，内面は頸部下半に箆削りを施す。外面には煤が付着する。



第47図 円形周溝遺構出土土器実測図（1/3）

(6)　溝状遺構

溝１（付図）

発掘区の東側で南北に流れる２条の旧河川敷の間に掘られた溝で，ほぼ東西に走る。僅かに弧を描き，溝２の西側で完結する。検出した全長は6.00m，溝幅は細く30cm，深さ10cmと浅い。出土遺物は皆無である。

溝２（付図）

西側の旧河川の東側沿いを平行して走る断面逆台形の溝である。予備調査時に発掘した溝で，幅70cm，深さ18cmを測る。出土遺物は皆無で，時期も明らかでない。

溝３（付図）

西側の旧河川に直結する溝で，北西方向に延びる。長さ16m程を検出した。断面は浅い「U」字状を呈し，幅は狭い箇所で2.0m，広い箇所で３20m，深さは南東側が浅く15cm，北西側が若干深く30cmを測る。このことから，溝は河川からの引水を目的に掘られた素掘りの溝の可能性があるが，水口部分に特別な設備を設けていない。遺物は溝の底部近くで弥生時代後期後半から終末頃にかけての壺及び甕の小破片を検出した。

溝４（付図）

16号住居跡の東側で検出した溝で，ほぼ南北に掘られている。発掘区のほぼ中央部で完結しており，北側に延びるに従って僅かに弧を描く。溝３との関係は発掘区外で重複するものと思われるが明らかでない。長さは35mを確認した。溝の幅は2.70m～3.20mと広いが，深さは北側で12cm，南側で20cmを測り，全体的に浅い。断面は低い逆台形を呈する。溝内の遺物は弥生時代終末～古墳時代前期にかけての壺・甕の小破片が出土している。

溝５（付図）

弥生時代後期の16号住居跡に切られた状態で検出した細い溝で，16号住居跡の南側で確認できないことから，住居範囲内で完結したものである。北側も発掘地区内で完結している。溝幅は55cm，深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

溝６（付図）

１号土壙の西側で完結する東西に延びる細い溝で，西側は削平を受けている。溝の幅は約40cm，深さは６cmと非常に浅い。溝内からは古墳時代前期（布留古式併行期）の甕の小破片が若干出土した。

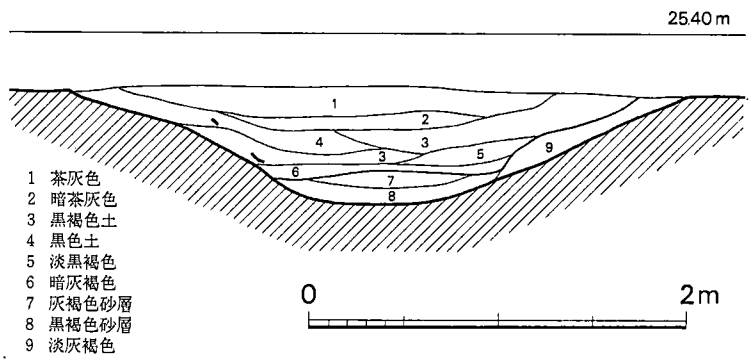
溝７（付図）

弥生時代後期ならびに古墳時代前期の住居跡と溝に切られた断面形が「Ｖ」字状を呈する溝で，ほぼ東西に延び溝４の西側で完結する。溝内の覆土は他の遺構とは全く異っており，上層

には暗黄褐色の粘質土の堆積がみられ，以下の層には数層の砂質と粘質土層が交互に堆積することから，水流の痕跡が窺える。溝の幅は東側が狭く2.30m，西側が3.00mで，深さは東側が50cm，西側が70cmとやや深い。溝内からの出土遺物は皆無で時期の判別は明らかでないが，浅少なくとも弥生時代後期以前の溝であることは確かである。

溝８（図版13～16-(1)，第48図）

発掘区の南西隅を南北に延びる溝で，掘削断面が浅い「U」字状を呈する。北側の溝７と接する微高地（自然堤防）と低地の境界付近で溝は消滅する。検出した溝の全長は41mで，溝は南側で広く掘削され3.00m前後，北側では狭くなり1.50m前後である。当該溝は弥生時代後期に掘削されており，古墳時代前期頃まで機能していた。それ以降には完全に埋没しており，弥生期の深さは南側で約60cm，北側で約45cm，古墳期の深さは南側で40cm，北側で20cm前後を測る。溝の断面観察での埋没状態は自然堆積を示し，７層と８層で弥生時代後期の土器が出土するが，いずれも破片が多く流れ込みであろう。両層とも砂層で水の流れた痕跡を留める。６層は無遺物層で古墳時代の底面である。古墳時代前期（布留古式併行期）の遺物は主に２層から５層の黒色土系の土層中に集中し，特に３層・４層に著しく集積している。層の厚さは25cm程で，各器種が渾然一体となって出土した。このことは短時間の間で作為的に投棄された土器群であることが判る。古墳時代の底面上では水流の痕跡はない。



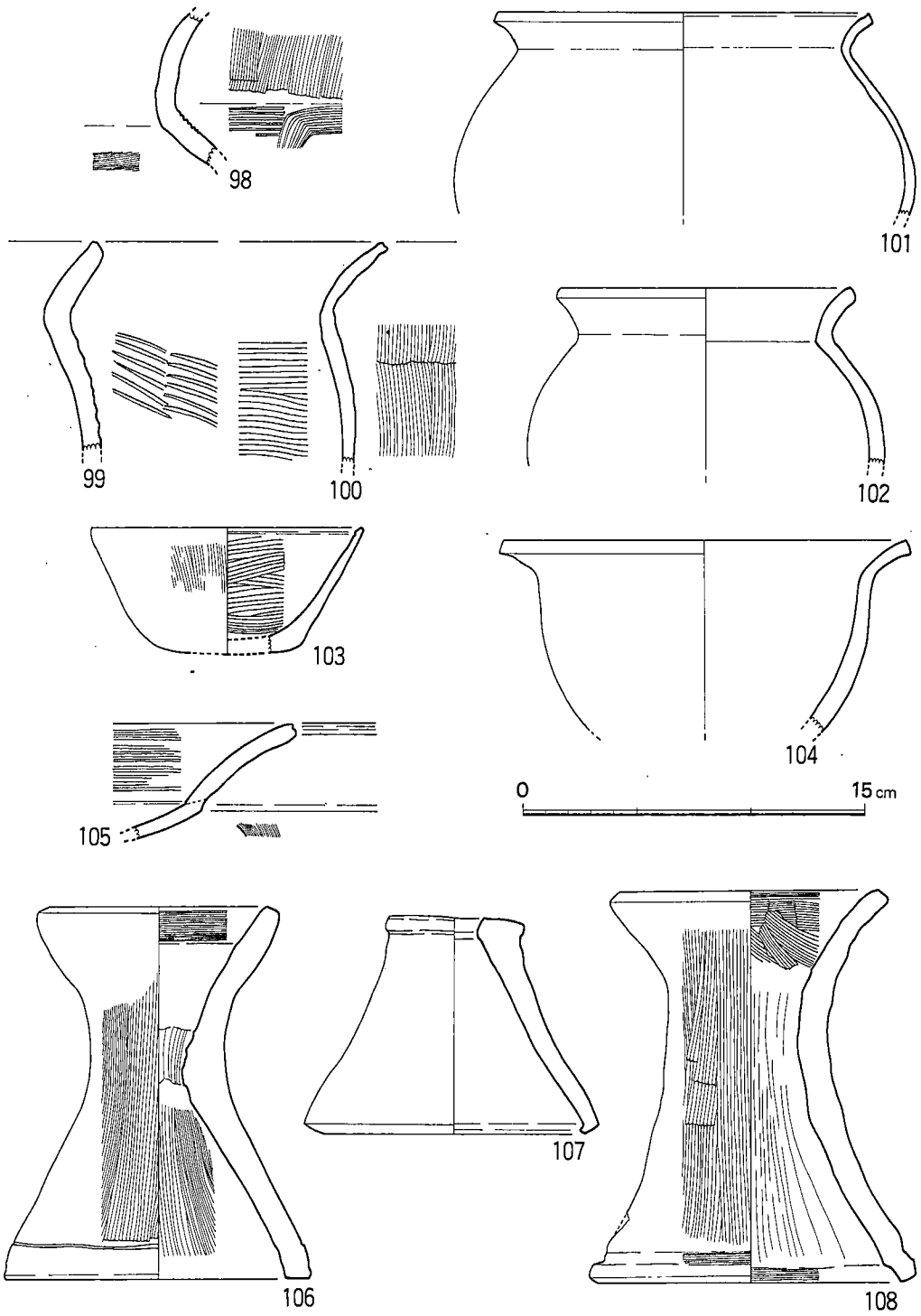
第48図　溝８土層断面実測図（1/40）

溝内の出土遺物を観ると，弥生時代の器種は壷・甕・鉢・高坏等があり，古墳時代の土器の器種は壷・脚台付短頸壷・小型丸底土器・甕・鉢・浅鉢・坏・脚台付坏・高坏・器台・手捏土器の他，土製玉杓子・土製勾玉・土製紡錘車・鉄斧等がある。さらに注目に値することは脚付・把手付壷である陶質土器が出土しており，豊富な遺物がある。

出土遺物

最下層出土土器（図版22・23，第49図）

(98)は壷の破片で，頸部は上方に外反し，口縁部はさらに外反する。頸部下には６条の鋭い沈線を施し，装飾文をなす。調整は外面ハケ，内面は横ナデと細いハケ仕上げである。胎土には金雲母粒子を多く含む。この様な沈線の装飾を持つ壷は，当該地方になく，将来されたもので



第49図　溝8最下層出土土器実測図（1/3）

あろう。

甕には(99)～(102)がある。(99)は非常に荒い叩キが外面にみられ，口縁部は「く」字状にやや鈍く外反する。器壁は厚くつくられている。(100)は「く」字状に外反する口縁部の端部は浅い凹線を廻らし肥厚する。肩部の張りは鈍い。外面は荒い叩キののちハケ仕上げ，内面は布か皮状の道具による横ナデと荒いハケ調整である。(101)・(102)は同タイプの甕で，胴部の張りが著しい。前者の外面は磨キ仕上げで，後者は器壁が厚い。

(103)の鉢は坏タイプのもので，底部から上半は直に外反する。口唇部の内側には浅い沈線を一周させる。内外面ともハケ調整で，外面には二次加熱を受ける。底部は欠失しているが，平底であろう。(104)は強く外反する口縁部を持ち，端部は肥厚する。外面は風化し磨耗している。

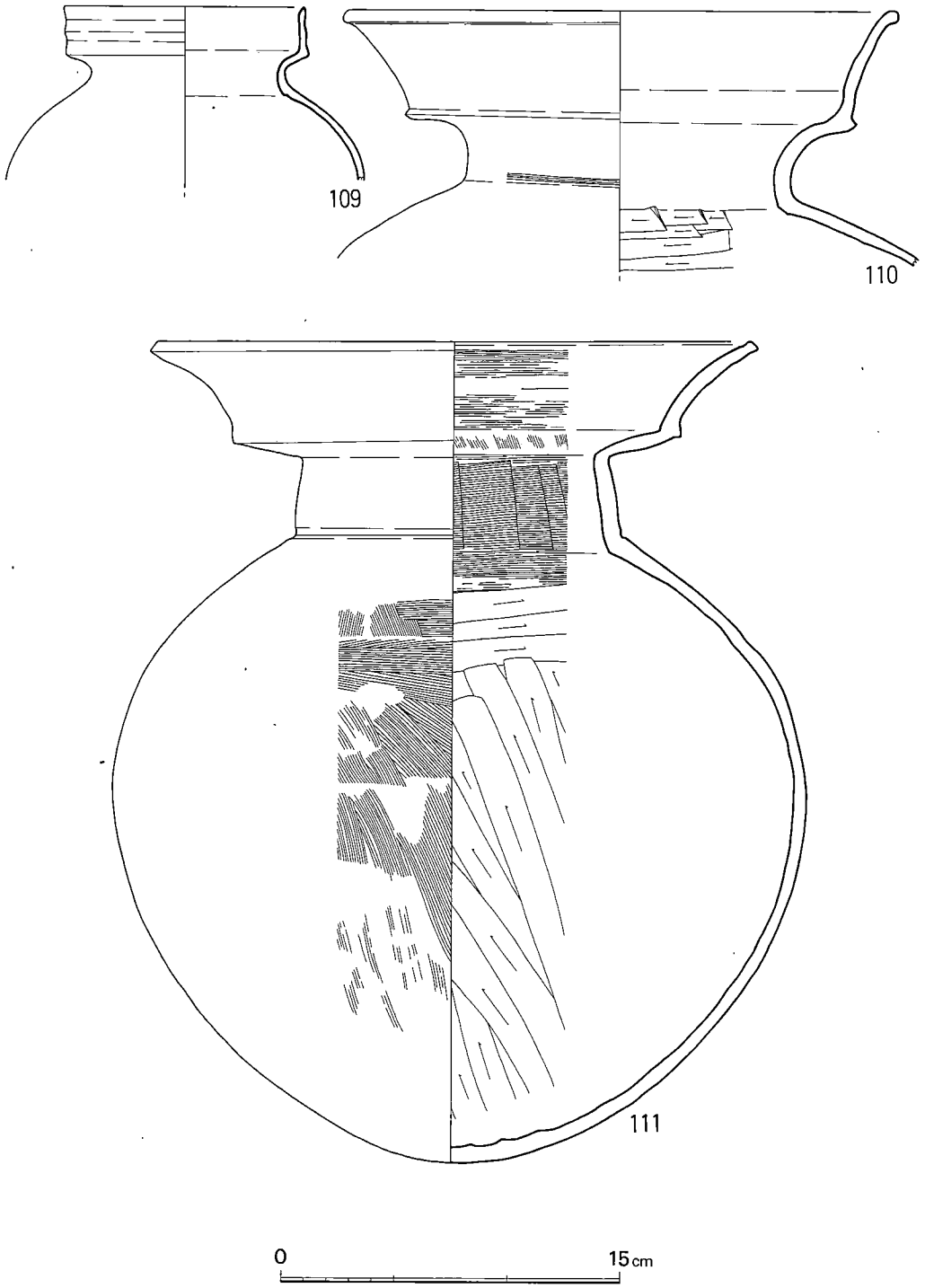
(105)の高坏は坏部の屈折部が明瞭で，大きく外反する口縁部を持つ。口唇部は凹線を廻らす。胎土・焼成とも非常に良好。内面には横ハケが顕著に残る。

器台には(106)～(108)がある。(106)・(108)は最小径が上半部にあり，前者には裾部に浅い沈線を廻らし，後者には幅6㎜程の小口板状の道具による横ナデを施しており，凹線が一周する。調整は前者の外面は荒いハケ，口縁部内外面は布乃至皮状のものによる横ナデ，内面下部は非常に荒いハケ状のカキ取りで，中央部には絞り痕が残る。後者は器台としては丁寧なつくりで，外面ハケ，内面上部には荒いハケ，下部には荒いハケののちナデ仕上げを施す。裾部には二次焼成痕を残す。

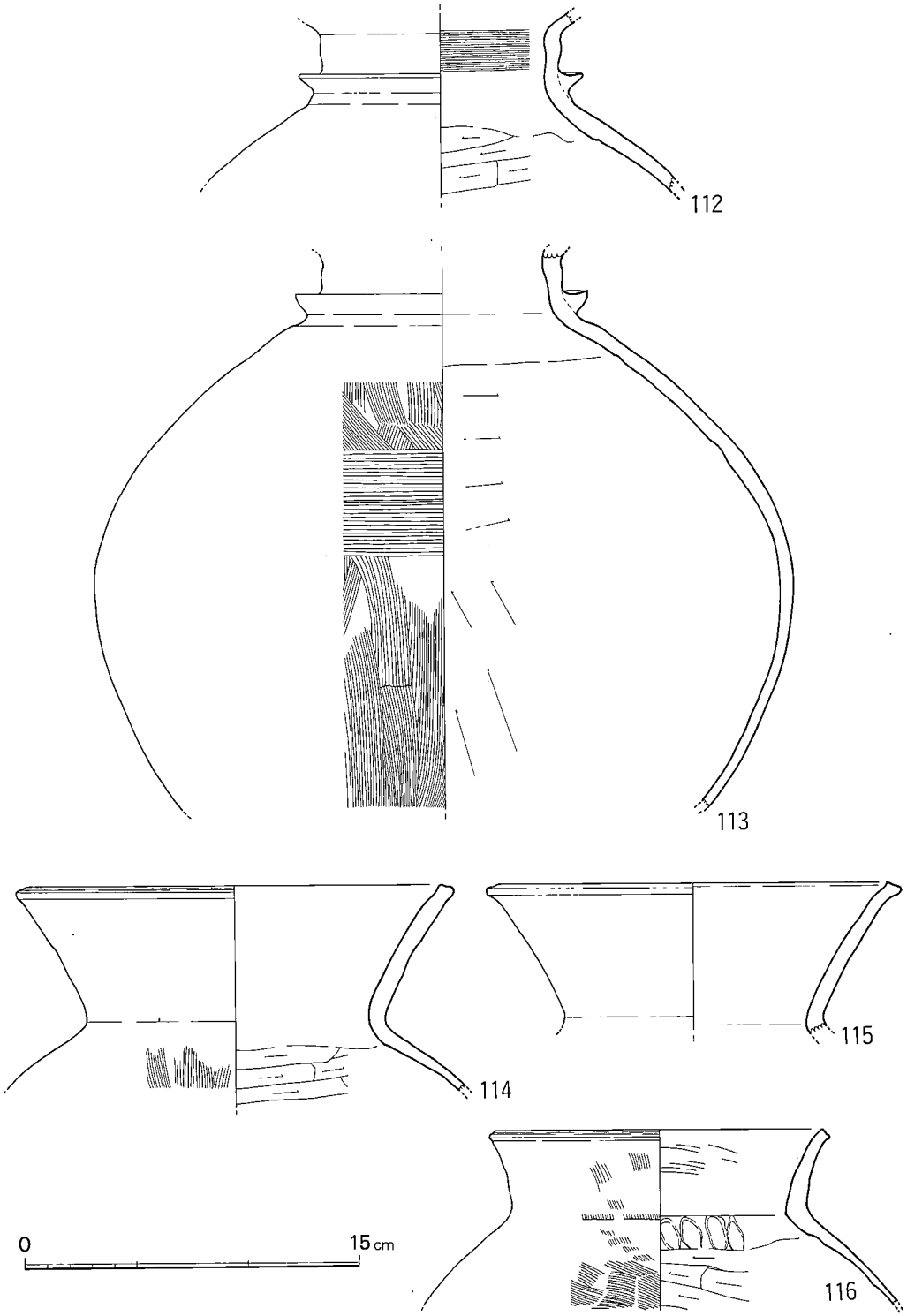
(107)は支脚状のもので，上部平坦面に径2㎝の孔を穿つ。裾部は内側に肥厚する。外面には荒い叩キをナデ消す。内面は篦削りをナデ消している。

上層出土土器（図版23～32，第50～68図）

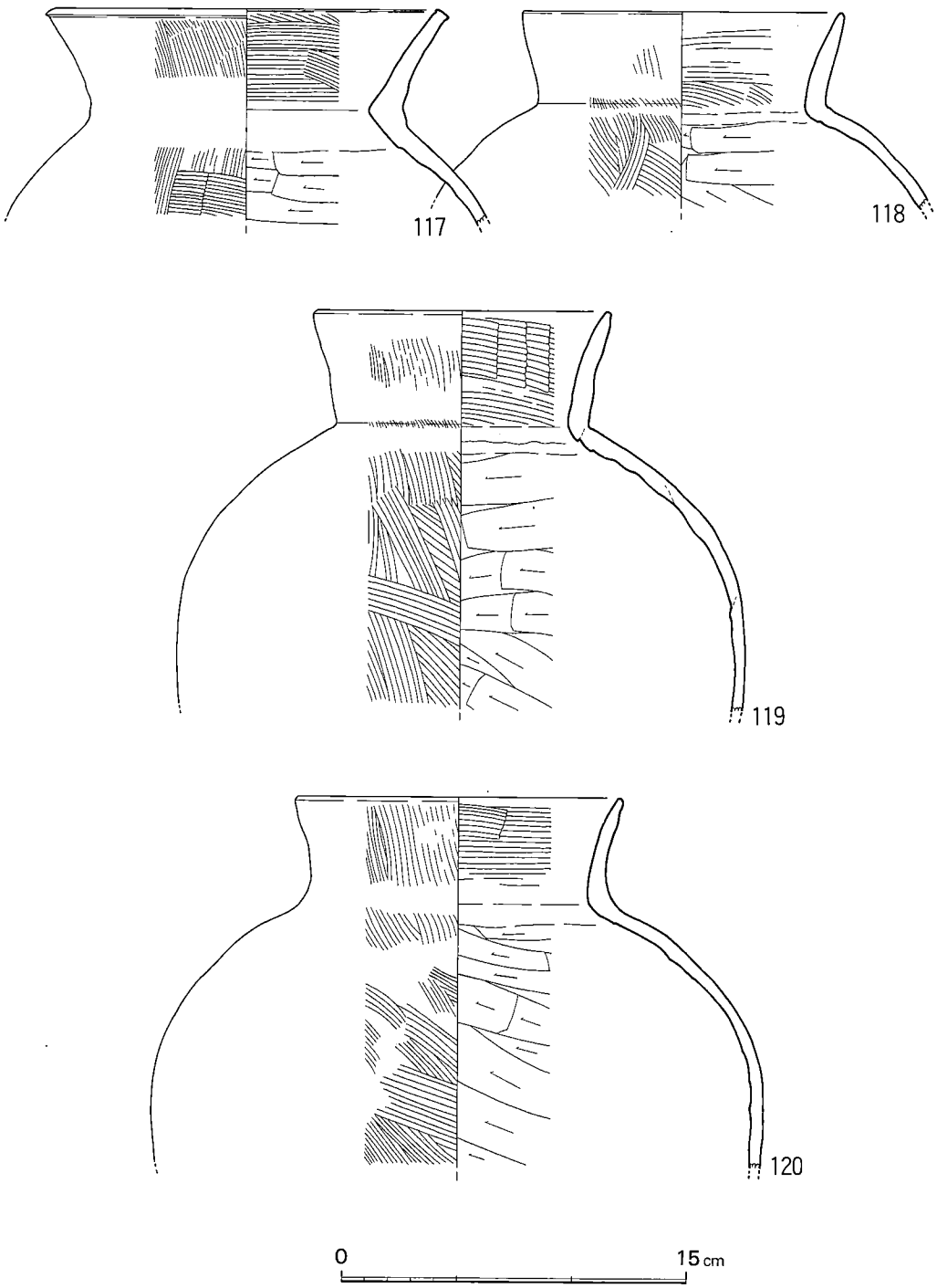
壷には(109)～(123)がある。(109)～(111)は複合口縁を有す壷で，(112)・(113)も同様の口縁を持つと思われる。(109)は大きく外反する擬口縁に直上する口縁部をなし，外面には横ナデによる広い凹線を施す。胴部は鋭く張り，球形状の胴部を持つと思われる。器壁は薄くつくりの非常に良質な土器であるが，風化著しく調整は不明である。(110)は大きく開く擬口縁に外反する口縁部を有し，口唇部はさらに外反する。肩部の張りは強く，器体内外面は横ナデ，肩部内面は右廻りの篦削り仕上げである。胎土・焼成とも大変良好な壷である。(111)は非常に精製された胎土を有し，均整のとれた壷の完形品である。「く」字状に鋭く外反する擬口縁に反り気味に外反する口縁を持つ。頸部は長く，内傾する。胴部は球形を呈し，底部は尖り気味に終る。外面の口縁部から肩部にかけては丁寧な横篦磨キで，胴部は細いハケののち磨キ仕上げである。口縁部内面は布乃至皮状のものによる横ナデを施し，その後に磨キをかける。頸部は非常に細い横ハケ，胴部には丁寧な篦削りを施し器壁を薄く仕上げている。底部内面には指頭圧痕状の凹凸が認められる。胎土には赤色粒子を僅かに含み，全体が淡赤褐色を呈す。口縁部内面には煤が付着する。(112)・(113)は同タイプの壷で，細身の頸部は横ナデ手法によ



第50図　溝８上層出土土器実測図（1/3）



第51図 溝8上層出土土器実測図（1/3）



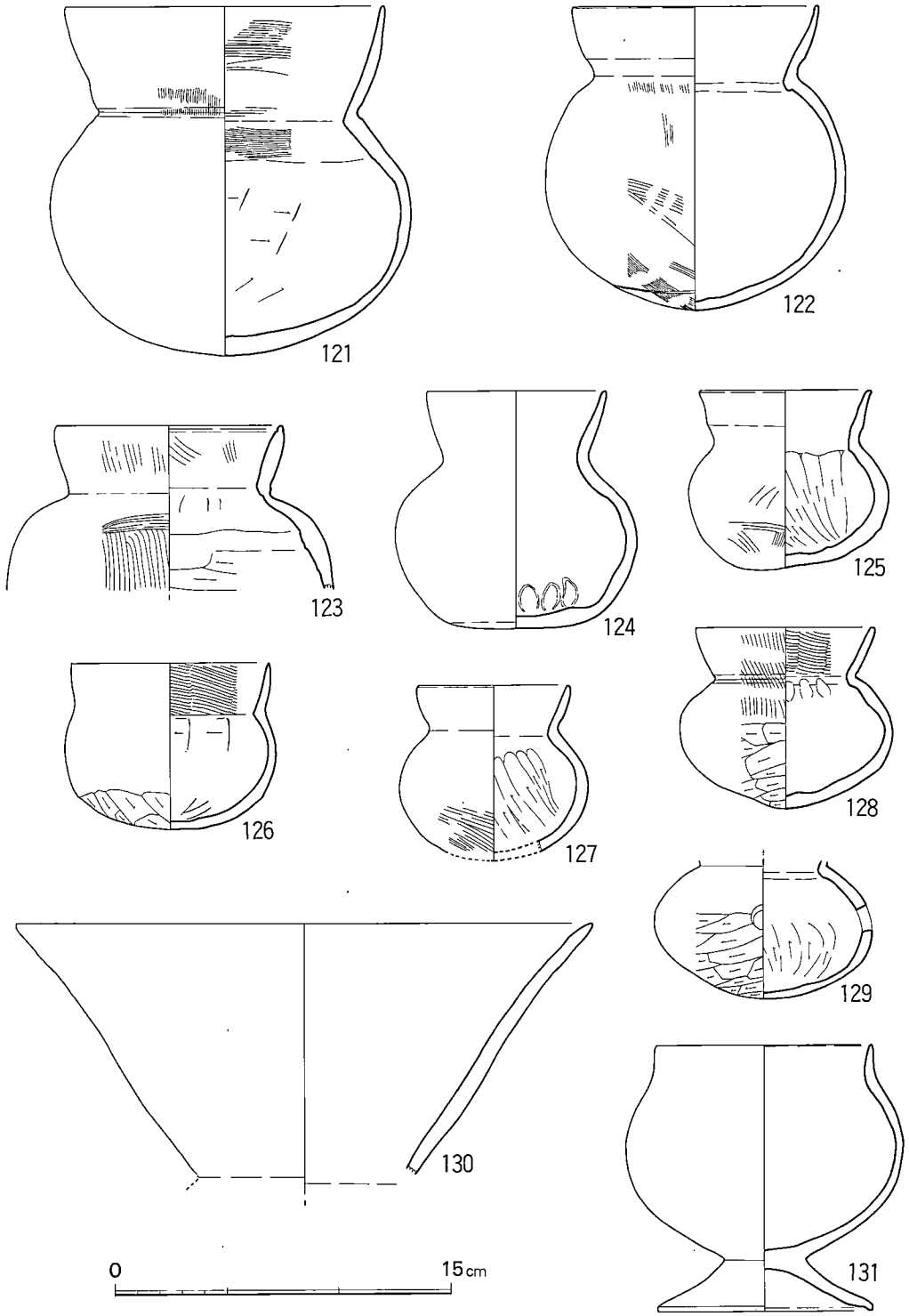
第52図 溝8上層出土土器実測図（1/3）

り波打ち鋭く外反すると推測される口縁部につづく。口縁は欠失しているものの複合口縁をなすであろう。頸部下には断面が反り気味の貼付け三角凸帯を付し，肩部はナデ肩で胴部の張りは著しい。肩部までは横ナデで，以下は細いハケで仕上げ，胴部上半には装飾性の強い横ハケを施す。内面は左廻りの丁寧な篦削りである。(114)・(115) は同形態の壷で，頸部から「く」字状に強く外反する口縁部は反り気味である。口唇部は肥厚させ，(114) は平坦部に浅い凹線を施す。胴部は倒卵形を呈すると思われる。(116) は口縁部が短かく，(117) と同様頸部内面には明瞭な屈曲が認められる。調整は (114)・(115) の口縁部で横ナデ，(116)・(117) はハケが残り，調整手法に差違がある。(114)の内面は右廻りの篦削りで，(116)・(117) は左廻りの篦削りである。(118)～(120) は同形のもので，肩の張った球形の胴部に鋭く直に外反する口縁部を有す。内外面には荒いハケが多く残り，頸部のやや下部から左廻りの篦削りを施す。全体的に厚手づくりである。

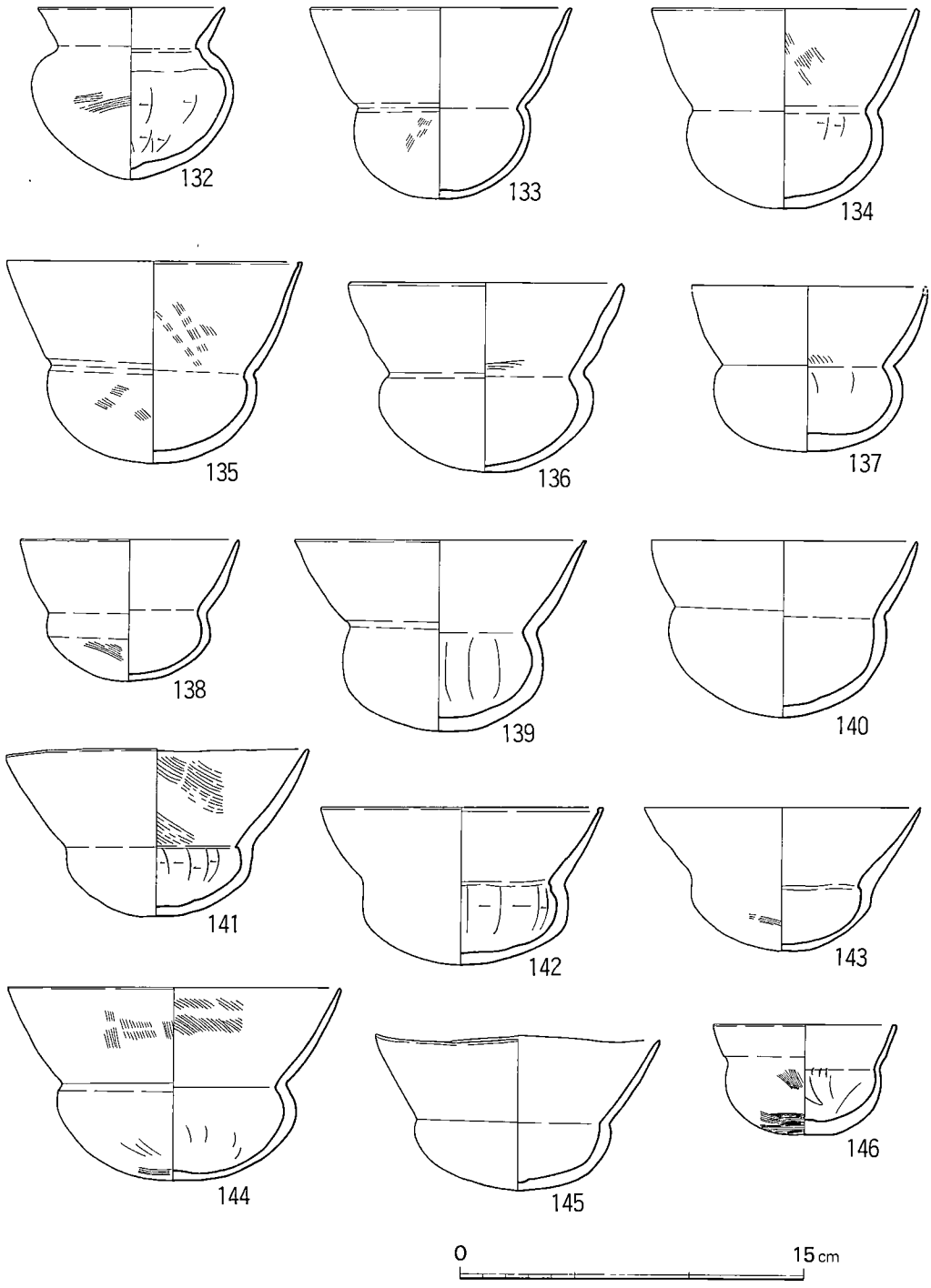
(121)～(123) は小型の壷で，「く」字状に外反する長目の口縁部が内弯気味に終る(121)・(122) と短かく直に外反し尖って終る (123) とがある。前者は球形の胴部に丁寧な磨キがかけられ，細いハケが僅かに残る。後者は非常に荒いハケが残り肩部が張る。(121) は右廻りの篦削り，(123) は左廻りの篦削り仕上げで，器壁は厚く粗雑さが目立つ。

(124)～(129)，(132)～(150)は小型丸底土器である。(130) は丸底土器の大型品と目されるが，壷の可能性も考えられる。(131) は脚台付短頸壷である。小型丸底土器には器の最大径が胴部にある (124)～(129)・(132) と口縁部にある (130)・(133)～(150) とがある。(124) は平底気味で，(126) の短い口縁部は鈍く外反する。(128) は玉葱状の胴部を持ち外面を篦削りで仕上げ，(129) は土師質の甕で外面には丁寧な篦削りを施す。(130) は縦方向の暗文状の篦磨キが認められるが，風化して不明瞭である。つくりは非常に良好。(131) は低い脚台を付せた均整のとれた薄手づくりの短頸壷で，胎土は非常に緻密である。(132) の底部は尖り気味で最大径を胴部上半に持つ。最大径が口縁部にある小型丸底には粗製品はなく，(133)・(134)・(149)・(150)を除けば全てが扁平な胴部を有す。器壁外面は殆んどが横篦磨キで，内面には横篦磨キと横ナデとがある。内には篦削りの痕跡を残すものもある。(146) は短い口縁部に平底を呈する。(149) は「く」字状に上方に外反する口縁部をなし内弯する。(150) は口縁部に変化を持たせ一見複合口縁状につくりあげる。内面の篦削り痕はナデ消していない。

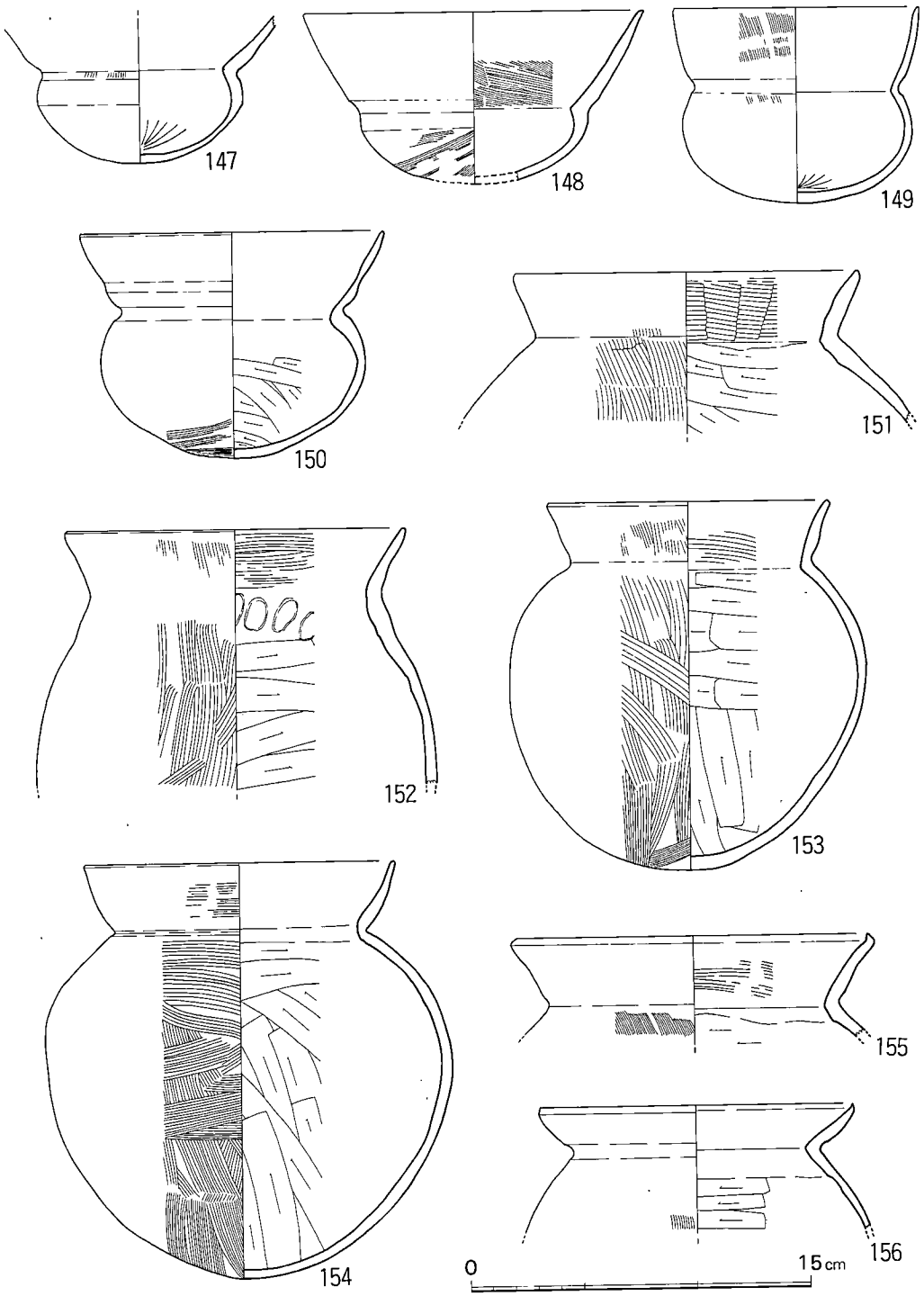
甕には (151)～(183) がある。(151) は「く」字状に短く外反し，頸部内面には明瞭な稜線を有す。調整は荒いハケで，左廻りの篦削りを施す。(152) は鈍く外反する口縁部に張りの少ない胴部を持つ甕で器面はハケを用いる。内面の指頭圧痕下に篦削り仕上げを施すことは布留併行期の技法を基調とする。(153)・(154)は同様の胴部をなし，前者の口縁部は反り気味に外反し，後者は内弯傾向を呈する。最大径は胴部上半にある。両者とも口縁部はハケののち横ナデ，外面はハケ，内面は左廻りの丁寧な篦削りを施す。(153)は頸部屈折部から篦削りがみられる。



第53図　溝8上層出土土器実測図（1/3）

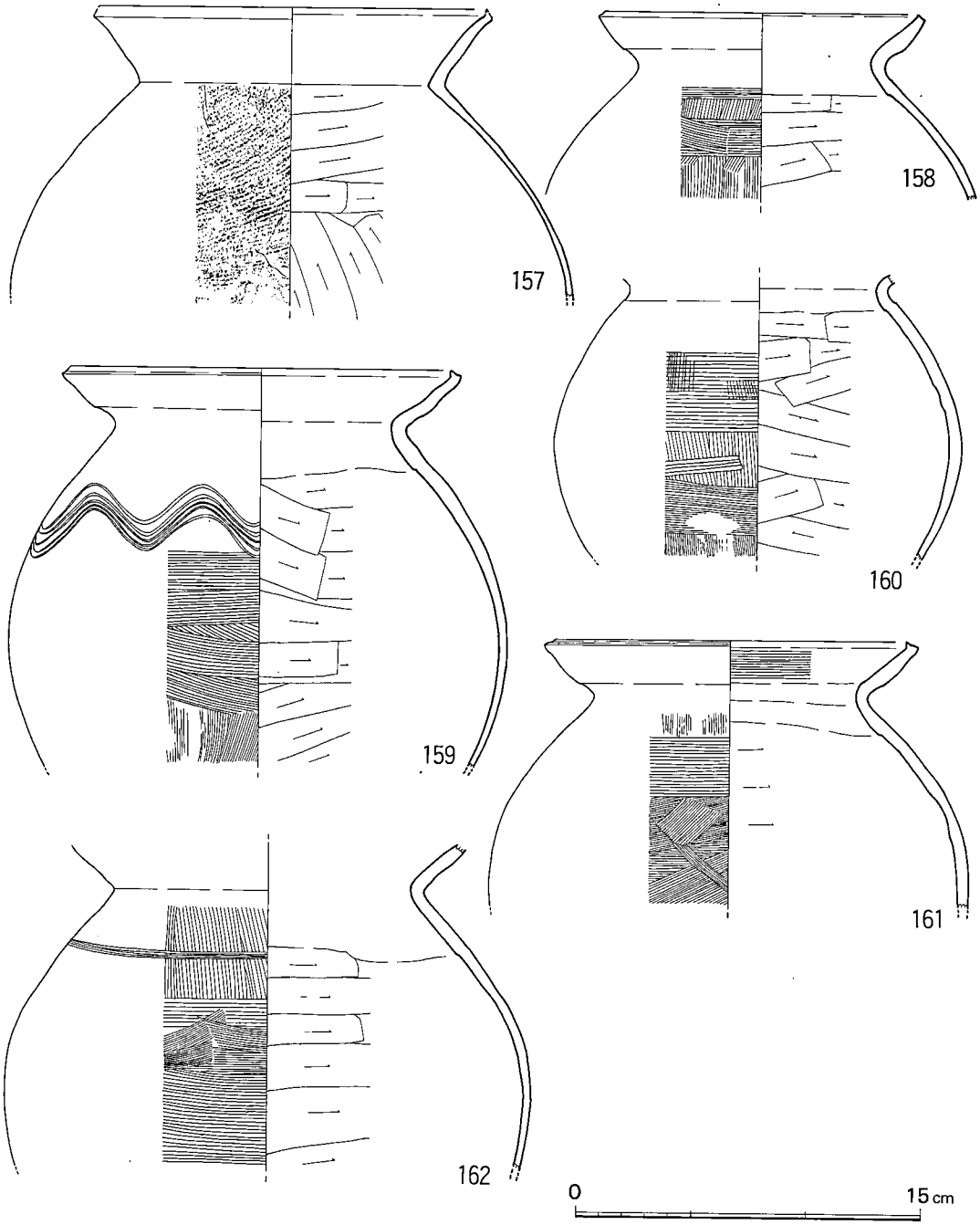


第54図　溝８上層出土土器実測図（1/3）



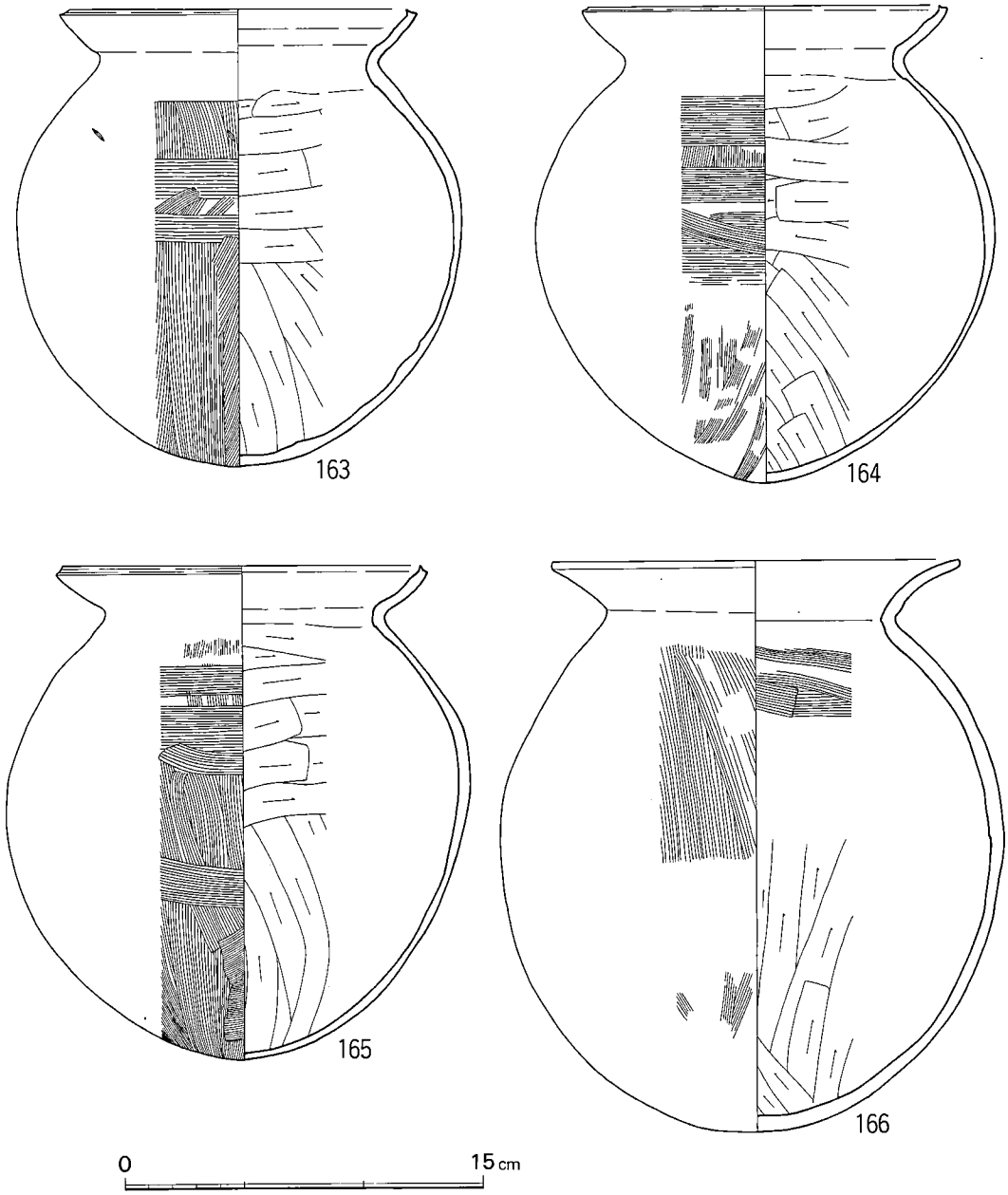
第55図　溝８上層出土土器実測図（1/3）

(154) は外面に煤の付着が顕著である。(155)・(156) は口唇部を摘み上げ細く尖る。前者は反り気味，後者は内弯状の口縁を有し，非常に精製された土器である。(157) は口唇部が摩耗



第56図　溝8上層出土土器実測図 (1/3)

しているが同様に摘み上げたもので，「く」字状に鋭く外反する口縁部つ。頸部の屈曲は明瞭でその直下から篦削りを施し器壁を非常に薄く仕上げている。器体には左下りの庄内風の叩キ



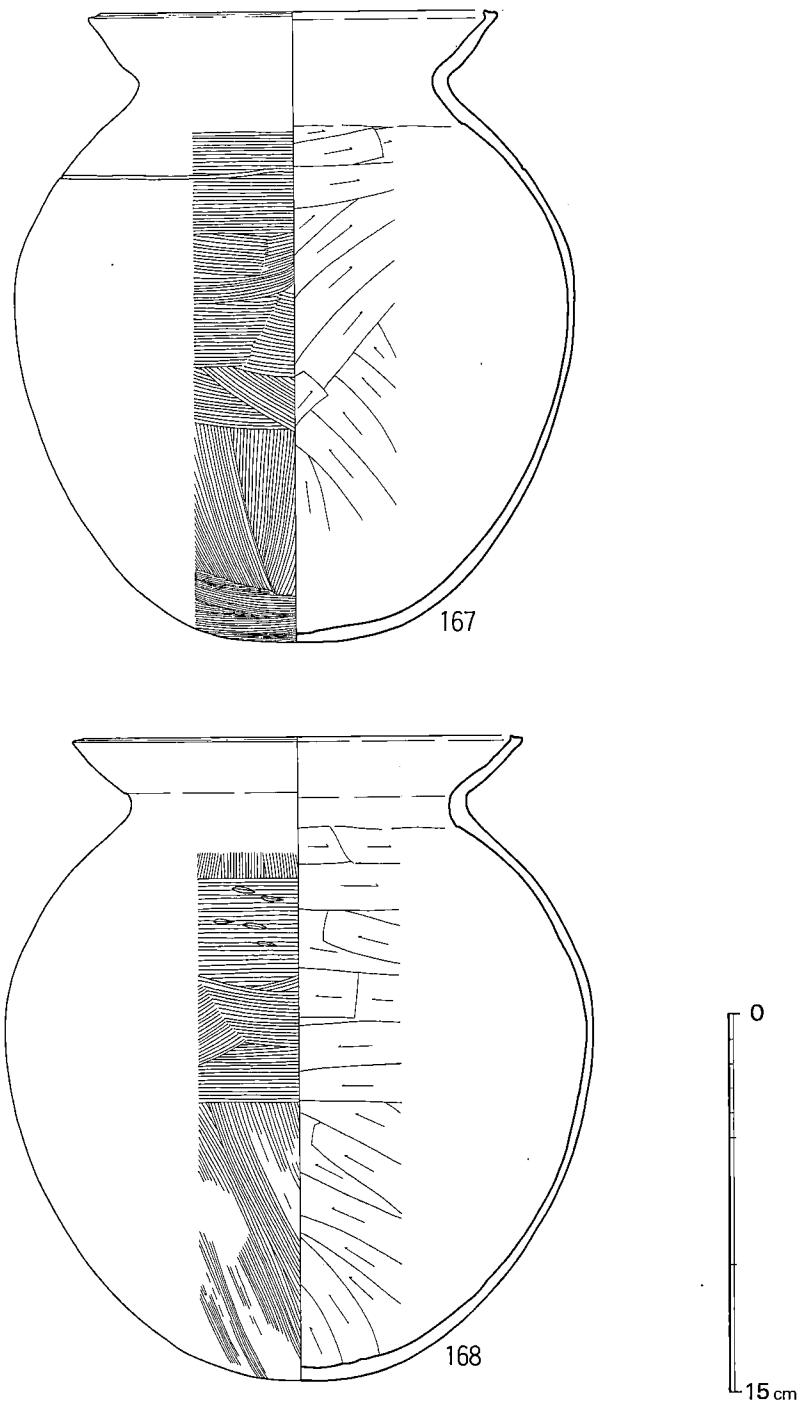
第57図　溝８上層出土土器実測図（1/3）

に酷似した叩キを持つ。(158)～(165)はやや小振りで口縁部を僅かに内弯させ，口唇部を内側に摘み上げ肥厚させる。最大径は胴部上半乃至中央部にあり，底部は若干尖り気味である。調整は細い横ハケと縦ハケを基調とする。(159) には波状文を一周させ，(162) は装飾的な細い横ハケを施す。(163)は篦による刺突文がある。内面篦削りは頗る丁寧で左廻りと右廻りとがある。(166) のタイプの甕は１点出土しているのみである。頸部の稜線は明瞭で，「く」字状に鋭く外反する口縁部は長く反り気味である。最大径は胴中央部下にあり，下半は丸味を持つ。内面頸部下には細い横ハケを施し，下部は篦削り手法がみられる。器外面には二次焼成と煤の付着が著しい。(167)～(170)はやや大振りの甕で (167)・(168) は前者の甕形土器と同タイプをなすが，底部が丸味を呈し新しい傾向を有す。(167) の肩部には１条の沈線を廻らし，上半部には煤の付着が著しい。(168) には１箇所のみ５個一組の刺突文を施している。(169) の口縁部には内弯傾向は認められない。最大径は胴上半部にあり，溝９出土の甕に同タイプがある。(170) は肩の張るものである。(171) は大型の甕形土器で１点のみ出土している。「く」字状に外反する口縁部は波打ちながら外反し，口唇部は平坦をなす。胴部は鋭く張り球形を呈するが，底部は尖り気味である。口縁部は横ナデ，肩部は丁寧な篦削りをし，中央部までやや荒い横ハケ，下半には磨キをかけ光沢がある。内面は右廻りの篦削りが主体で，中央部にはハケを残す。肩部内面に粘土紐の巻き上げ痕を若干残す。

(172)～(183) は小型の甕で，(172)は磨キが調整の主体を占め丁寧なつくりの土器である。(173) は厚手づくりで (178) と同一タイプのものである。(175) の内面は横ハケが顕著に認められる。(176) は (179)・(180) と同様に扁平な球形の胴部を有す。(177) の底部は尖る。(180) は丁寧な磨キがかけられ，良質の甕である。(181)～(183) は篦磨キとナデを併用し非常に良好なつくりを呈す。(182) は溝９で出土した大型の丸底土器と同形式の可能性がある。(183) の底部の穿孔は丁寧である。

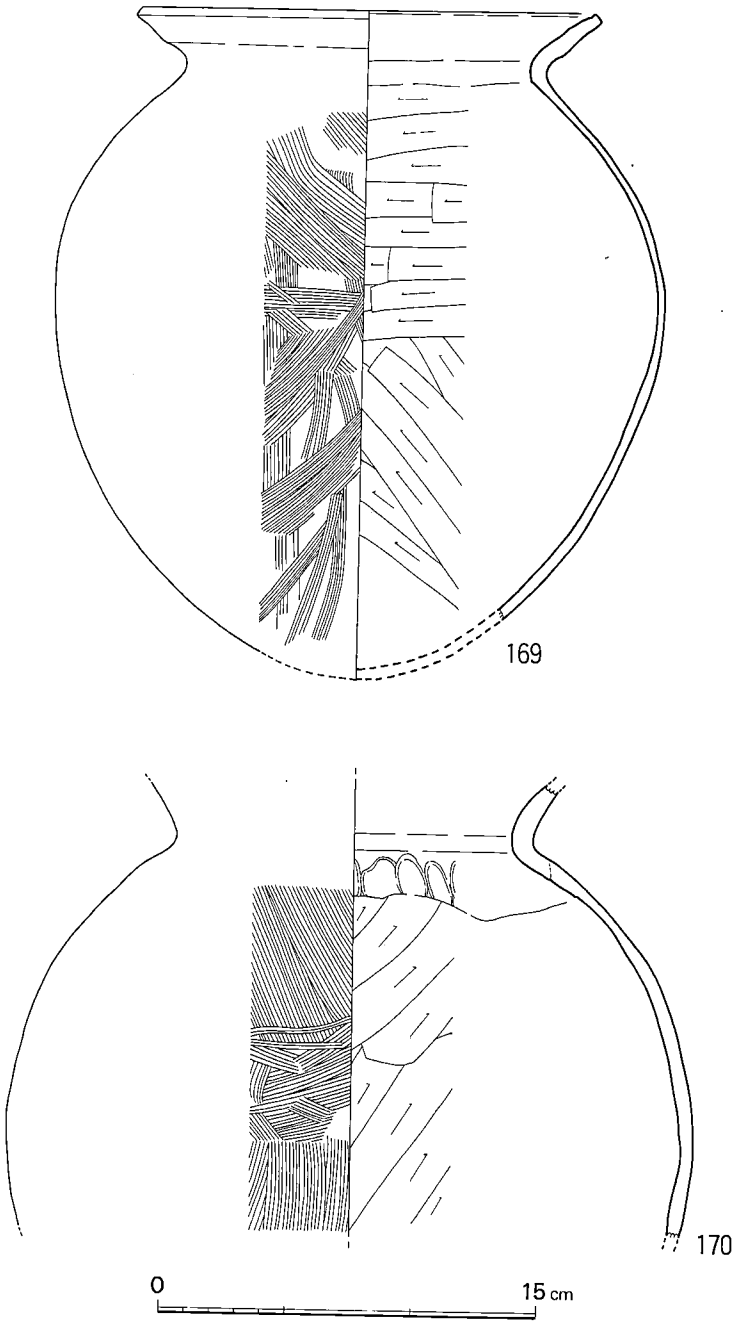
鉢には (184)・(185) とがある。(184) は「く」字状に外反する口縁部は僅かに内弯する。胴部はやや張り下半部の器壁は厚く底部はレンズ状の平底を呈する。外面には荒いハケが残り口縁部内面には荒い横ハケの上から３個の刺突文を施す。胴部は左廻りの篦削り仕上げである。外面底部近くには籾痕を残す。底部は製作時に砂上に置いたと思われ，極小の凹凸が著しい。(185) は複合口縁部を呈し，擬口縁に貼付け三角凸帯を付せる。肩部は若干張り，底部はレンズ状を呈する。器壁全体に風化が著しく調整が不明瞭であるが，ハケが主体を占める。胎土は赤色粒子が多く緻密で，焼成は堅固である。

浅鉢には (186)～(199) がある。(186)～(188) は器高が低く口縁部が鋭く外反する。(189)～(196) は「く」字状にやや上方に外反する口縁部を有し，器体が深くつくられている。(191) は底部に焼成前の穿孔があり，外面下半は篦削りを施す。(192)・(194) は口縁部が内弯気味で，(190)・(196) は器壁が厚い。(197) は器壁が厚く，鈍く外反する口縁部は短い。

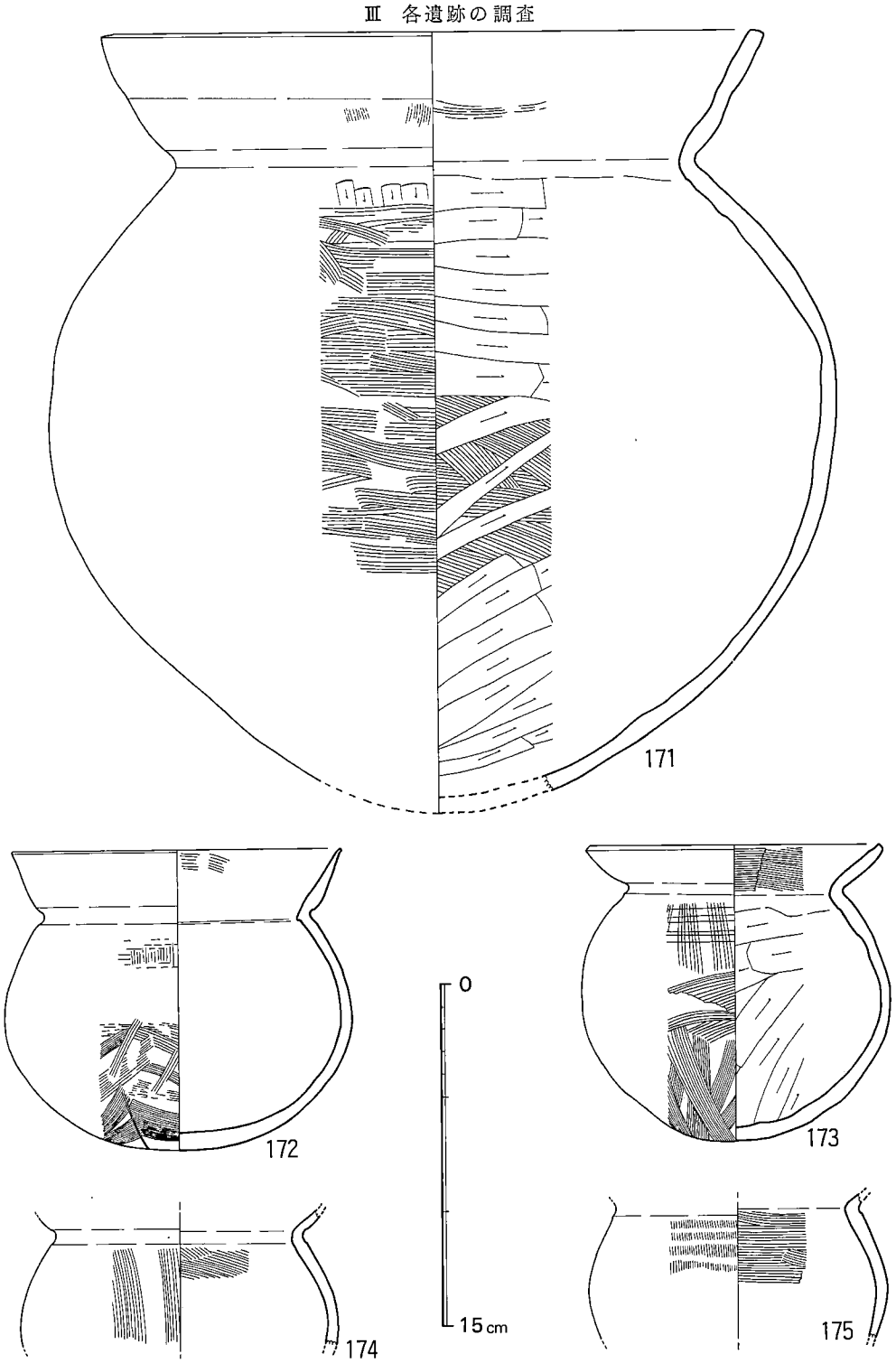


第58図　溝８上層出土土器実測図（1/3）

(198) の口縁部は長く，内弯気味に上方に外反する。胴部の張りは強い。口縁部外面には赤色の化粧土を塗布する。(199) は扁平の球形の胴部に鈍く外反する口縁部を持ち，口縁部は肥厚

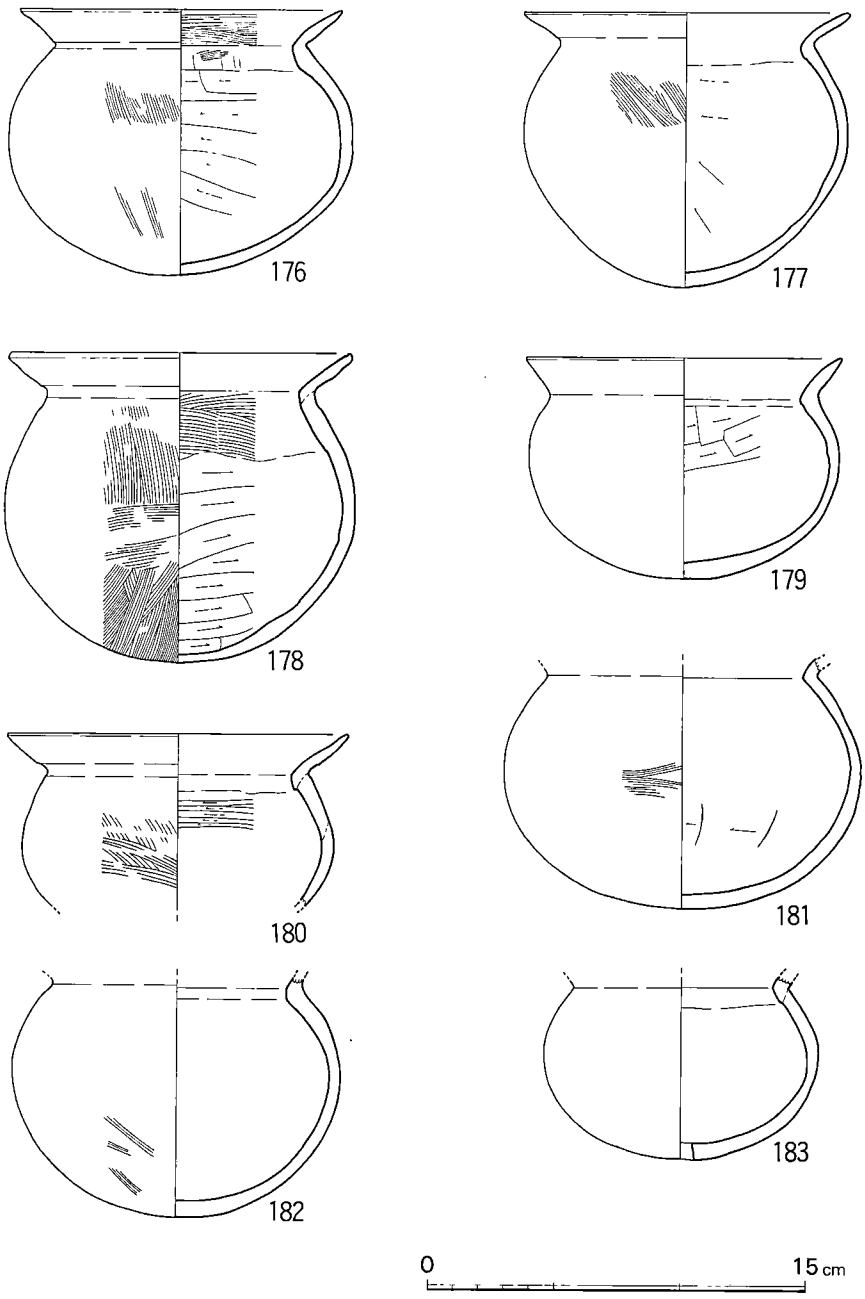


第59図　溝 8 上層出土土器実測図 (1/3)



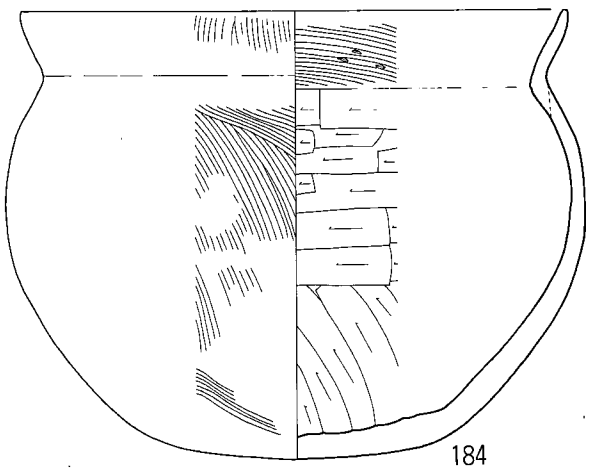
第60図 溝8上層出土土器実測図 (1/3)

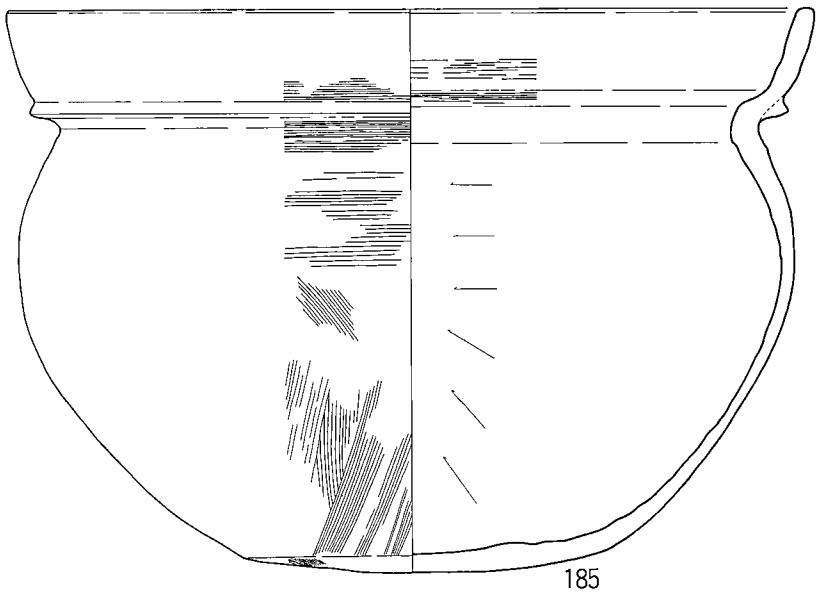
する。(197)・(199)は古式傾向を呈するが，他は調整に丁寧な篦磨キをかけ画一的な浅鉢である。

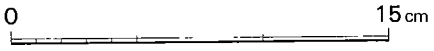


第61図　溝8上層出土土器実測図（1/3）

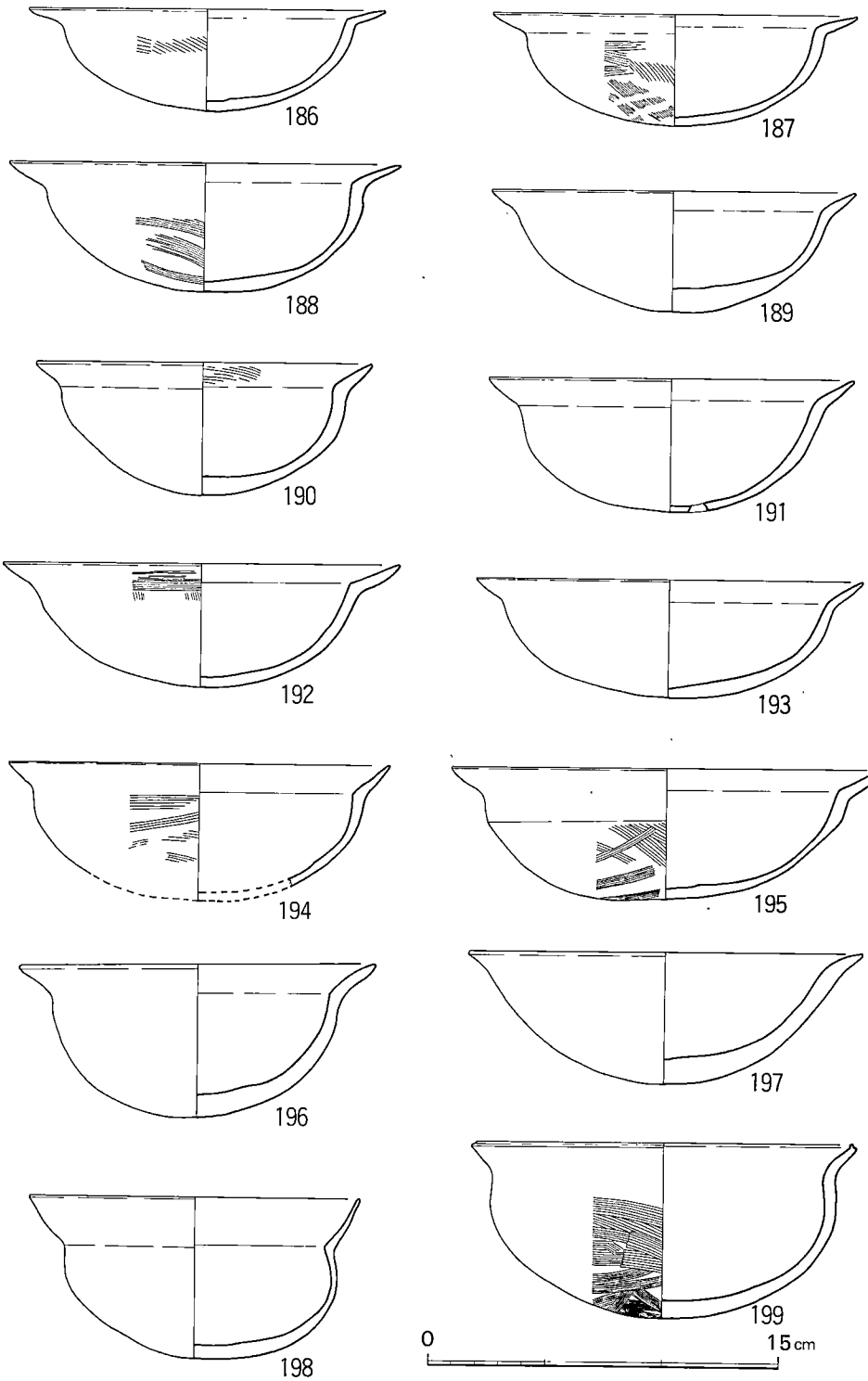
坏には（200)～((217）がある。その内，（214）は鉢の系譜を引くもので，（216）は脚台付坏である。(200)～(203）は口径の小さな坏で，（200）は指頭圧痕が，（202）は内面に暗文状







第62図　溝８上層出土土器実測図（1/3)



第63図　溝８上層出土土器実測図（1/3）

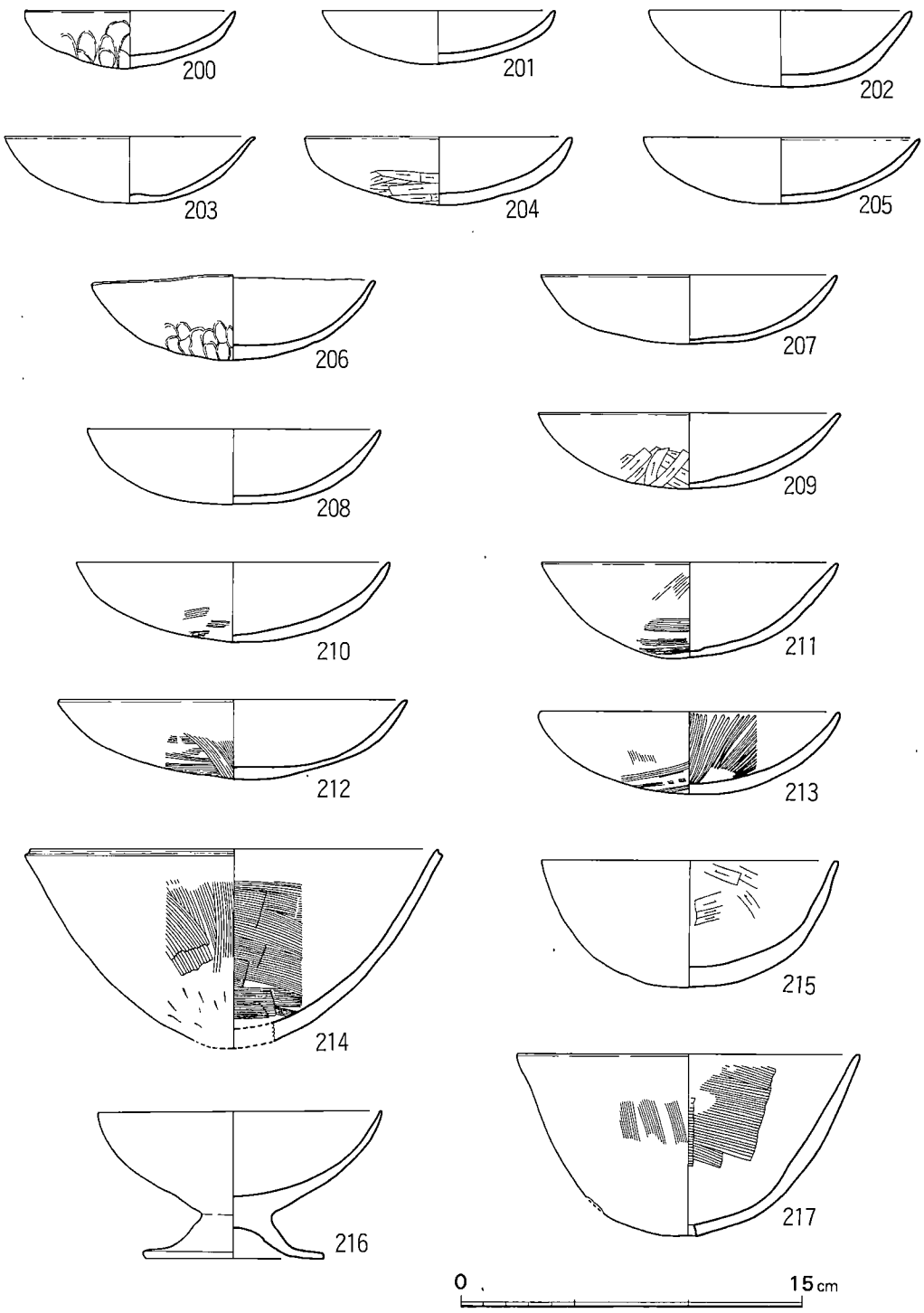
の篦磨キが認められる。(204) は器壁が僅かに厚く，底部には篦削りを施す。(205) は口唇部が尖る。(209) には一定方向の篦削りを施し，後に磨キをかけている。(212) は器高の割には口径が大きく良質の土器である。(213) は内面に暗文状の篦磨キを施す。(214) は底部を欠失しているが，尖るものであろう。胴部から口縁部にかけての内弯傾向は鈍く，口唇部には浅い沈線を廻らす。内外面とも細いハケ仕上げであるが，外面底部付近は篦削りが残り弥生的技法が継承される。(215) は口径に対して器高が高く器壁が厚い。(216) は裾部の大きく開く低い脚を持ち，全面に赤色の化粧土を塗布する非常に良質の土器である。(217) は甑で尖り気味の底部を持つ。器面全体の風化が著しい。

高坏には (218)～(241) がある。(218) は完形品で坏部の屈折は一応の段差を付けそのまま直に外反する口縁部を有す。脚部はスマートであるが，裾部の開きは緩く短い。(220)・(222) も同様の坏部を持つ。(219) の坏部の屈曲はやや鋭く，(221) 同様厚手づくりである。(223) は坏部に若干丸味を持ち，(224) は坏部がスムースな曲線を描き，口縁部は長く反り気味に外反する。(225) は浅い凹線状の屈折部で器壁は厚く，口縁部は僅かに外反する。(227) は丸味のある坏部に短い脚部を有す。調整は総体的に横ナデ及び水びきを基調とするが，部分的にハケが残る。胎土・焼成とも非常に良質で，器壁の厚い高坏もそれなりの丁寧さが窺える。(228) は大型の高坏で屈曲下は丸味を呈し，口縁部は細味で外反する。器面の風化は著しいが，口縁部内外面とも布乃至皮状のものによる横ナデで光沢がある。大型品にしては緻密な胎土を有し，赤色粒子を多く含む。焼成は非常に堅固である。(229)～(241) は高坏の脚部で，布留の典型期に伴うスマートで柱状部がエンタシス状を呈する脚はなく，ややずんぐりした形状を呈する。その内でも (229)・(230)・(232)・(238) などは柱状部が長目で，(232) を除くと裾部は鋭く開く。(231)・(233)～(237)・(241) は短い柱状部で強く屈折する脚部を持つ。さらに，柱状部が僅かに膨味を持ち大きく開き裾部は鋭く屈曲する (239)，柱状部から裾部にかけて素直な曲線を描く (240) などがある。内面は全て右廻りの篦削りで仕上げ，外面は殆んどが丁寧なナデを施し，僅かにハケが残るものもある。(241) は裾部内面にも荒いハケ調整が認められる。

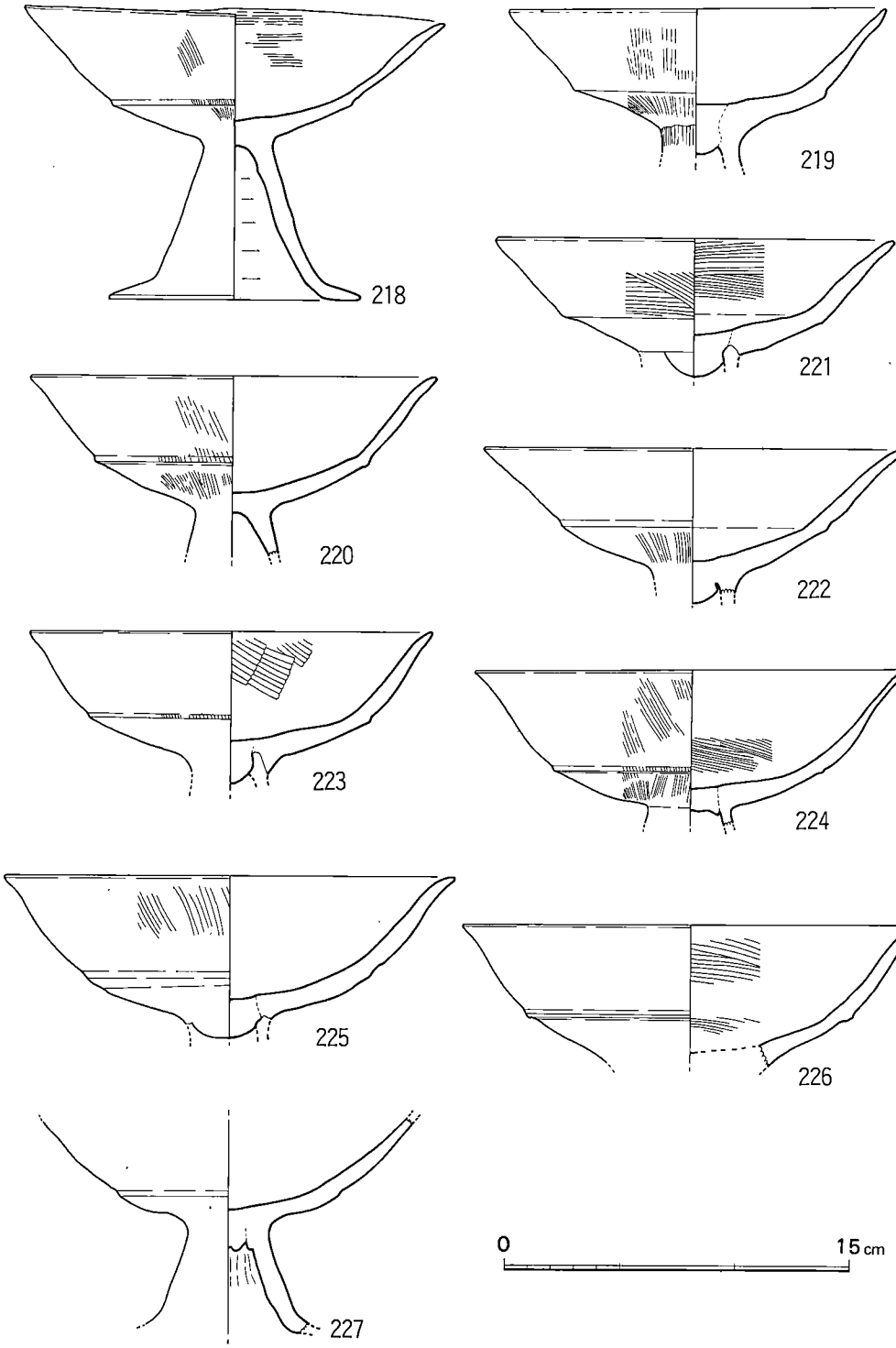
器台は１点のみで (246) がある。坏部と脚裾部を欠失する。おそらく口縁部は鋭く二段に屈折して短く外反すると思われる。外面は磨キが若干認められ，胎土・焼成とも非常に良く赤褐色の色調を持つ。

手捏土器には (242)～(244) がある。(242) は器壁の厚いもので「く」字状に外反する口縁部は尖る。内面は下から上に強い指頭ナデを施す。(243) は風化しており，底部は穿孔ではなく破損したものである。(244) は外面に荒いハケ，内面は強い指頭ナデで仕上げる。(245) は小型の器台で祭祀用具と思われる。外面には篦削りがみられる。

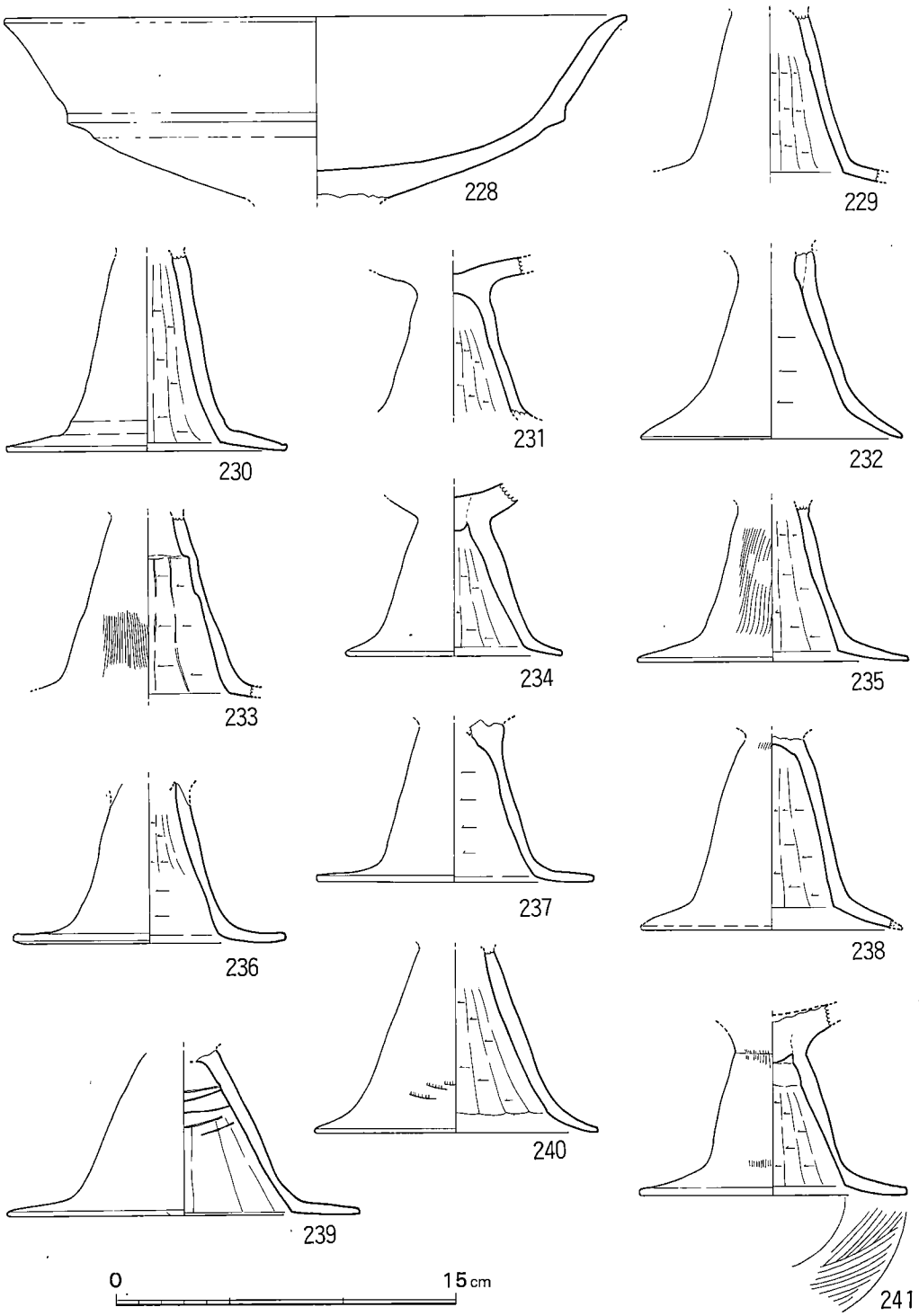
陶質土器は (247) が１点出土した。器形は脚付・把手付壺で，口縁部は緩やかな曲線で外反する。やや張りのある胴部を持ち肩部と胴中央から下半部にかけて三角凸帯を削り出してい



第64図 溝8上層出土土器実測図（1/3）

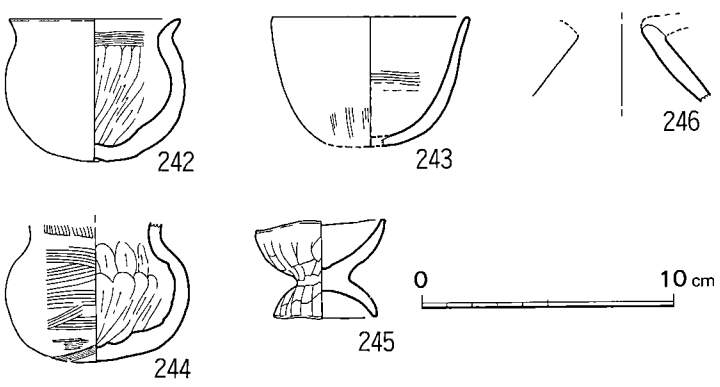


第65図　溝8上層出土土器実測図(1/3)

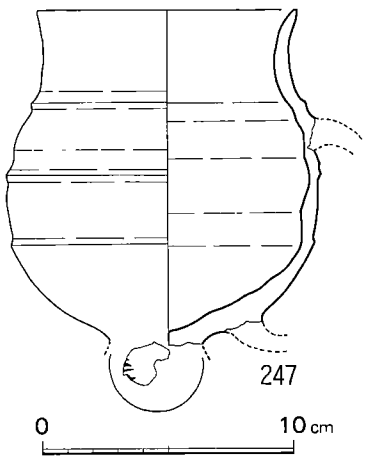


第66図　溝８上層出土土器実測図（1/3）

る。さらに，胴上半と底部近くには把手の欠損痕がある。底部には欠失しているが空中の細味の脚台が付されており，現存の接合径は3.6cmを測る。接合面には接合強化のための鋭い刻み目痕が窺える。現存では脚部の透しは認められない。調整は口縁部内外面に水びき状の横ナデを施し，他は丁寧な横ナデ仕上げである。内面底部近くは粗い横ナデで器壁が厚い。肩部と内面底部には自然釉がみられる。色調は口縁部の一部が小豆色を呈し，全体的には黒褐色をなす。



第67図　溝８上層出土土器実測図（1/3）



第68図　溝８上層出土土器実測図（1/3）

土製品（図版32，第69図）

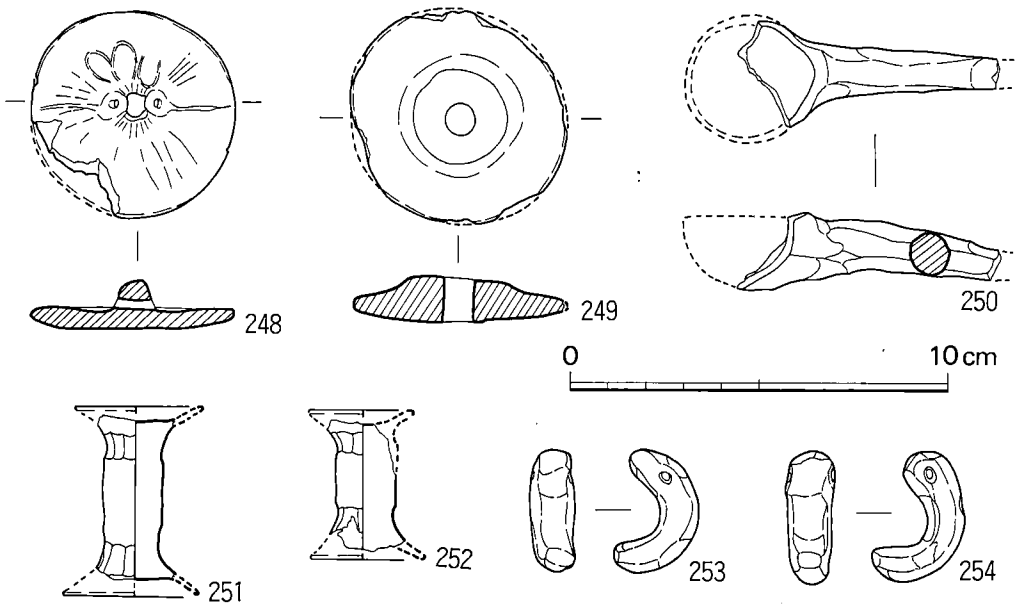
土製品には（249）～（254）がある。（249）は紡錘車で同時期（古墳時代前期）の石製紡錘車を模造したものである。径は5.8cm，厚さ1.1cm，中央部には径８㎜の孔を穿つ。（250）は玉杓子で身と柄の一部を欠失する。柄は僅かに弧を描く。（251）・（252）は器台の土製模造品で祭祀用具であろう。両者とも脚部と受部を欠失する。柱状部の上下端に篦削りを施す。（253）・（254）は勾玉で（253）の頭部は長く尖る。両者とも丁寧なつくりのものである。

鉄器（図版32，第70図）

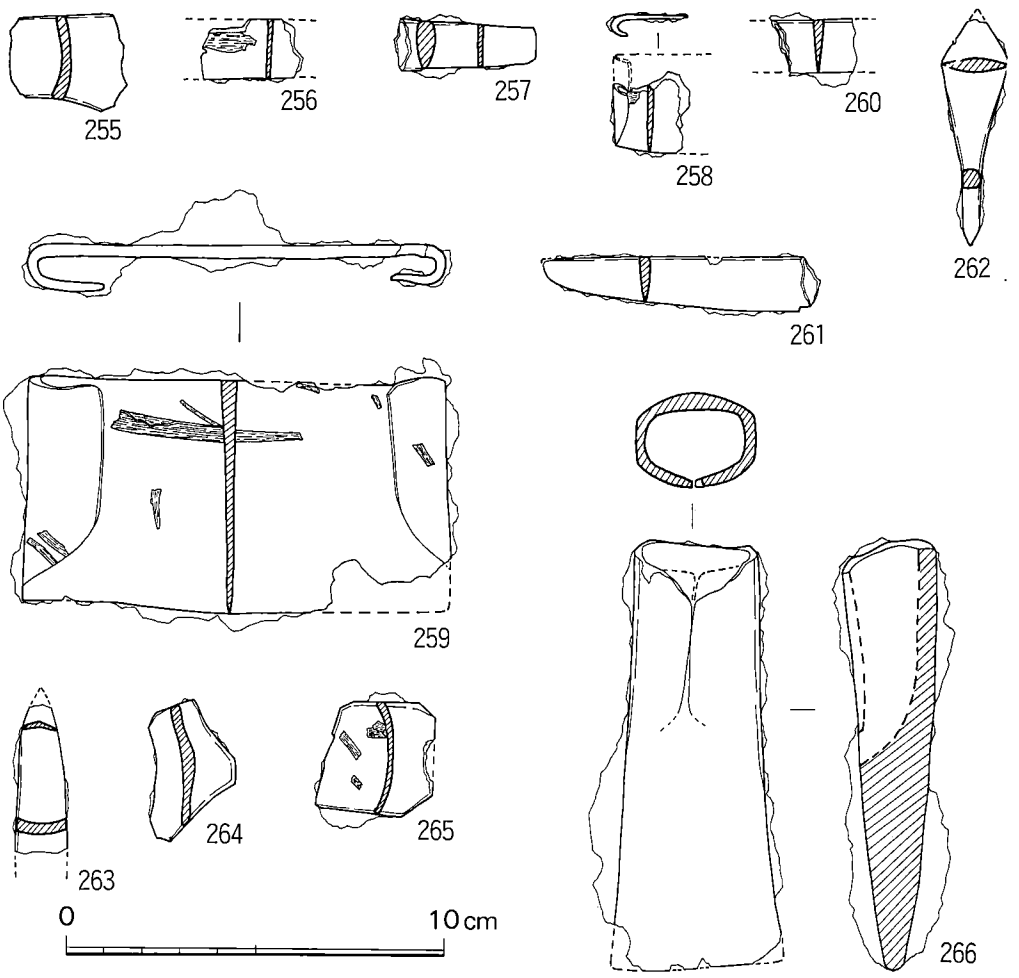
（266）の鍛造鉄斧がある。刃部と袋部の一部が欠損する。袋部の両側は平坦をなす。全長11.2cm，袋部の幅3.3cm，刃部幅4.5cmを測る。袋部には錆ぶくれが著しく木質は認められない。

溝９（図版16-(2)，付図）

溝８の東側に隣接して一部を検出した。当初住居跡と思い込んで調査をしていたが，廻りの地山面と溝の覆土が同一の砂層であり，溝の掘り込み面が捉え難く，遺構の全容をつかむのに苦慮した。しかし，発掘途中に溝状遺構であることが判明し，若干掘り過ぎた感がある。溝は検出した箇所で完結しており，他の遺構の可能性も少なからず残るが，一応溝状遺構として扱う。規模は溝幅1.40m，深さ30cmで，断面形状は逆台形を呈する。土層は自然堆積を呈し，底



第69図　13号竪穴住居跡(248)，溝 8 上層(249～254)出土土製品実測図 (1/2)



第70図　1 号竪穴住(255)，3 号竪穴住(256)，4 号竪穴住(257～259)，6 号竪穴住(260)，9 号竪穴住(261)，11号竪穴住((262)，16号竪穴住(263～265)，溝 8 上層 (266) 出土鉄器実測図(1/2)

面より僅かに上層の暗茶褐色土層中にまとまった土器群が投棄されていた。出土土器の器種は壷・甕・小型丸底土器（大型のものも含む）・鉢・浅鉢・坏等がある。時期は古墳時代前期（布留古式併行期）である。

出土遺物

土器（図版33・34，第71・72・73図）

壷には(267)～(269)がある。(267)は「く」字状に鋭く外反する口縁部に細味の頸部を持つ。胴部の張りは鋭く，球形を呈する。器壁は厚く，内面肩部には粘土紐の巻き上げ痕を残す。外面は丁寧なナデ，内面は左廻りの篦削り仕上げである。(268) は大型の壷の割には器壁は薄く均整のとれたものである。頸部は（267）と同様に細く，長く反り気味に外反する口縁部を持つ。胴部は大きく張り球形で，最大径が胴下半部にある。口縁部内外面とも丁寧な横ナデ，胴部外面は細い横ハケ，内面は左廻りの丁寧な篦削りで仕上げる。胎土・焼成とも良好で，一方向のみ二次加熱を受ける。(269) は小型の壷で「く」字状に強く外反する口縁部を持ち内弯気味に終る。胴部は扁平球で著しく張る。甕の範疇に這入る可能性もある。調整は磨キが主体で底部近くには細いハケが残る。胎土は精製され非常に緻密である。焼成は堅固で淡い赤褐色を呈する。

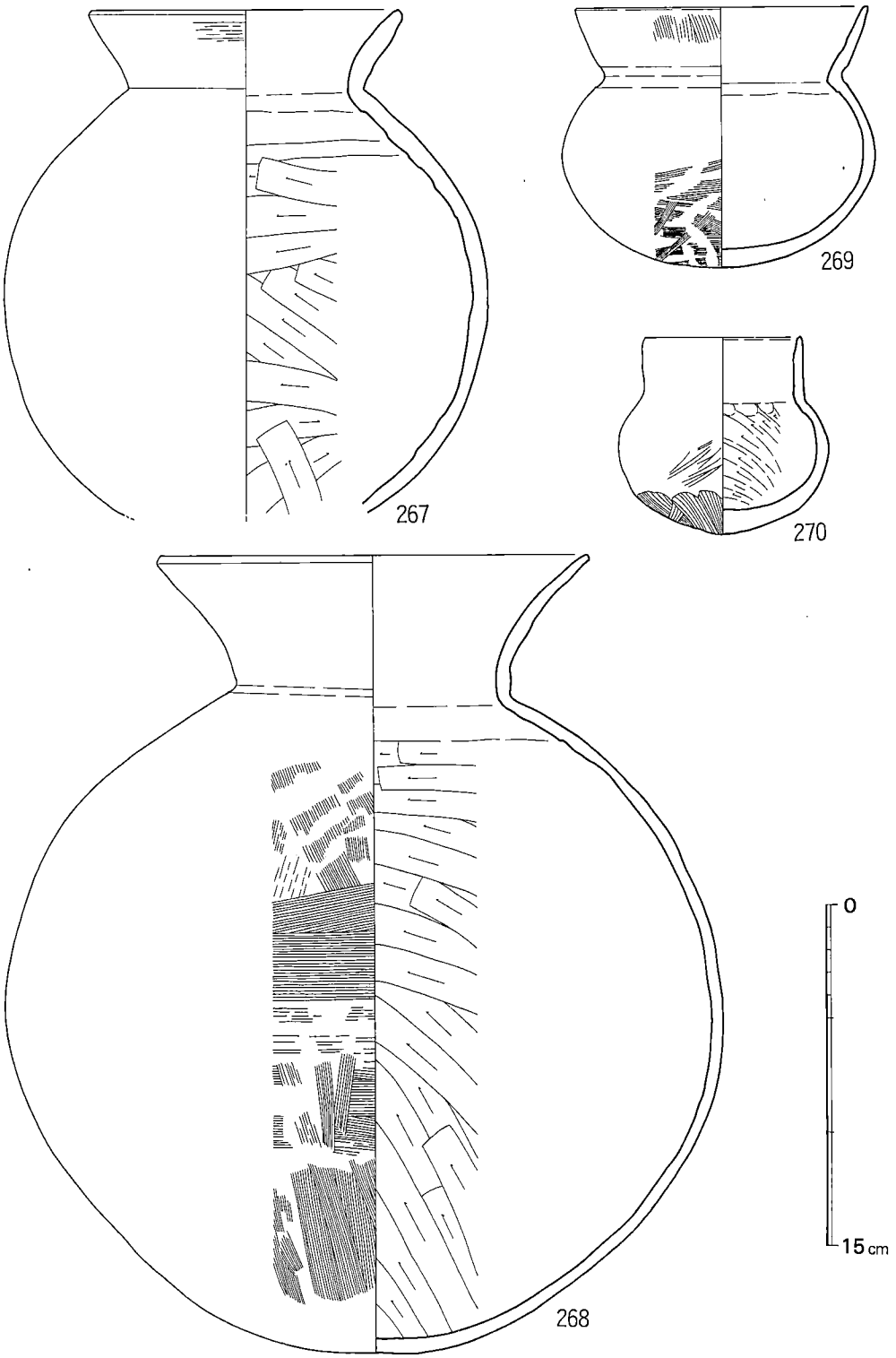
小型丸底土器には（270)・(276）がある。(270）は内弯気味の口縁部を持ち，胴部は扁球である。底部は厚手づくりで，外面底部は板の小口によるカキトリを施す。内面は指頭ナデ仕上げで，弥生的な形態を残す。(276）は大型のもので，畿内で出土したと聞いているが，他に類例をみない。口縁部は鋭く外反し長く，口唇部は僅かに内弯させている。口縁径に比べて胴部は小さく不釣合である。胴部壁は厚くつくられ，口縁部内外面は水びきののち磨キ，胴部は磨キとナデ仕上げであるが，極細のハケが残る。非常に丁寧なつくりの土器である。

甕には（271)～(275）がある。(271）の口縁部は頸部に稜を持たずに外反し，口唇部に明瞭な沈線を廻らす。肩部から胴上半部にかけての張りは強く，最大径を胴上半部に持つ。胴下半の張りは鈍く尖り気味の底部をなす。以上のことから，布留古式併行期よりも若干古い様相を呈するが，肩部には沈線を刻み込み，ハケ調整を施し，内面篦削りの位置が下ることなどの新しい技法が加えられる。胴部には二次焼成を受ける。(272）は内弯する口縁部を持つ。(273）も同タイプのものであろう。(274)は倒卵形の胴部である。(275）は（271）と同タイプの甕であるが，内面は頸部直下から左廻りの篦削りで仕上げる。全てに煤が付着する。

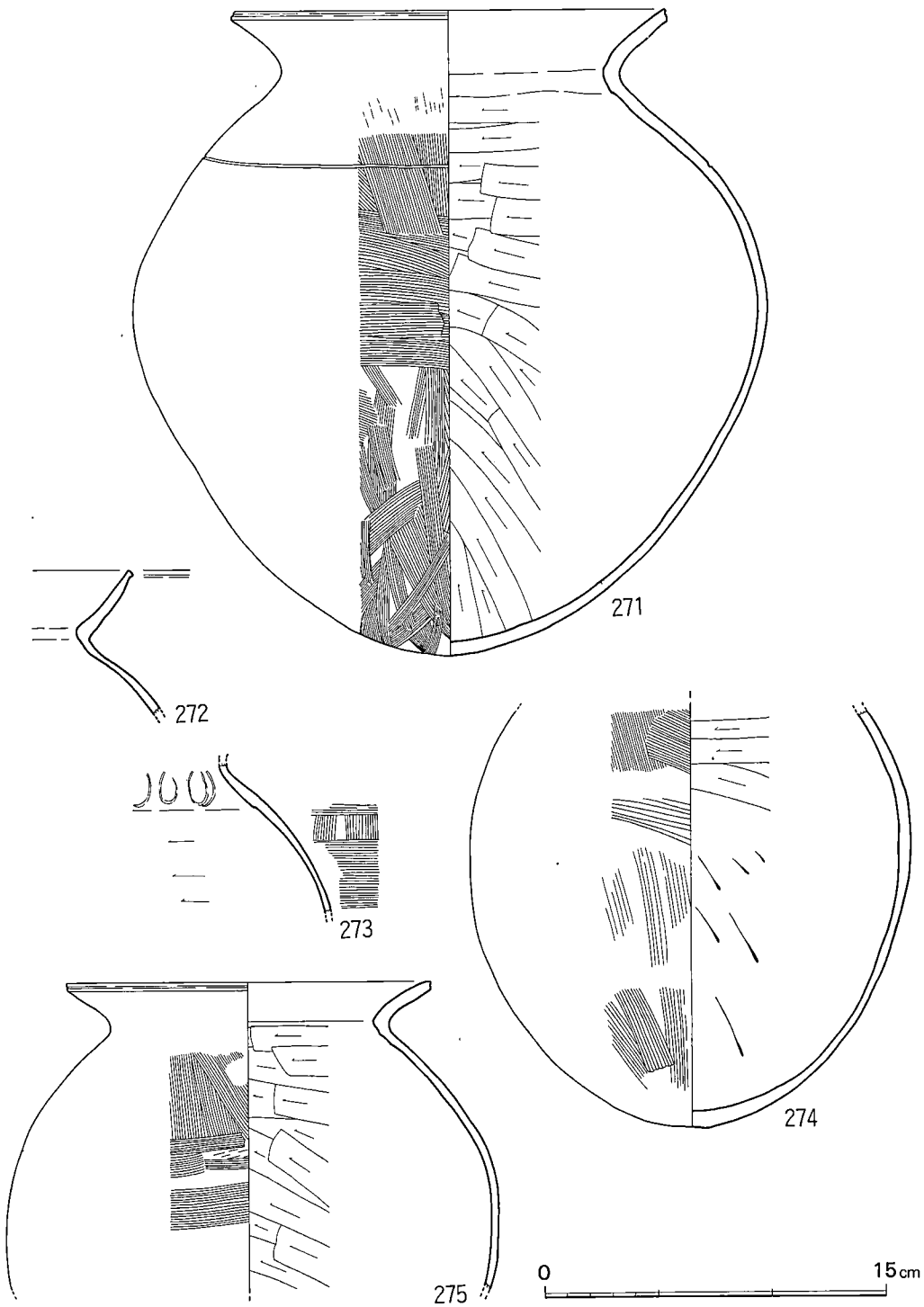
(277）は口縁が内弯する浅鉢である。

(278)・(279)は坏で前者の内面は荒いハケ，後者は暗文状の篦磨キを施し，後者が精製品である。両者とも二次加熱が顕著である。

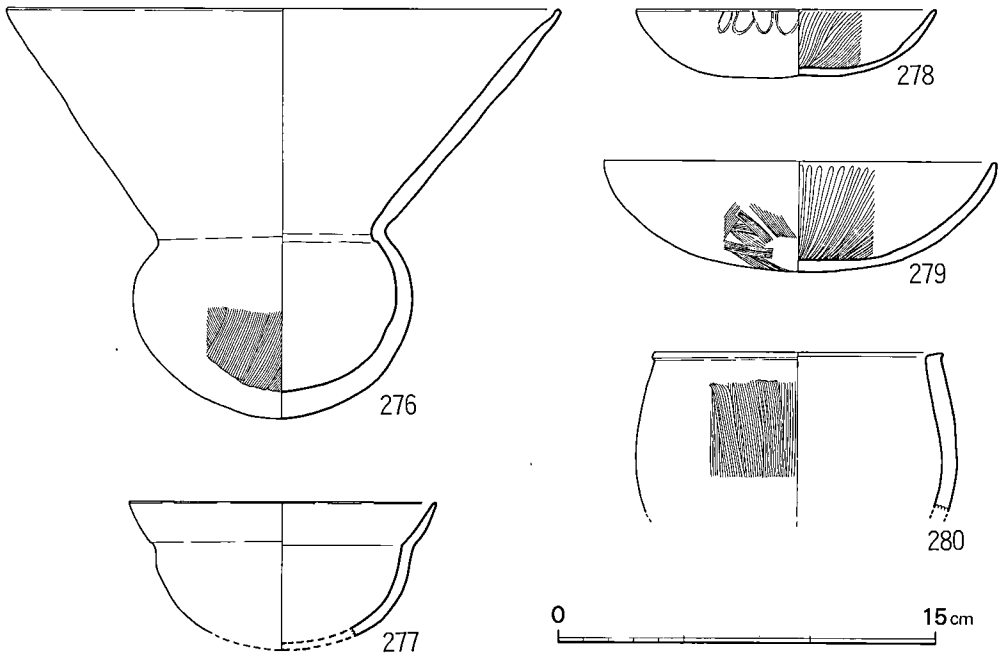
(280）は鉢で口唇部を肥厚させる。外面は極細のハケ，内面はナデで篦削りは認められない。外面は煤の付着が著しい。



第71図　溝9出土土器実測図（1/3）



第72図　溝9出土土器実測図（1/3）



第73図　溝9出土土器実測図（1/3）

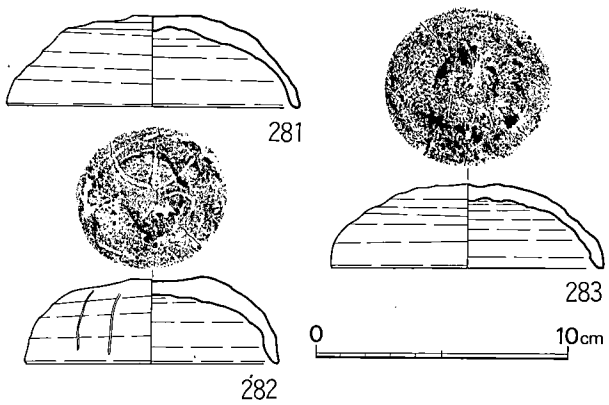
溝10（付図）

発掘区の南東隅にある溝で，蛇行して南北に流れる旧河川に直結する。溝の一部を調査したに過ぎず，溝の性格は明らかでないが，水口部として機能していた可能性がある。溝の幅は水口部分は不明であるが，南側に延びるに従って急速に狭くなり，95cmを測る。深さは旧河川と直結する箇所で11.5cm前後，南側では23cmを測り，南方向に若干の傾斜を持つ。溝内の遺物は須恵器の坏蓋が3箇体出土している。

出土遺物

土器（図版34，第74図）

須恵器の坏蓋が3個体出土している。(281)は口径11.7cm，器高3.6cmを測る。調整は右廻りの回転篦削りと横ナデ仕上げである。(282)は口径10.1cm，器高3.3cmを測り，上面には凹みがある。さらに，上面と側面には篦記号が刻まれている。(283)は口径10.8cm，器高3.3cmを測る。上面には篦記号がある。内面には小



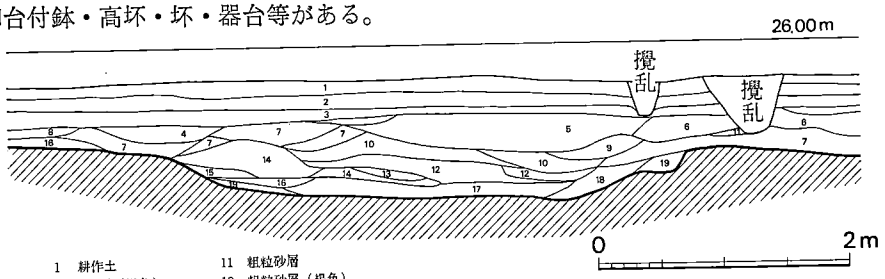
第74図　溝10出土土器実測図（1/3）

さな焼ぶくれが認められる。

旧河川（付図，第75図）

発掘区の東端を南北に蛇行するもので２条程検出した。東側の１条は予備調査時に一部を発掘し，本調査では工事工程の関係で調査対象から除外した。東側の河川（旧河川１）の幅は4.5m～6.0mを測る。西側の河川（旧河川２）は自然堤防の東端に沿って流れ，河川の西側は洪水の痕跡と思える河原礫が15号住居跡近くまでの広範囲にわたり検出された。

河川の幅は種々で広い箇所で7.0m，狭い所で4.0m，深さは40cm～50cmを測る。河床近くでは粘質土と砂質土層が交互に堆積しており，土器の多くはこの層から出土している。出土した土器は弥生時代の土器は少なく，殆んどが古墳時代前期のものである。器種は壷・甕・小型丸底・脚台付鉢・高坏・坏・器台等がある。



1　耕作土
2　床土(灰褐色)
3　床土(黄褐色)
4　茶褐色土
5　暗褐色砂質土
6　茶褐色土(4と同じ)
7　茶褐色砂質土
8　茶灰色土
9　粗粒砂層(灰褐色)
10　微粒砂層(灰褐色)
11　粗粒砂層
12　粗粒砂層（褐色）
13　黒灰色土混り微粒砂層
14　微粒砂層
15　明黒灰色粘質土
16　黒灰色粘質土
17　砂混黒灰色土
18　黒灰色粘質土(16に同じ)
19　砂粒混り黒灰色粘質土

第75図　旧河川２土層断面実測図（1/60）

出土遺物

土器（図版34，第76・77・78図）

壷には（284）がある。鈍く外反する口縁部に張りの弱い胴部を持つ。外面は荒いハケ，内面は２種類の篦削りがみられる。

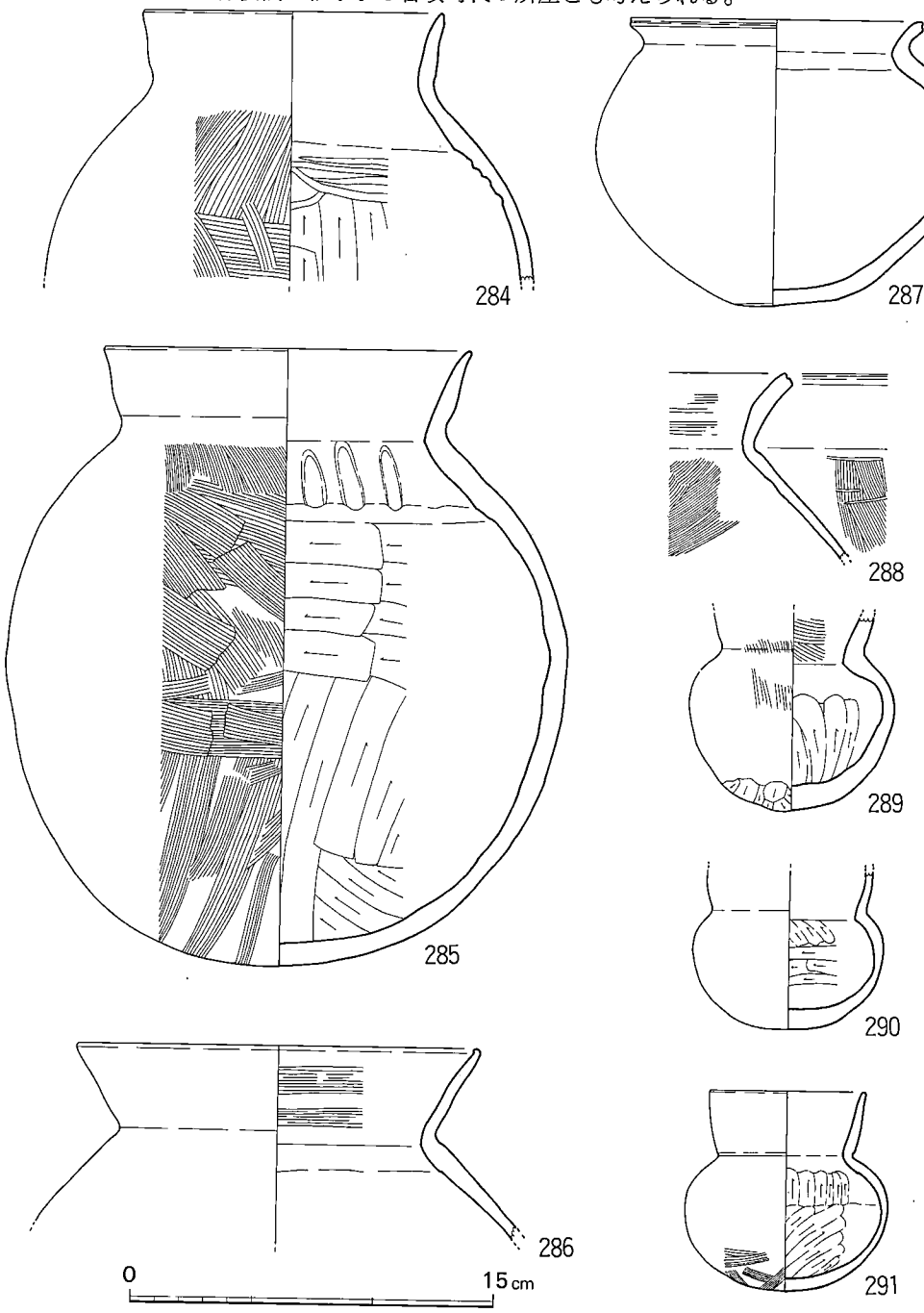
甕は(285)～(288)がある。(285）は形態・技法・調整手法ともに新しい傾向の土器である。(287）は弥生時代後期末頃の甕でレンズ状の底部を持つ。(288)は口唇部に沈線が廻り，内外面ともハケ，肩部に篦による細い沈線が認められる。

(289)～(293）は小型丸底土器で，胴部に最大径を有す（289)～(291），口縁部に最大径を持つ所謂「坩」タイプの（292)・(293）とがある。

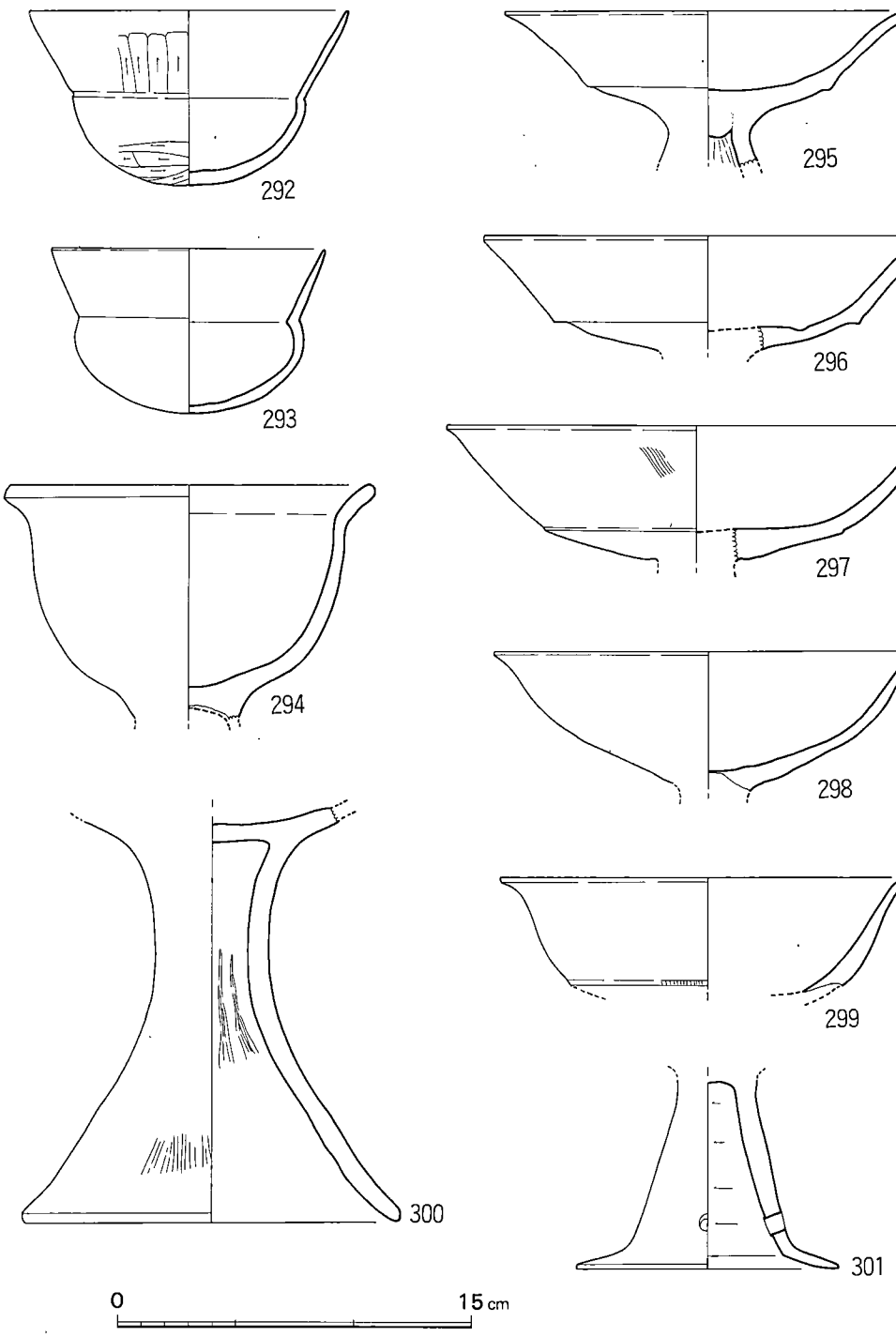
(294）は鈍く外反する口縁部を有す鉢で，脚台を付せるものである。弥生時代の所産である。

高坏には（295)～(303）がある。殆んどが検出した住居跡から出土した高坏と同タイプであるが，(298）は坏部に屈折がなく，(299）は坏部に丸味を有し口縁部が外反し，タイプが異る。(300）は先出する高坏の脚である。

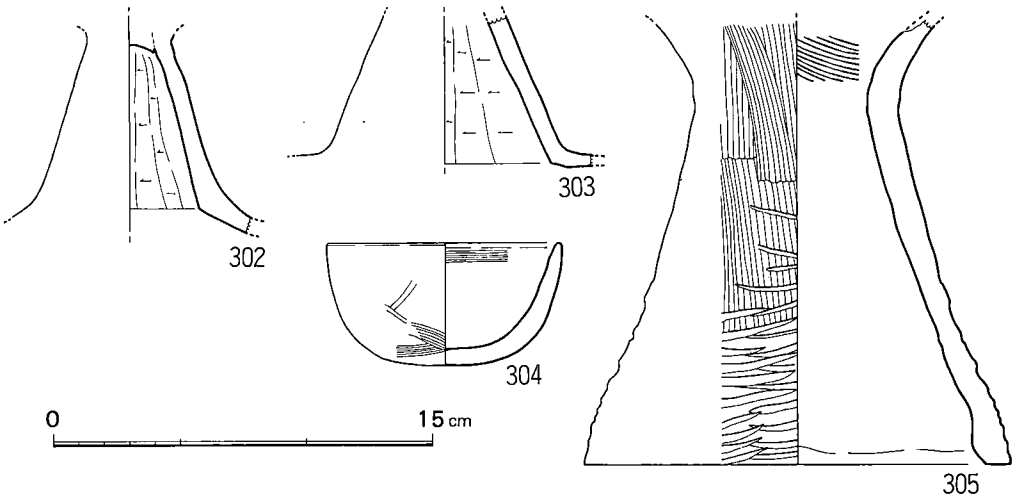
(305) の器台は弥生時代終末的な技法を持つが，古墳時代前期の土器と共伴する事例があることから，伝統的な製作技法を継承する古墳時代の所産とも考えられる。



第76図　旧河川２出土土器実測図 (1/3)



第77図　旧河川２出土土器実測図（1/3）



第78図 旧河川2出土土器実測図 (1/3)

3. 小　結

上々浦遺跡は沖積平野に低く南北に走る小石原川の自然堤防上に営まれた弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡である。しかも自然堤防はいささか入組んで形成されていることから，現存する地形では遺跡の有無の判断は困難である。さらに，周辺には幾条もの幅員の小さな旧河川が蛇行しており，至る箇所に湿地帯を形成していることから，水害に遭遇する危険性をはらんでいたことは推測される。事実，弥生時代後期と古墳時代前期にはその片鱗を残している。

両時期の住居跡群を観ると，2群に別れ弥生時代の北群の住居跡には大型化の傾向が窺え，家族構成員の増加に伴う家屋の建て直しが計られたものと思える。しかも当群は炊事場を共有していることも注目に値する。南群の住居跡は調査範囲内ではその傾向はない。前期とは若干の時間的間欠性はあるものの古墳時代に至っても住居の占地場所は踏襲されており，同小集団によって集落が継承されていたものであろう。古墳時代にも水害に遭遇しており，この時点で集落は放棄されている。さらに，溝8内には多量の土器群が投棄されており，しかも陶質土器，土製の勾玉，模造鏡及び祭祀用具も出土していることから，単なる投棄ではなく背景に水神信仰の痕跡を窺い知るのである。

Ⅳ 結　語

西原遺跡では旧甘木中学校周辺に高射機関砲第四連隊が設置されたことで戦時中に著しい整地がなされており，遺跡は殆んど遺存しなかった。

上々浦集落遺跡では住居跡の出土は少数乍らも，古墳時代前期に比定される溝８の上層から多量の古式土師器を検出できたことは，甘木・朝倉地区における古墳時代前期の土器から観た地域相を窺い知る将来的な一資料となり得たので，古式土師器について若干述べたい。

近年にあってはかなりの地域で古式土師器を伴う遺跡の調査例が報告されてはいるものの，断片例として提示されているに過ない。しかし，断片的資料の中には明らかにある地方からもたらされた土器が存在する。つまり，土器の製作技法の斉一化が計られる時点で，畿内的色彩の濃い土器と一定程度地方的な技法の継承が反映された土器が導入されている。しかもそれは土器の斉一性を踏えた上で地方色を加味し乍ら折衷され完成された形態として将来される。このことは津屋崎町に所在する今川遺跡において特に顕著に認められ，畿内の河内系，山陰系，東海系の特徴をなす土器が搬入されており，広範囲にわたる土器の流入が指摘されている。[註1] さらに，佐賀県鳥栖市においても山陰系の色彩の強い古式土師器の搬入があると聞く。[註2] この様な事例は最近増加する傾向にあり，それと共に北部九州の古式土師器の搬入経路を探る意義は，古墳の成立過程を求める意味において有効的な方法と思われる。これを思慮した上での基礎的作業として古式土師器の体系的な位置づけが将来的な必須課題と云える。

以上取留のないことを述べてきたが，ここではその基礎資料の操作の一環として上々浦遺跡とその周辺遺跡の古式土師器について観てみたい。

甘木・朝倉地区における古式土師器の主だった出土例は近年の発掘調査によるものが多い。遺跡例としては小田道，[註3] 大願寺，[註4] 神蔵古墳，[註5] 池の上等の諸遺跡が挙げられる。

小田道遺跡では弥生時代後期後半前後から古墳時代前期にかけての土器群が一括資料として提示され，基礎作業の一環として整備されている。ここでは小田道Ⅲ期を最古式土師器とされ，煮沸用具である甕形土器の形態的変遷過程で，特に古式土師器の特徴とされる底部の平底から丸底への移行を論拠として，設定されていることは首肯できる。ただしⅡ期の高坏においてⅢ期のそれと共伴可能な形態的特徴を示唆する高坏が混在することは否めない。小田道遺跡の土器の特色は，弥生時代においては中九州地方の野辺田系の甕，瀬戸内系の高坏等が認められ，古墳時代になると多用される煮沸用具の甕形土器は在地系の技法をなす長胴の甕で構成されている。さらに，30号住居跡の覆土中から出土した土器群には，形態的差異はあるものの東九州的傾向を示唆すると思われる高坏と時期的には布留古式併行期を示す高坏も存在している。壺の破片と思われるものには，櫛描波状文の多用が認められること，長方形の透しを有す器台においても瀬戸内との折衷的要素を持つ可能性を秘めていることから，[註6] 前記のように地方色を加

味し乍ら折衷され完成された形態として搬入されたと思われる。

神蔵古墳の北西くびれ部に供献されたとされる土器群に一括の好資料がある。この土器群の甕形土器の一部には刺突文，波状文，肩部のナデ肩，特徴的なハケ，頸部の強い横ナデによる調整等の布留的技法及び調整法を採用しているものの，甕形土器の頸部直下からの篦削り，肩部の張り，口縁部の外反状態と高坏に古い形状を残すこと等から，庄内（新）～布留（古）式併行期に相当すると思われる。ここでは供献土器としての器種に多様性があることに若干の問題を残している。

大願寺方形周溝墓出土の土器群も上記の土器群に併行する時期のものであると聞く。

池の上墳墓群には1号墳と3号墳に古式土師器の一括好資料がある。1号墳出土の甕1点を除けば全て外来土器で，器種構成と形態から布留（古）式に比定されている。

上々浦遺跡の古墳時代の住居跡と溝8出土の土器群は前述したように総体的に布留（古）式の特徴を示すもので，甕形土器において顕著に認められる。土器群の中では（109）と（112）・(113）のような特徴的な壺があり，前者は将来された地域が他と異り，後者は折衷された形態とも思える。さらに，この土器群には把手付・脚付壺の陶質土器が共伴しており，甘木・朝倉地区では現在知られているものでは最も古い可能性を秘めている。溝10出土の土器群は甕にやや古式の様相を残しつつも（276）の小型丸底土器の大型品が出土しており，畿内の最近の出土例で布留（古）式に共伴すると聞く。[註7]

以上の遺跡例から，甘木・朝倉地区の最古式土師器は小田道49号竪穴住居跡と土器留遺構が相当し，庄内（古）式併行期にあたると思われる。後出する土器群としては神蔵古墳の北西くびれ部出土土器群で庄内(新)～布留(古)式に相当する。次に後出する土器群に上々浦遺跡の住居跡の中で一括資料を出土した15号竪穴住居，溝8，溝10と池の上1号～3号墳出土の土器群＝布留(古)式併行が挙げられる。

さらに，小田道，上々浦の両遺跡からは弥生時代の土器に瀬戸内的あるいは東九州的要素の濃い土器が将来されており，また，朝倉町の天皇山石棺群の不明土壙から畿内に出土例の多い手焙形土器が出土していることから，[註8]流入経路としては筑後川水系に沿った日田ルートが当然考慮され，古墳時代においても同様の搬入経路が継承されていたと思われる。

註1　「今川遺跡」（津屋崎町文化財調査報告書第4集）—津屋崎町教育委員会—1981

註2　鳥栖市教育委員会の藤瀬禎博氏から教示を受けた。

註3　「小田道遺跡」（甘木市文化財調査報告第8集）—甘木市教育委員会—昭和56年

註4　「神蔵古墳」（甘木市文化財調査報告第3集）—甘木市教育委員会—昭和53年

註5　「池の上墳墓群」（甘木市文化財調査報告第5集）—甘木市教育委員会—昭和54年

註6　この種の器台形土器は，三雲遺跡の3号不整形土壙，佐賀県武雄市のみやこ遺跡のＳＫ324号土壙等から出土しており，他に同県内の惣座遺跡，琵琶原遺跡，下久米遺跡からも出土例があると云う。

これらの一連の土器は，九州地方のある一地域で形成された特徴ある土器とも考えられる。

「三雲遺跡Ⅱ」（福岡県文化財調査報告書第60集）—福岡県教育委員会—1981

「みやこ遺跡」（六角川河川改修工事に伴う発掘調査概報）—武雄市教育委員会—1981

註7　石野博信氏が横断道甘木事務所に来られた時に教示を受けた。

註8　「埋もれていた朝倉文化」—福岡県立朝倉高等学校—昭和44年

図　版

(1)　上々浦遺跡遠景（南から）

(2)　上々浦遺跡予備調査（西から）

(1)　西側発掘区全景（東から）

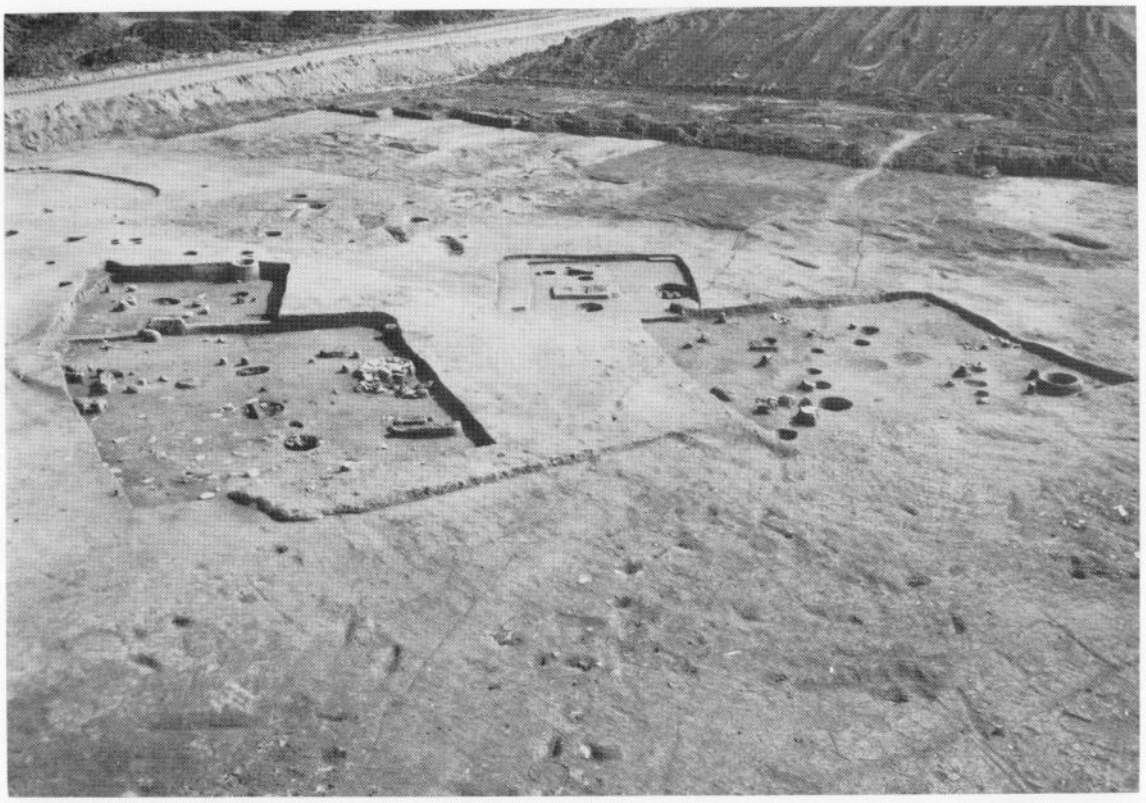
(2)　西側発掘区全景（北から）

(1)　東側発掘区全景（南から）

(2)　東側発掘区全景（北から）

(1)　1号竪穴住居跡（南から）

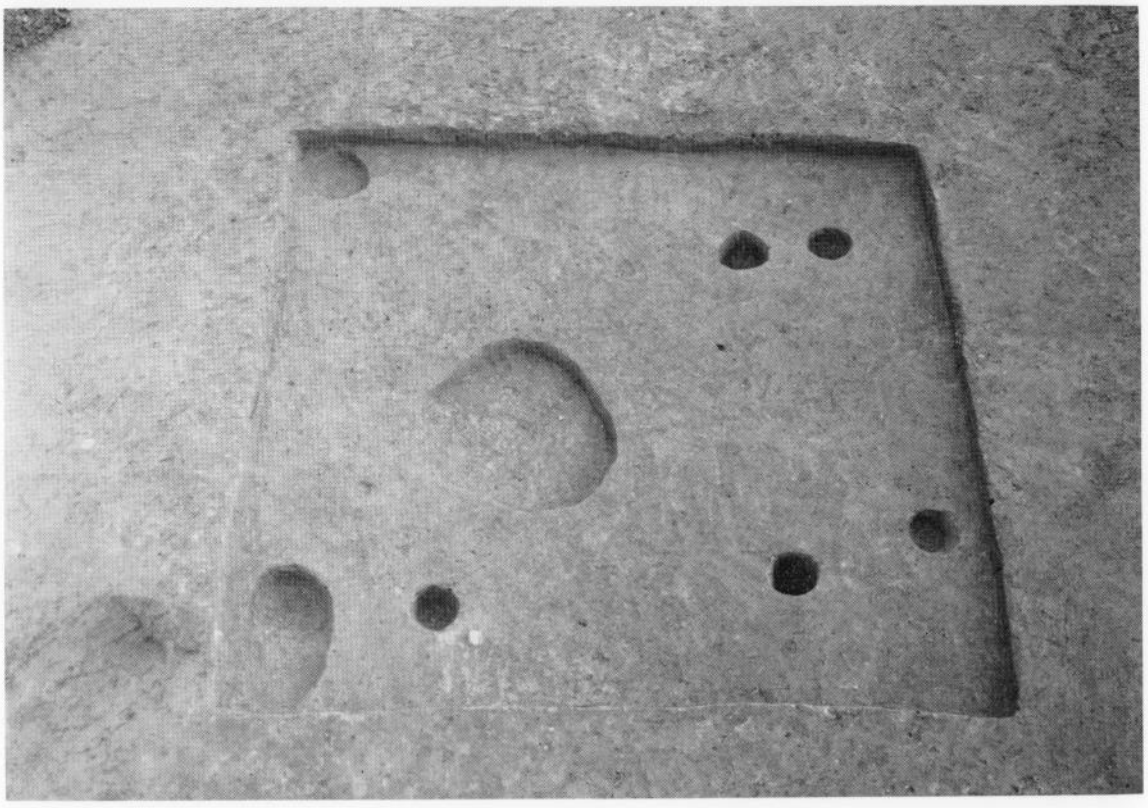
(2)　2号竪穴住居跡（東から）



(1)　3・4・5・6号竪穴住居跡（南西から）

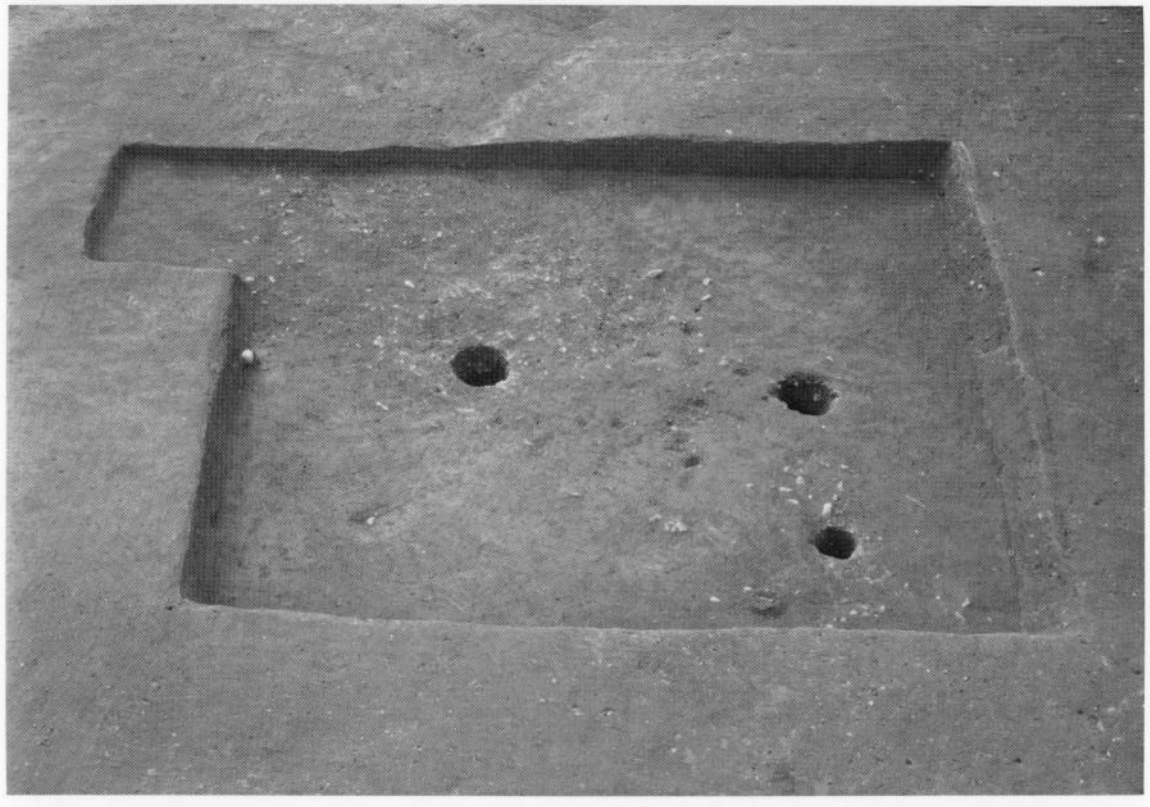
(2)　4号竪穴住居跡（北から）

(1)　5 号・6 号竪穴住居跡（北から）

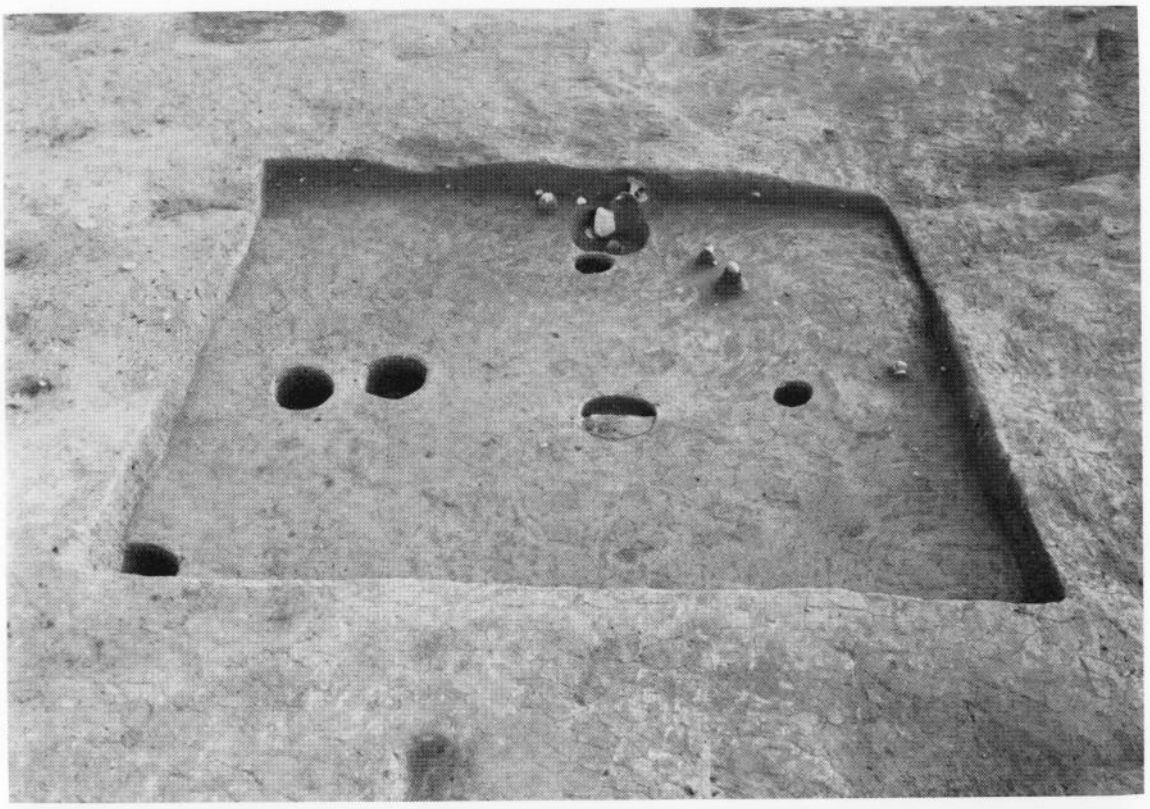


(2)　7 号竪穴住居跡（北から）

(1)　8 号竪穴住居跡（南から）



(2)　9 号竪穴住居跡（東から）

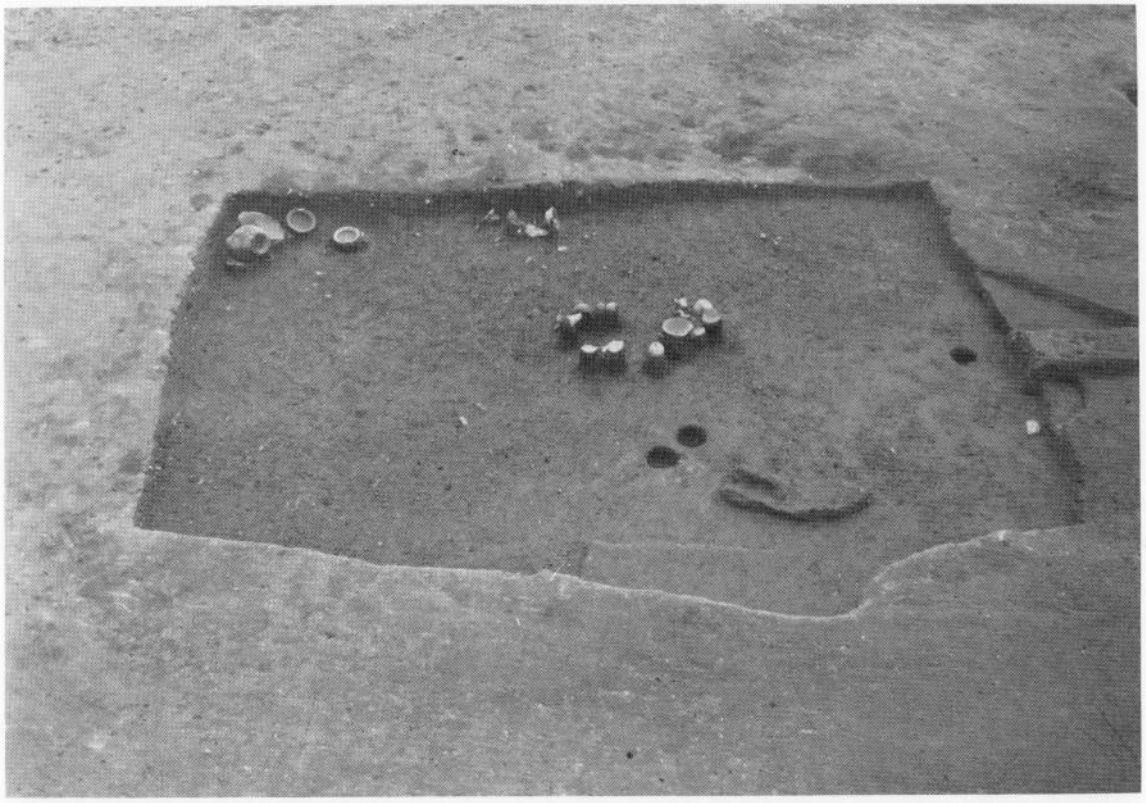


(1)　10号竪穴住居跡（北から）

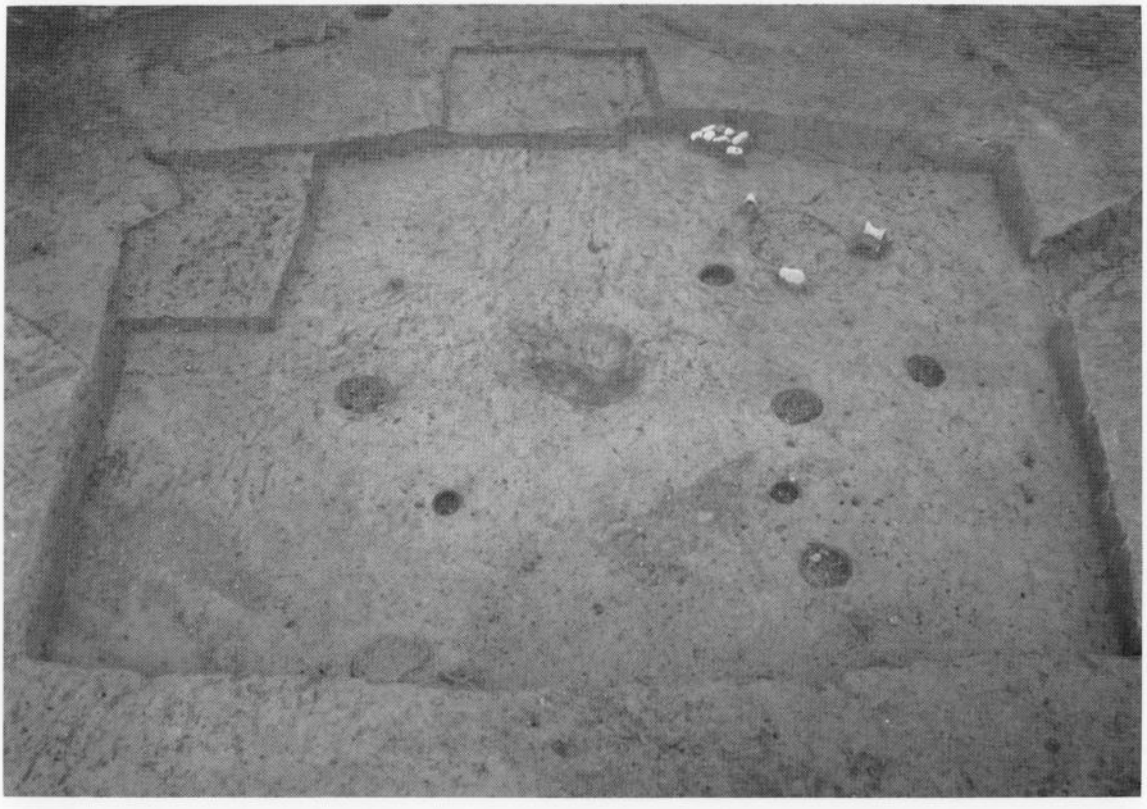
(2)　11号竪穴住居跡（北から）

(1)　12・13号竪穴住居跡（北から）

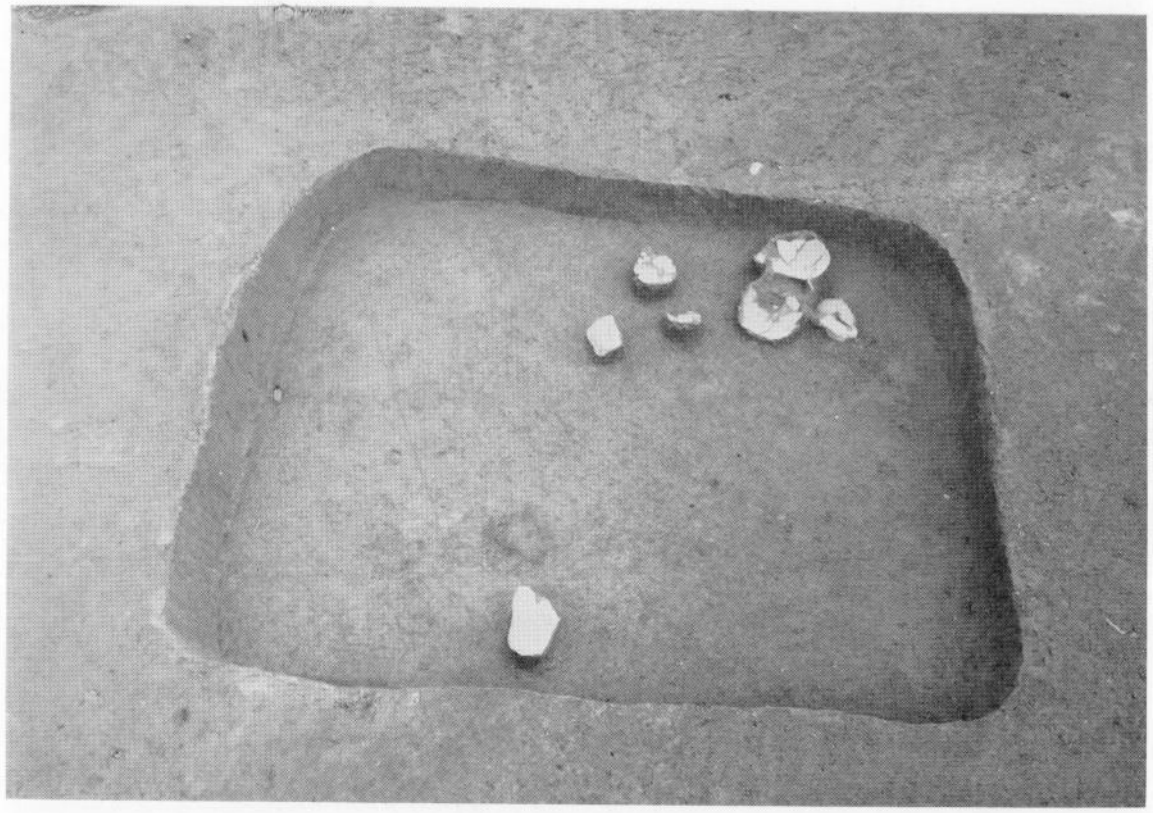
(2)　14号竪穴住居跡（南から）



(1)　15号竪穴住居跡（北から）



(2)　16号竪穴住居跡（南から）

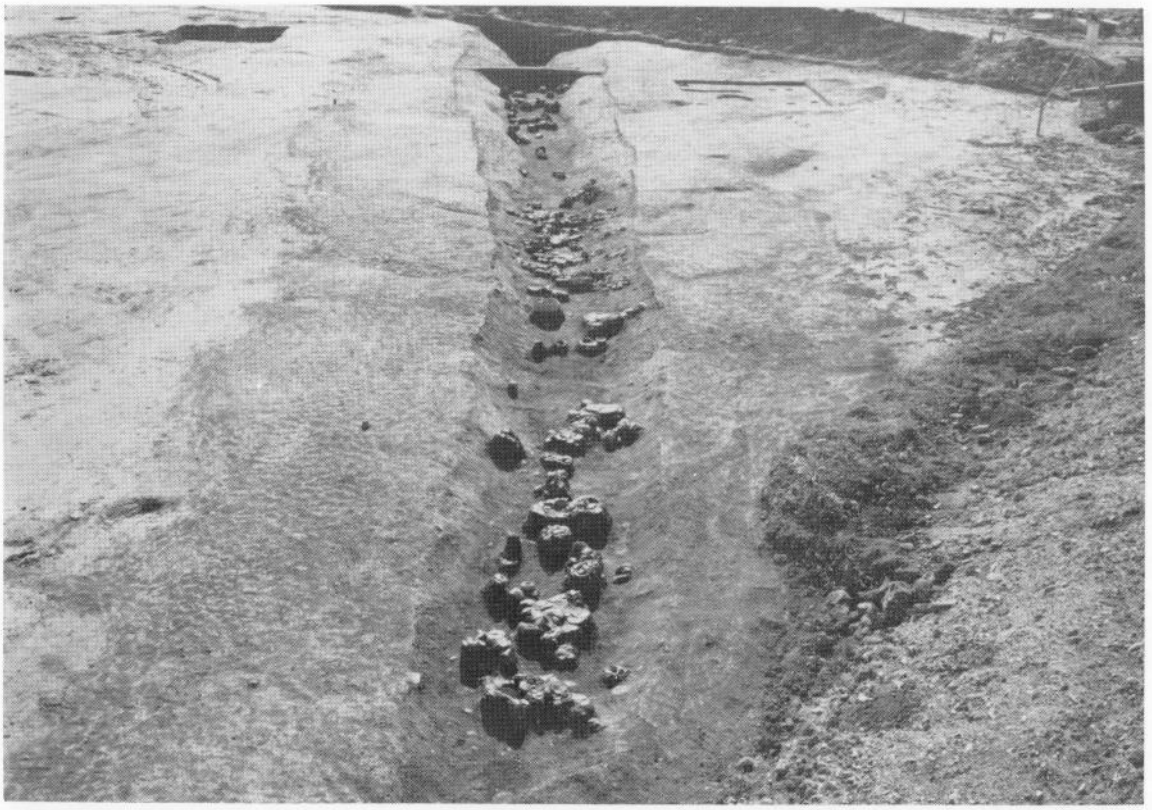


(1)　1号土壙（西から）

(2)　円形周溝遺構（東から）

(1)　1号掘立柱建物（北から）

(2)　2号掘立柱建物（東から）

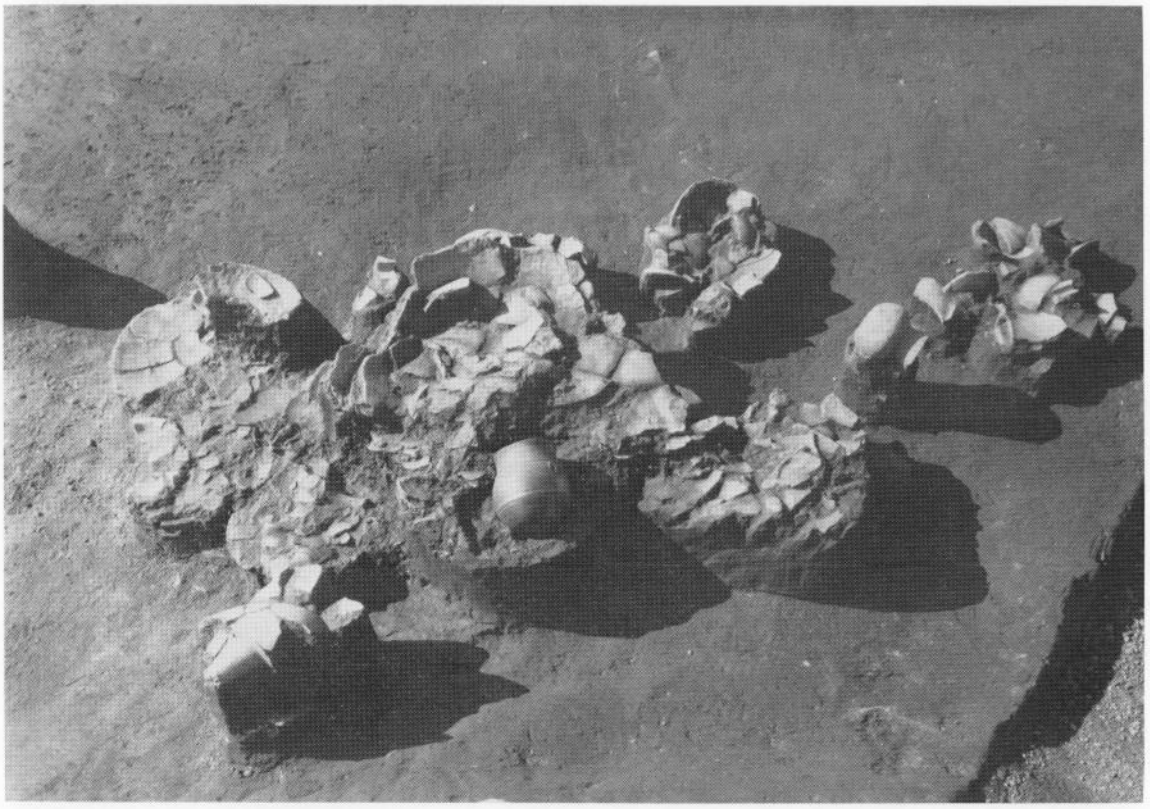


(1)　溝 8（北から）

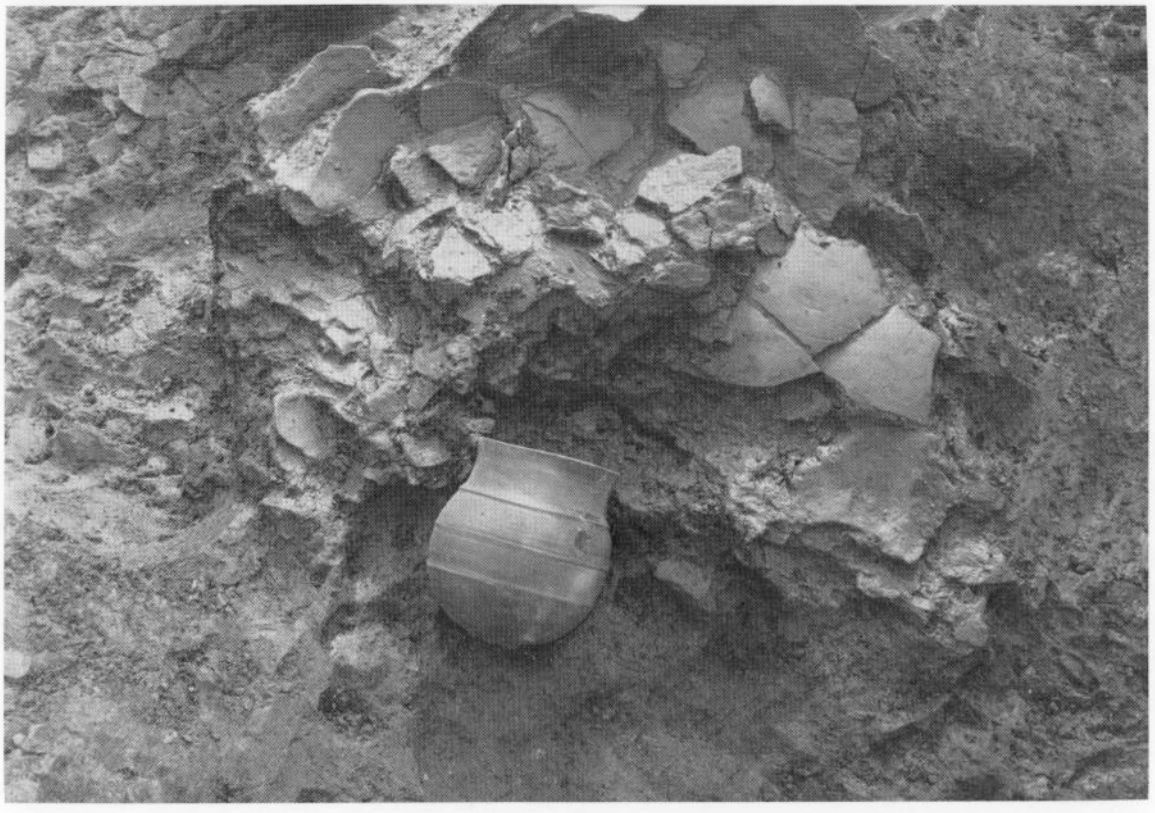
(2)　溝 8（南から）

(1)　溝８北側遺物出土状態

(2)　溝８南側遺物出土状態

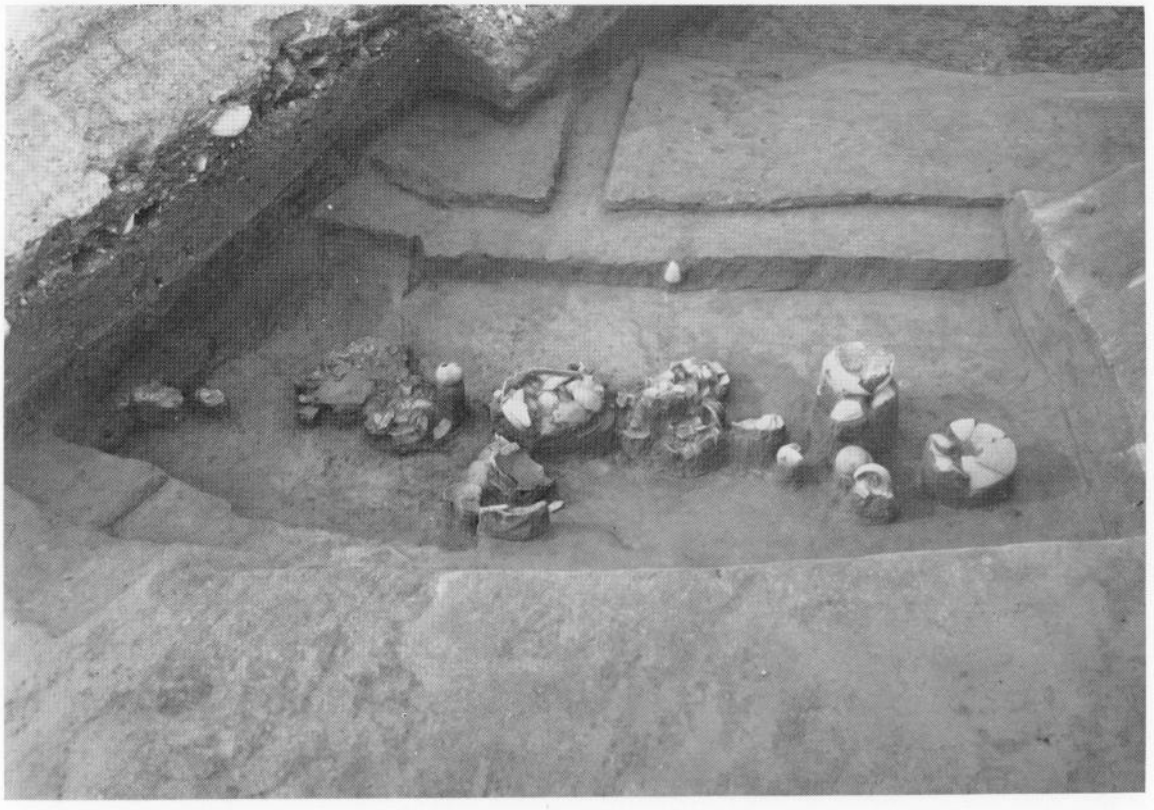


(1)　陶質土器と周辺遺物出土状態

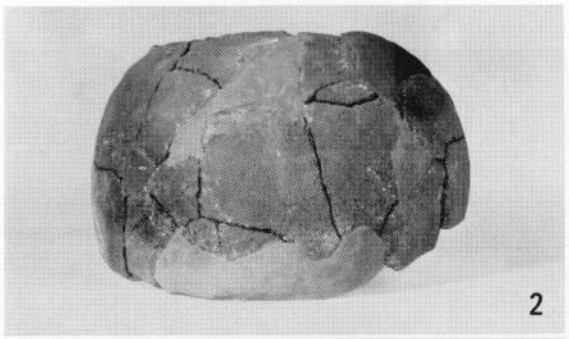


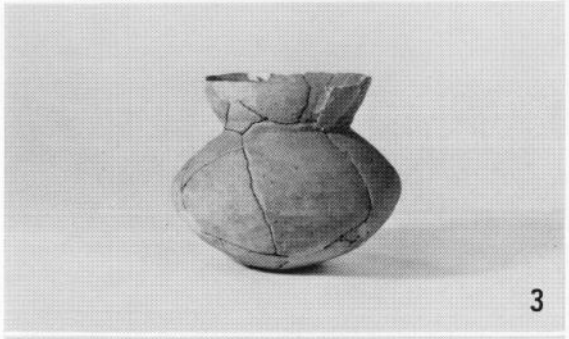
(2)　陶質土器出土状態

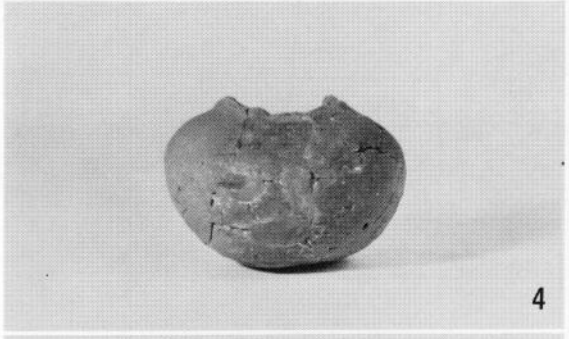
(1)　溝 8 完掘状態（北から）



(2)　溝 9（東から）

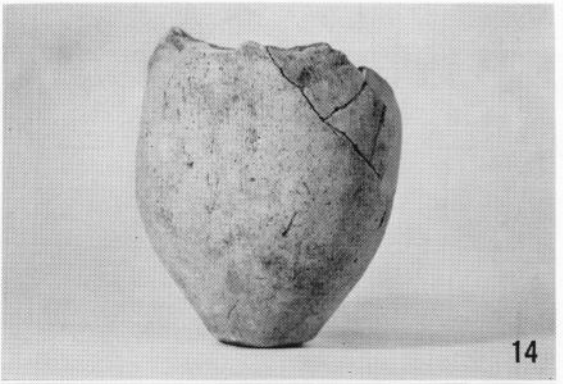

2

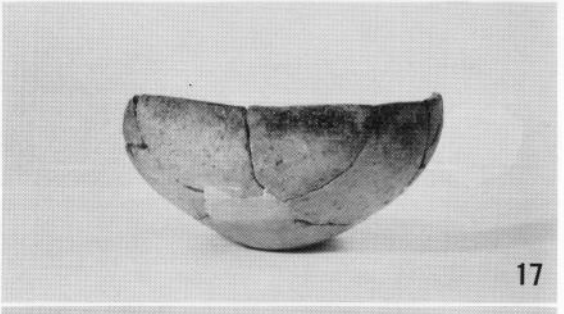

3


4

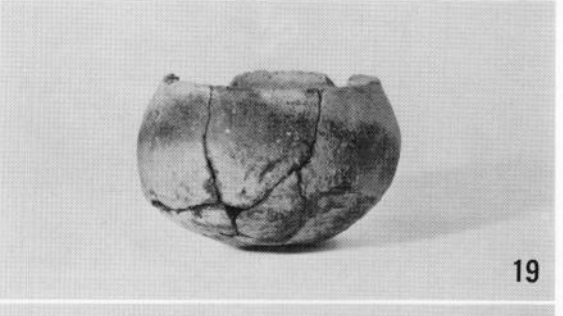
5

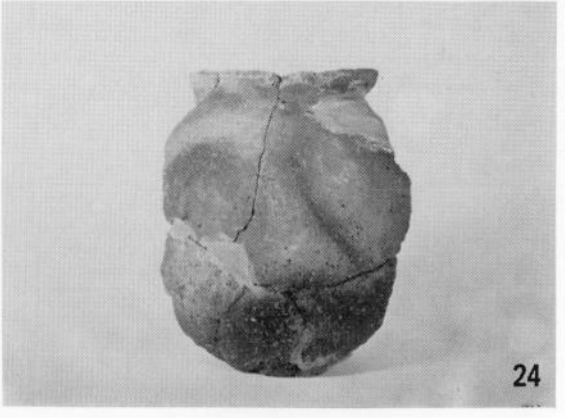
11


14


17

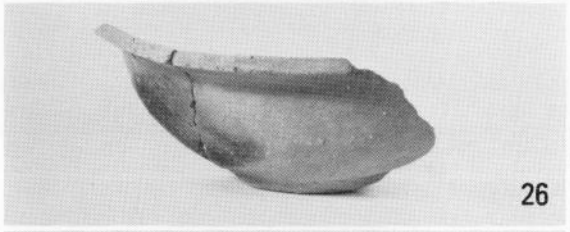
18


19


24

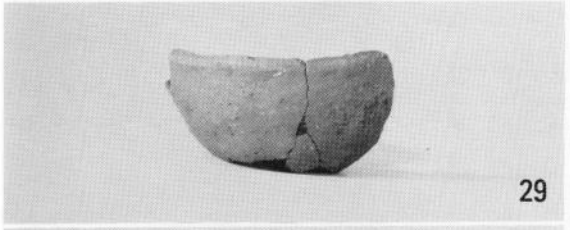
1号（2～5）・4号（11・14・17～19）・6号（24）竪穴住居跡出土遺物

25


26

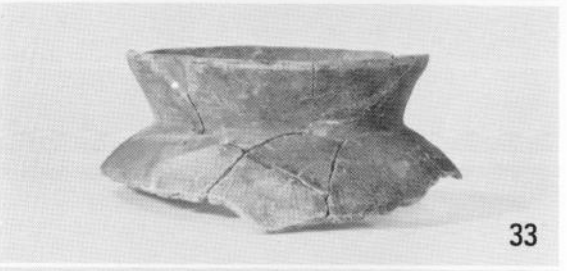
27

28


29

31

32


33

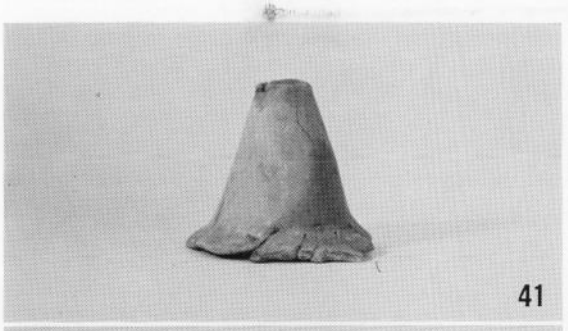
33

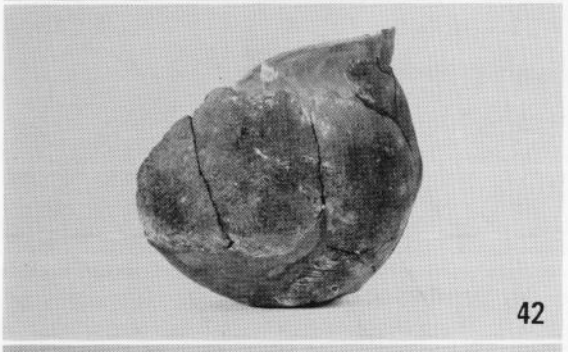
34

37

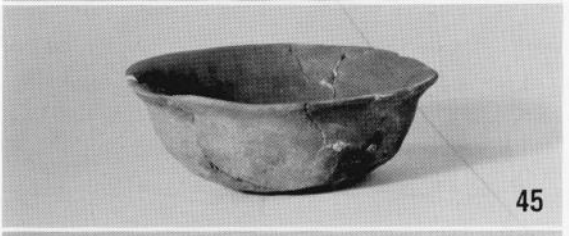
39

6号（25～29）・8号（31～34・37・39）竪穴住居跡出土遺物


41


42

44

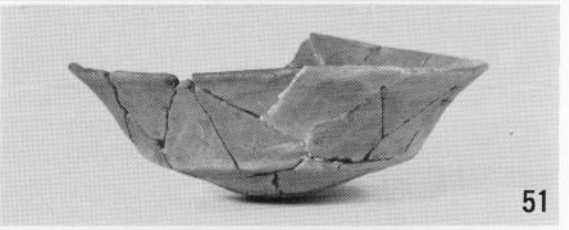

45

47

48

49

50


51

52

53

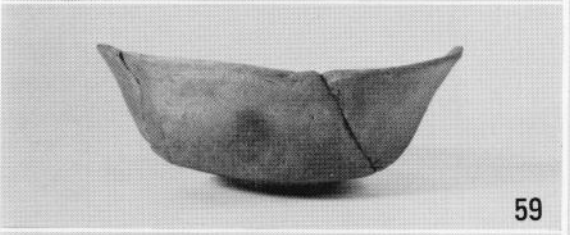
54

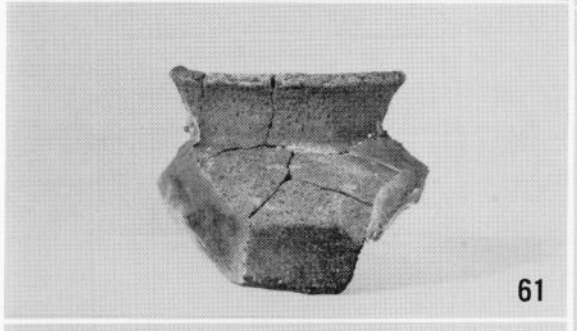
55

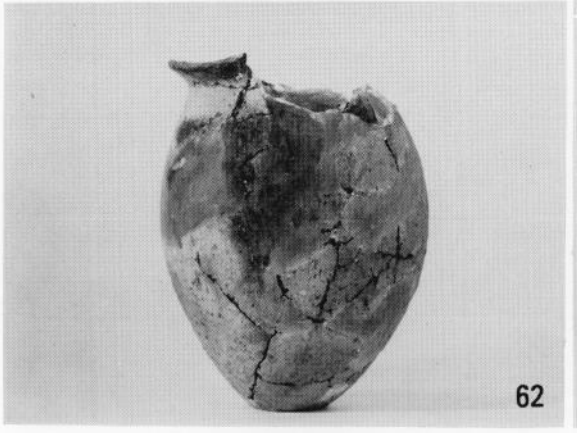
8号（41）・9号（42・44～45・47～55）竪穴住居出土遺物

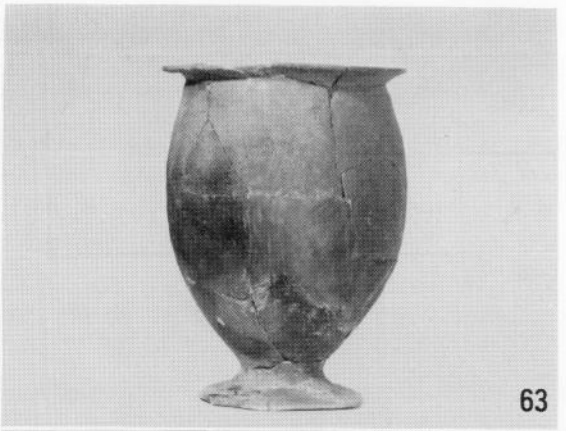
56

58


59


61


62


63

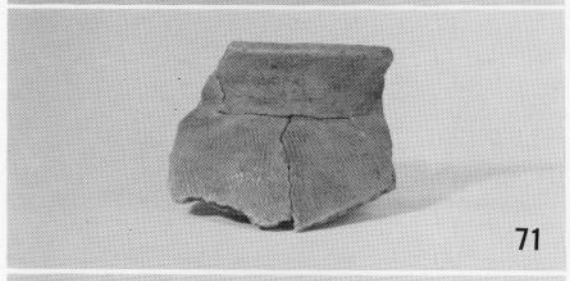
64

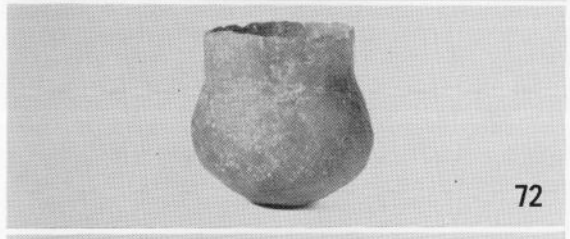
67

68

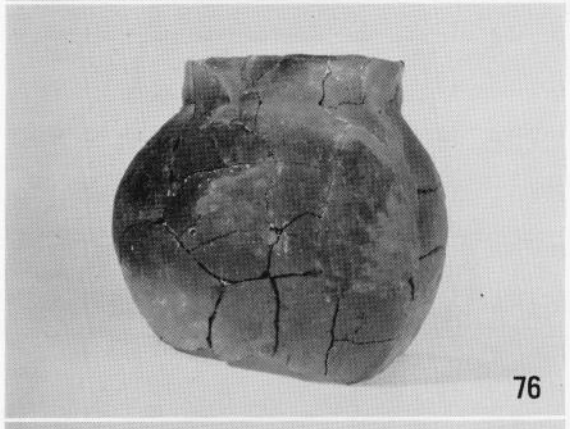
10号（56・58・59）・11号（61～64・67・69）竪穴住居跡出土遺物

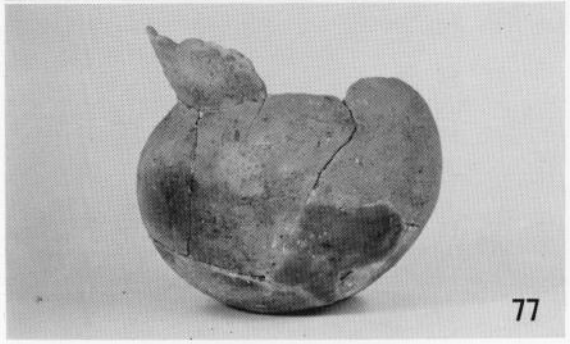
70

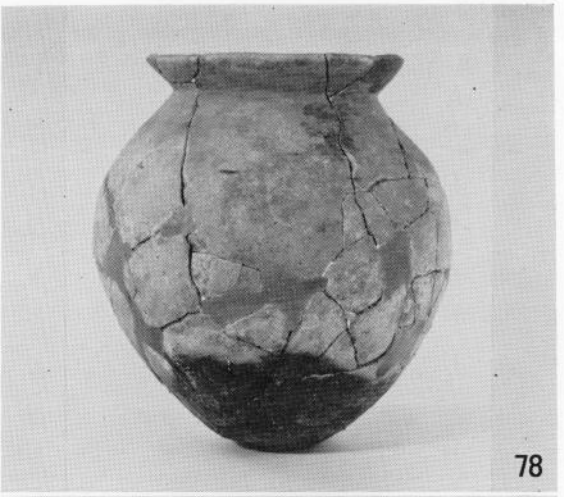

71

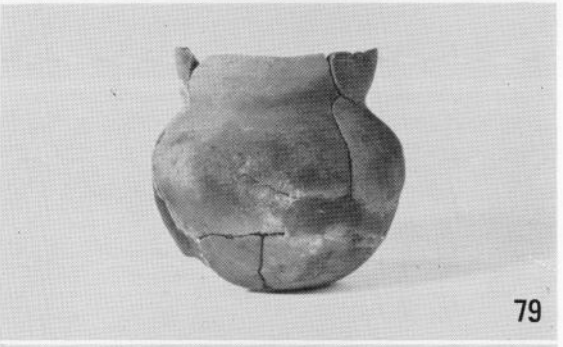

72

74

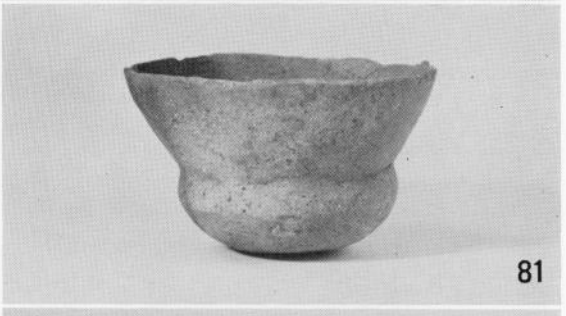

76


77


78

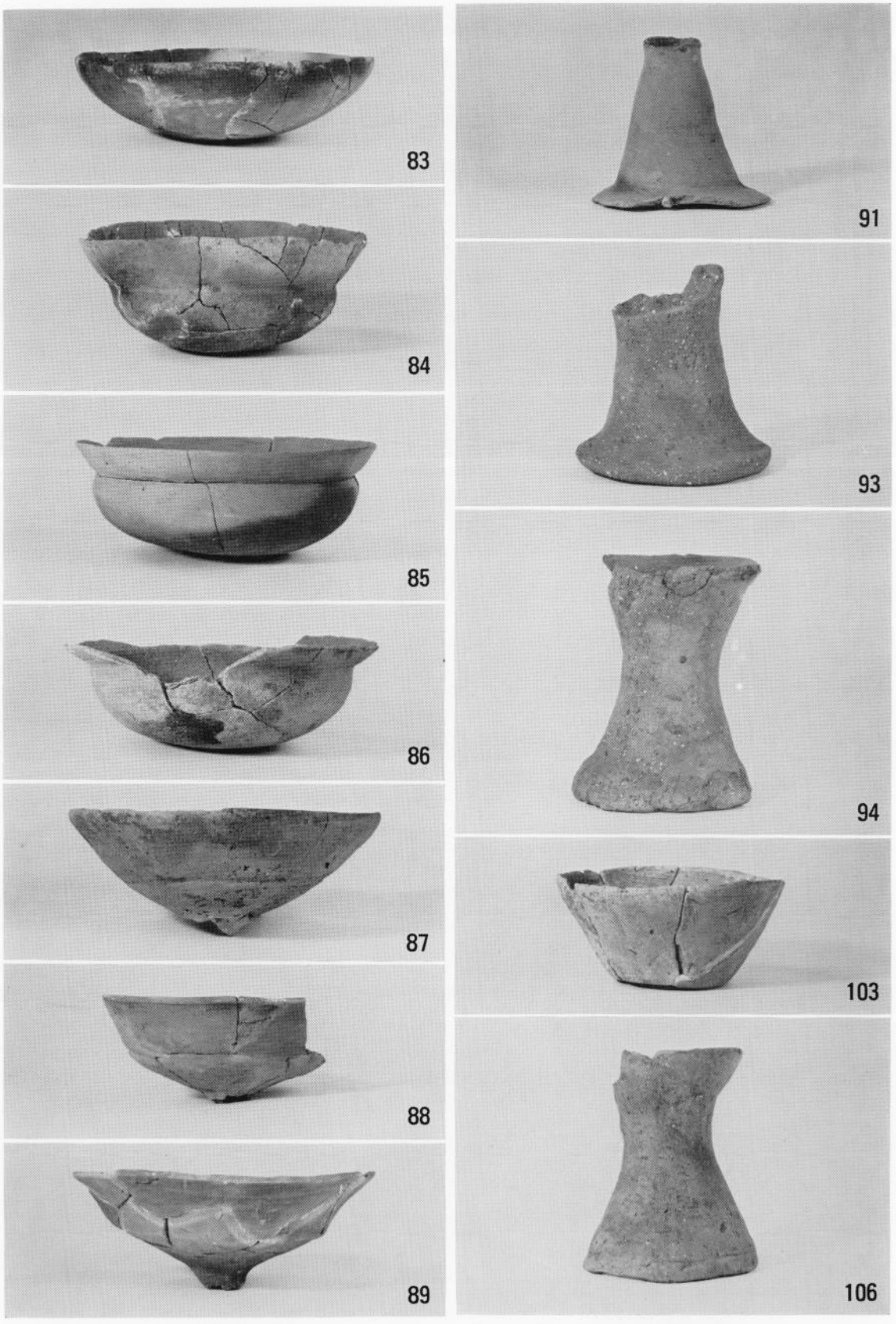

79

80


81

82

13号（70）・14号（71・72・74）・15号（76～82）竪穴住居跡出土遺物

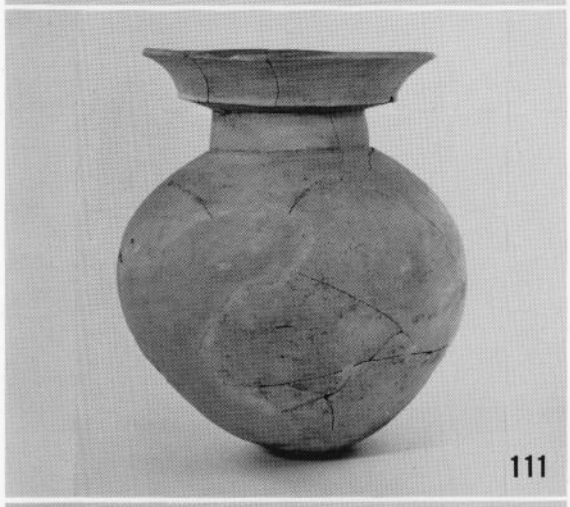


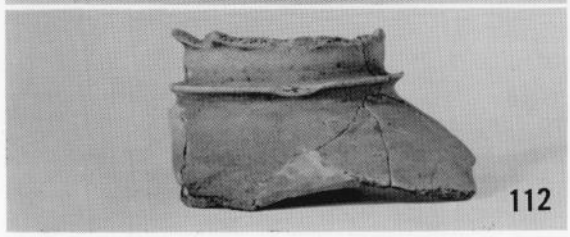
15号（83～89・91）・16号（93・94）竪穴住居跡・溝8最下層（103・106）出土遺物

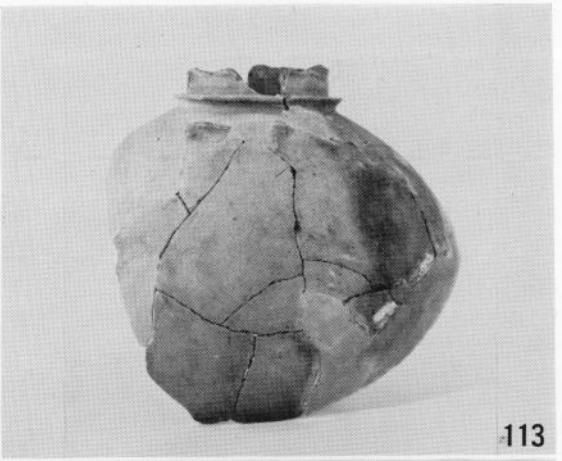
108

109

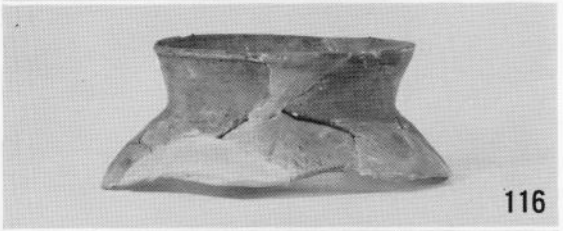
110


111

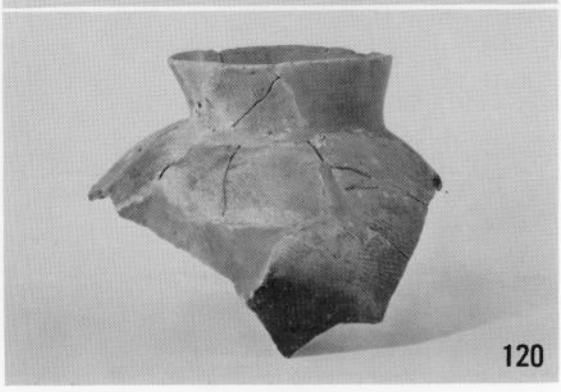

112


113

114

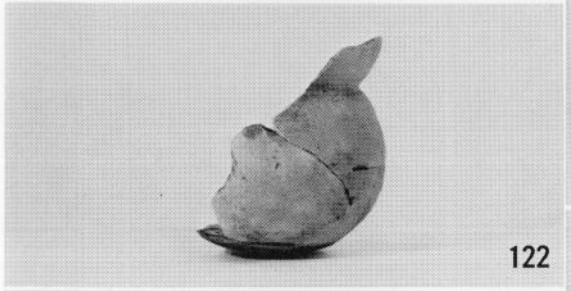

116

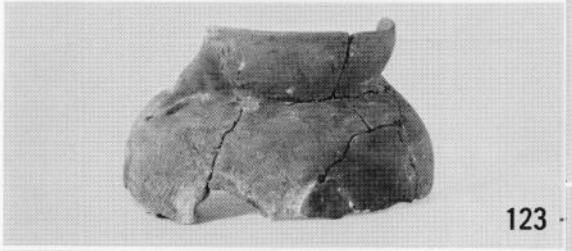
119

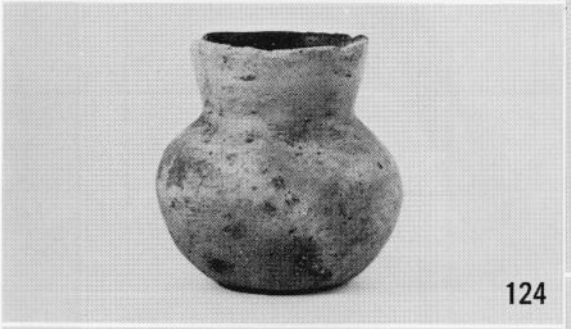

120

溝８最下層（108）・溝８上層（109～114・116・119・120）出土遺物

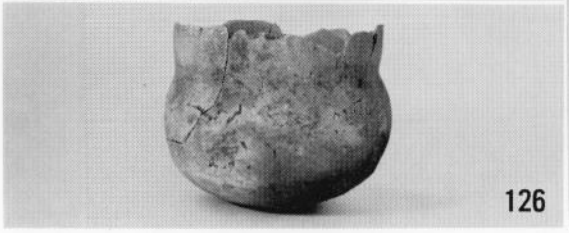
121


122


123


124

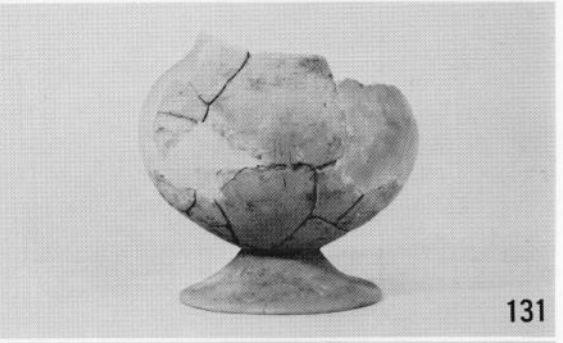
125


126

127

128

129


131

132

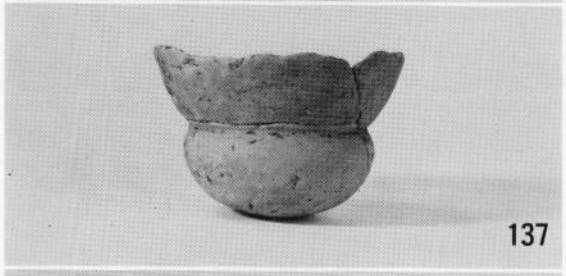
133

溝 8 上層出土遺物

134

135

136


137

138

139

141

142

143

144

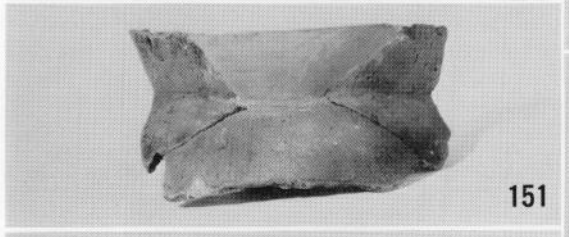
145

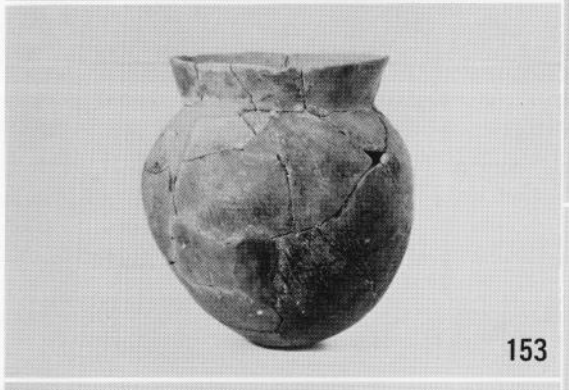
148

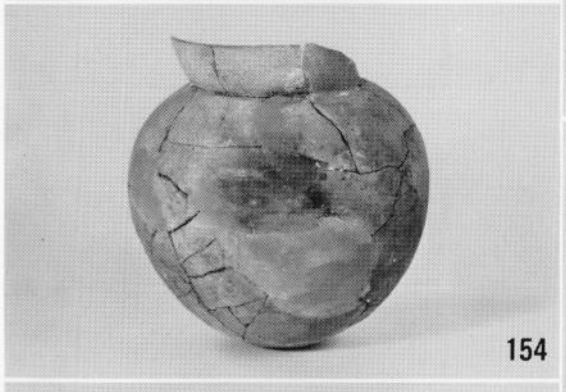
149

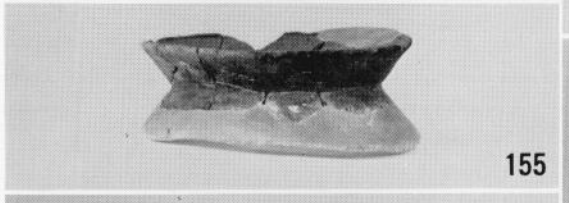
溝 8 上層出土遺物

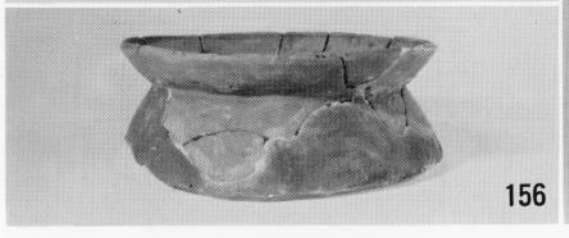
150

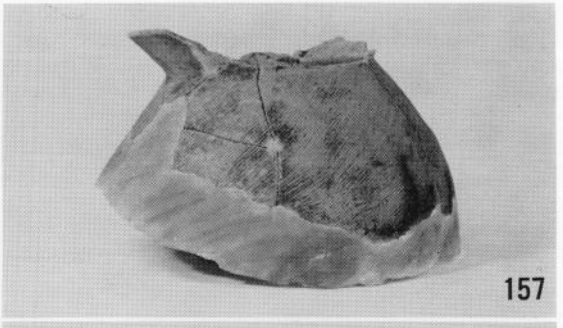

151

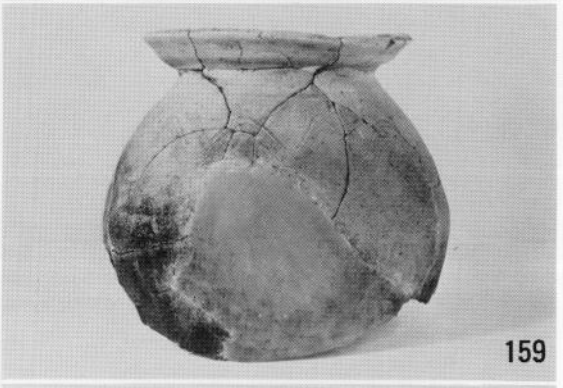

153


154

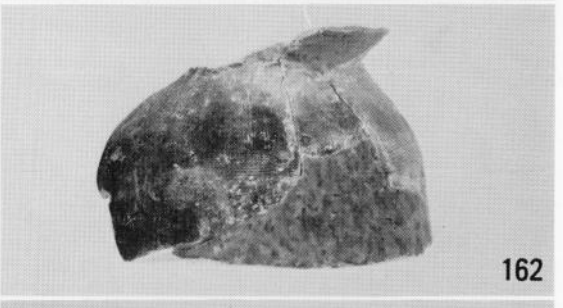

155

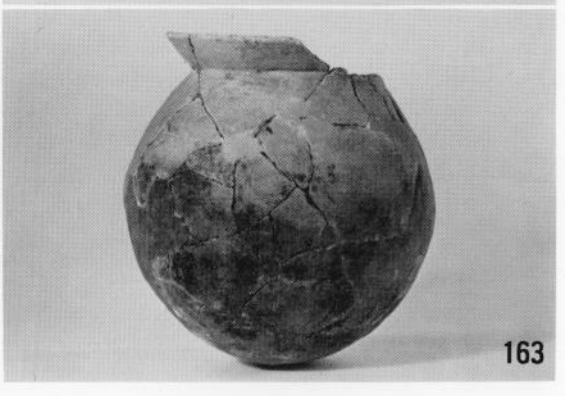

156


157

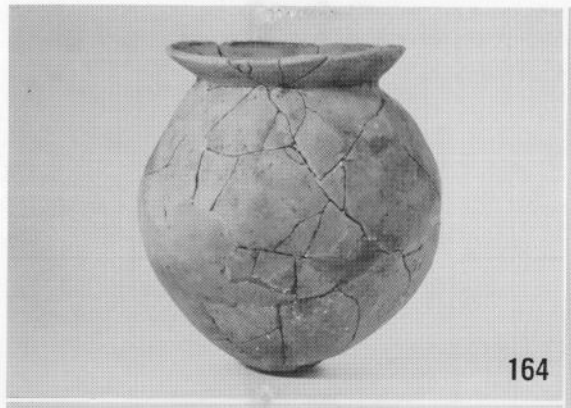

159

161

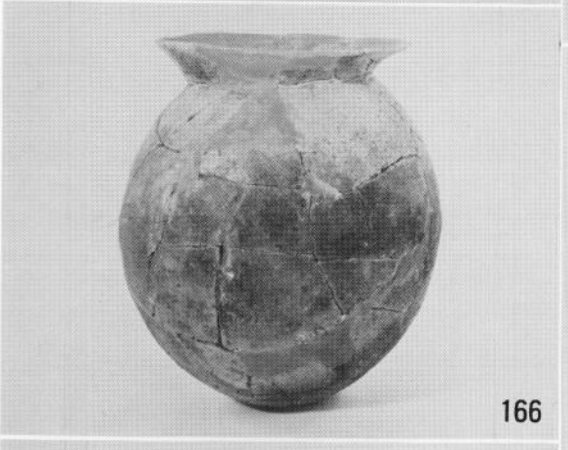

162

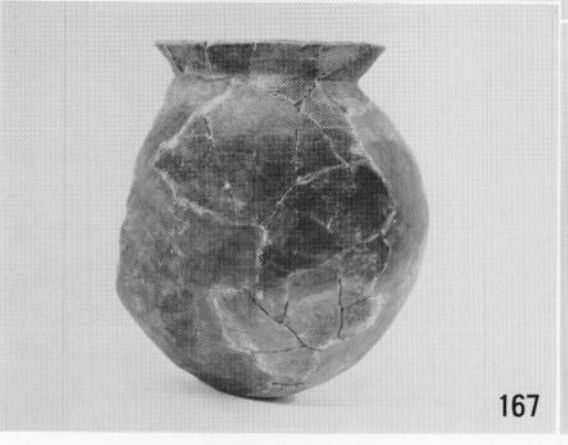

163

溝 8 上層出土遺物


164

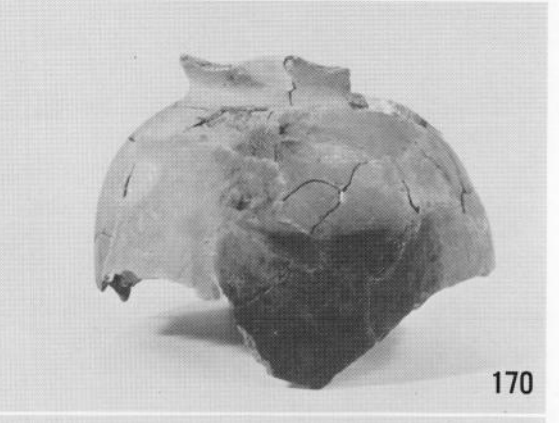
165

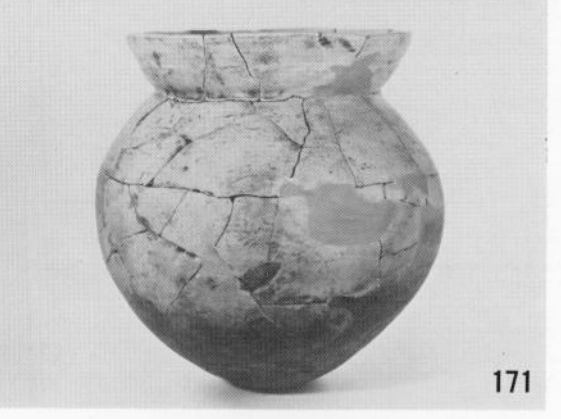

166


167

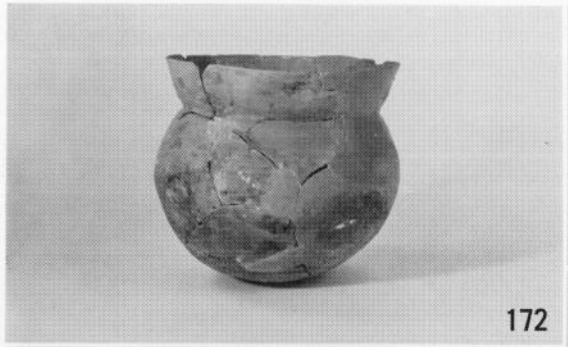
168

169


170

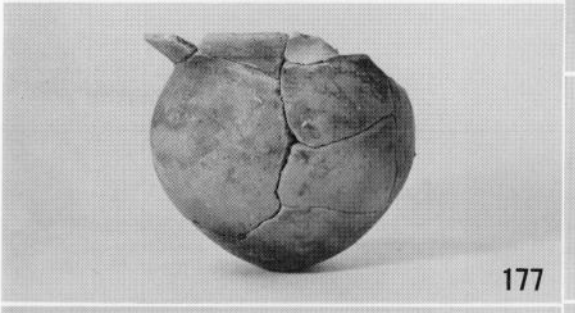

171

溝８上層出土遺物

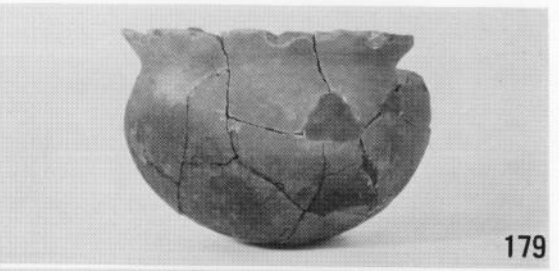

172

173

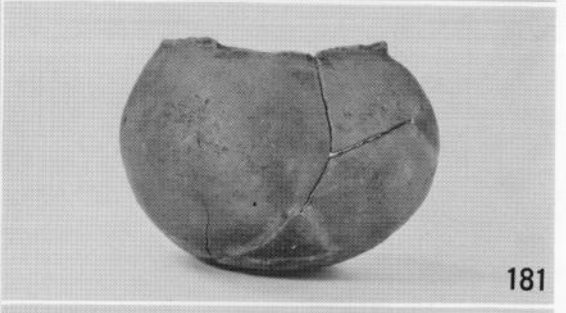
176


177

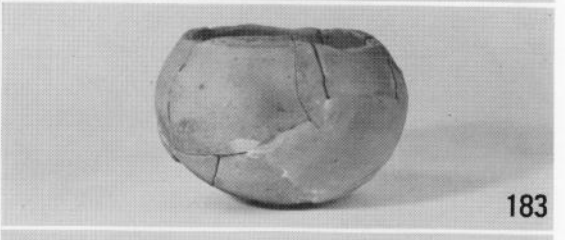
178

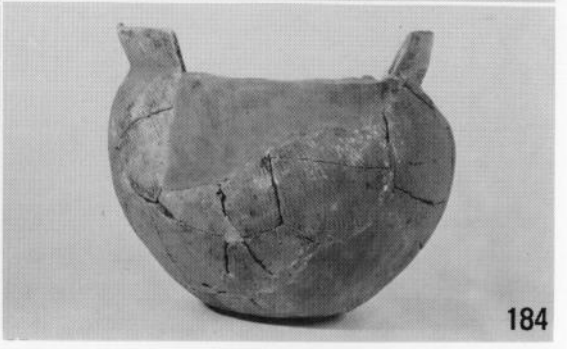

179

180


181

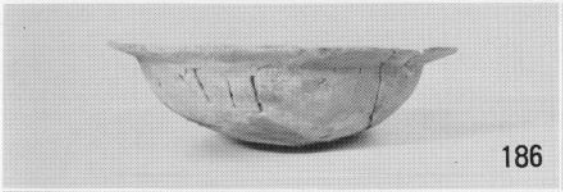
182


183

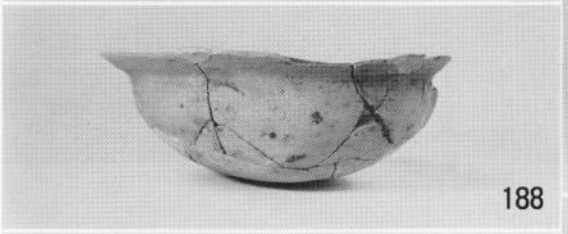

184

溝 8 上層出土遺物

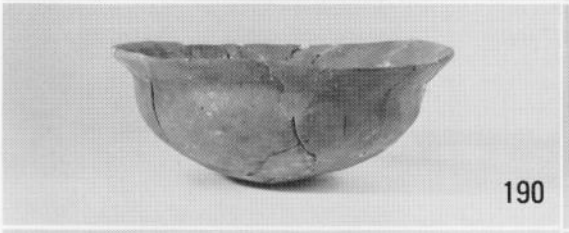
185


186

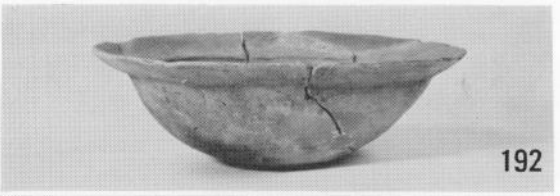
187

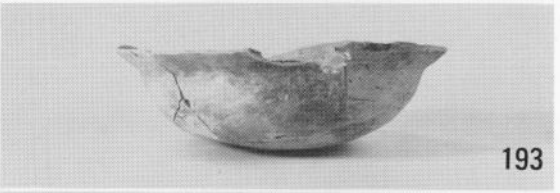

188

189


190

191

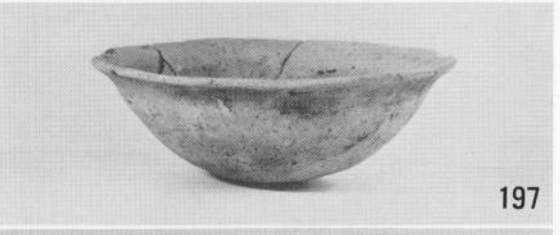

192

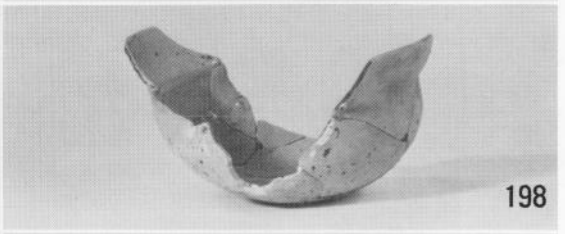

193

194

195

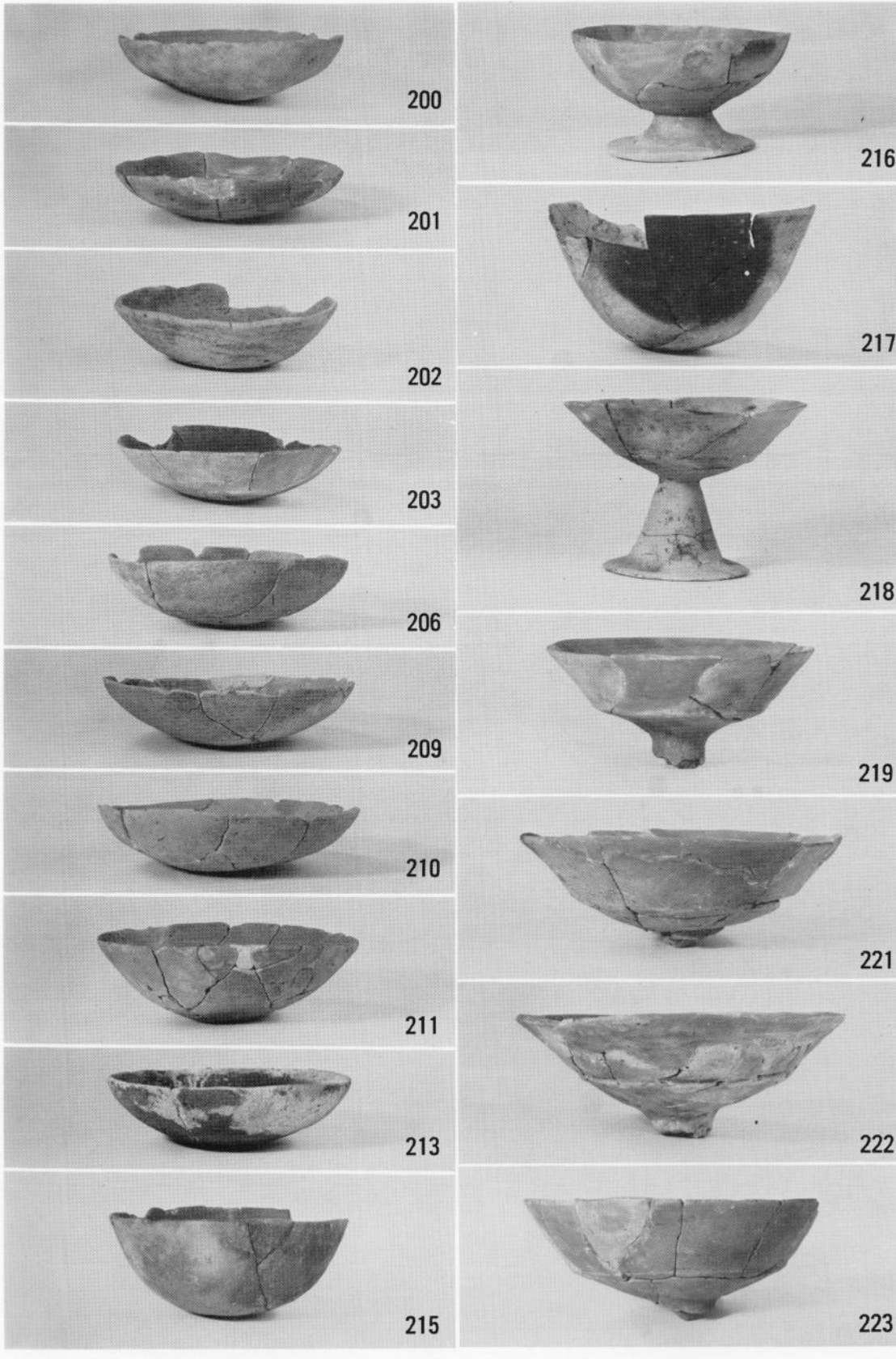
196


197


198

199

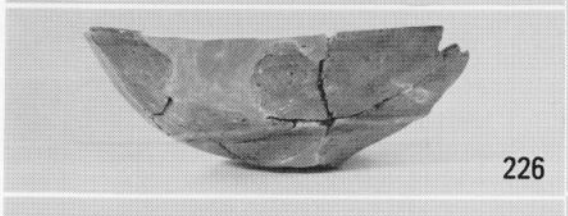
溝８上層出土遺物


200
201
202
203
206
209
210
211
213
215
216
217
218
219
221
222
223

溝８上層出土遺物

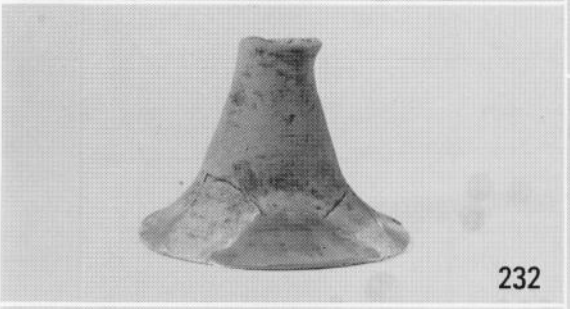
224

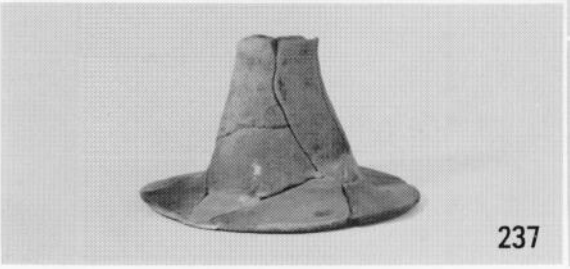
225


226

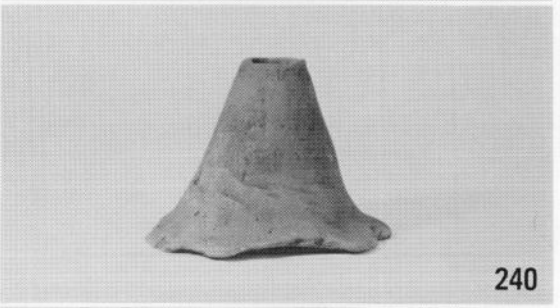
227

228


232


237

239


240

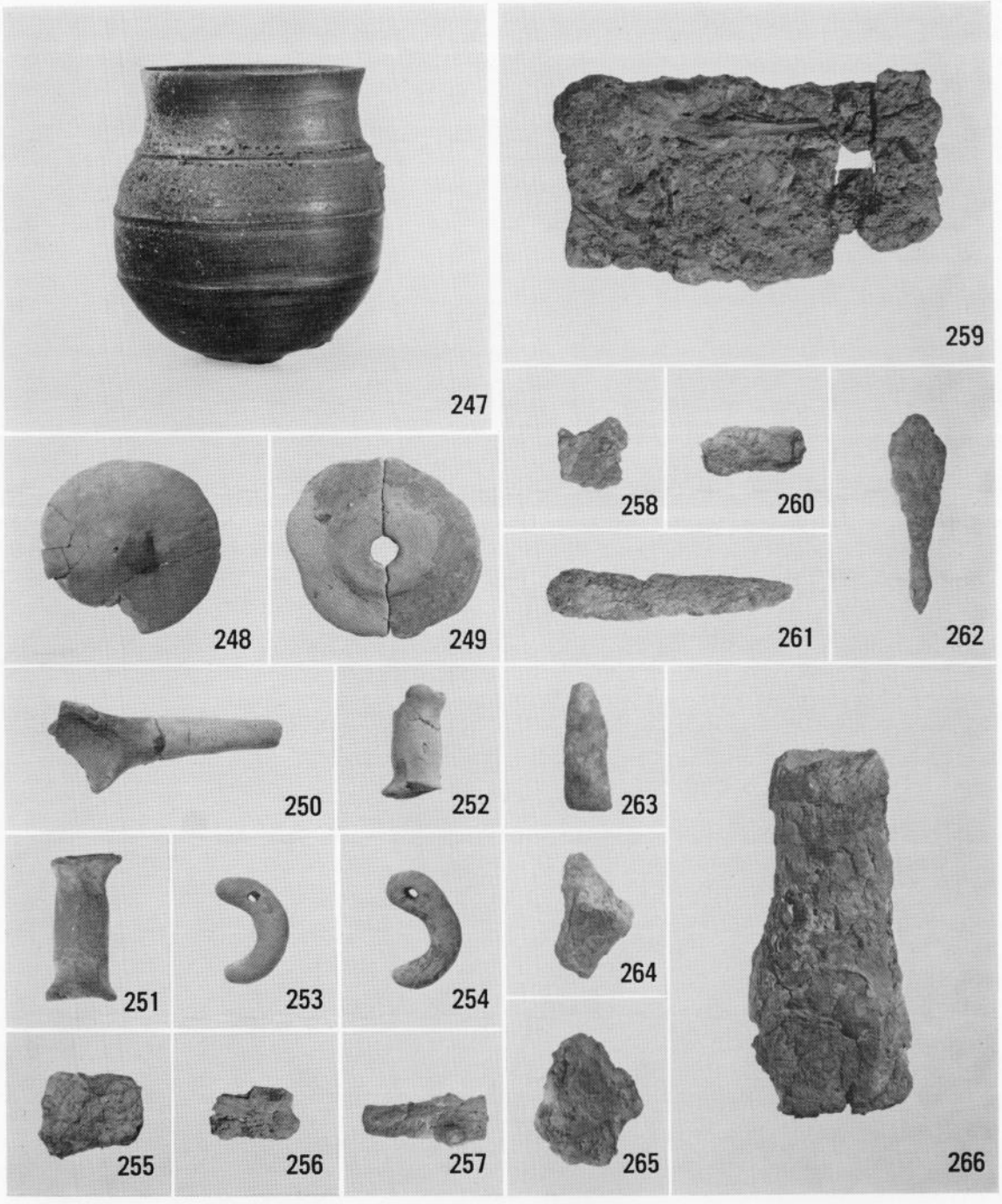
241

242

243

245

溝 8 上層出土遺物



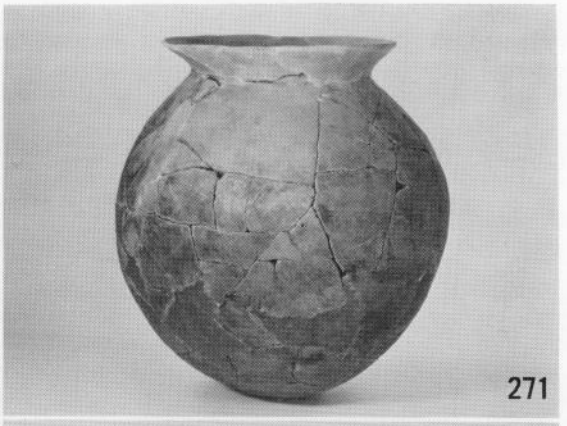
1号竪穴住（255）・3号竪穴住（256）・4号竪穴住（257）（258）（259）6号竪穴住（260）・11号竪穴住（262）・13号竪穴住（248）・16号竪穴住（263）（264）（265）・溝8上層（247）（249～254）（266）出土遺物

267

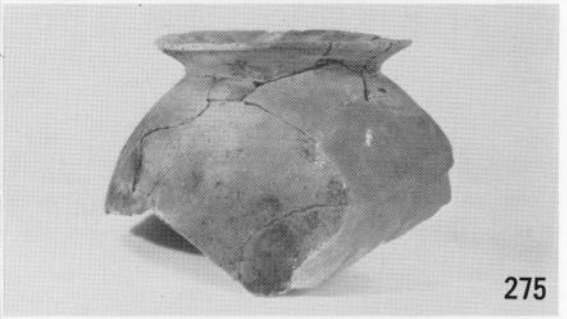
268

269

270


271

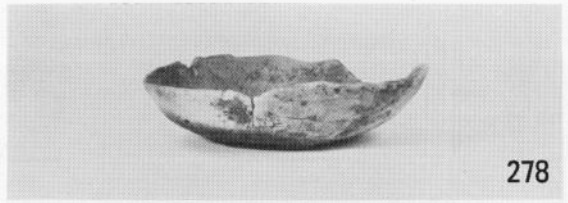
274

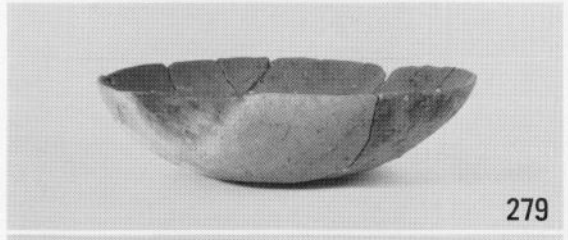

275

276

277

溝 9 出土遺物

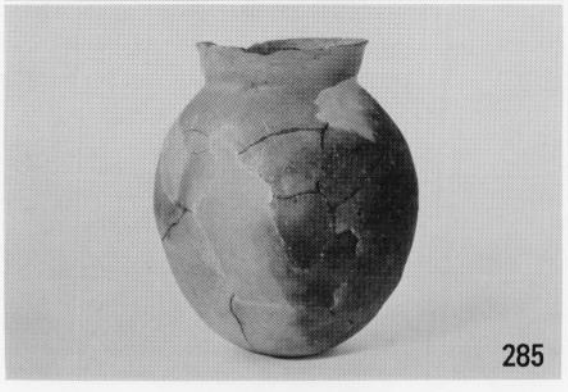

278

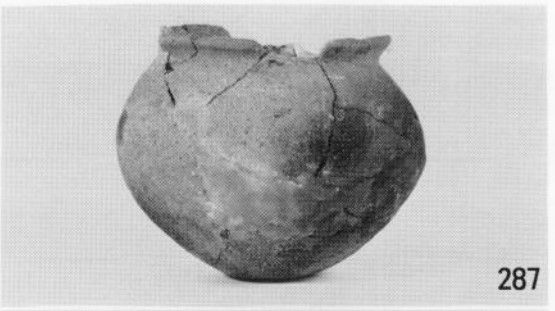

279

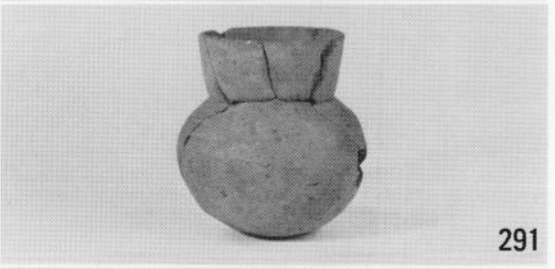
280

281

284


285

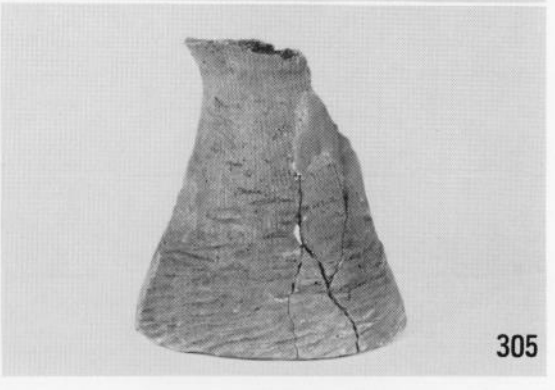

287


291

292

297

301


305

溝 9（278～280）・溝10（281）・旧河川 2（284～285・287・291・292・297・301・305）出土遺物

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —1—

昭和57年3月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷　株式会社 川島弘文社

福岡市東区箱崎埠頭6丁目4番4号